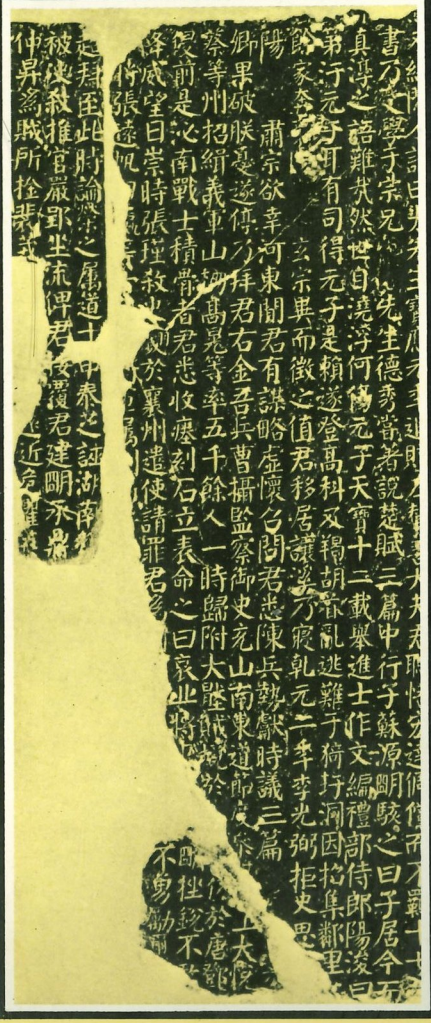
中国神話伝説集

松村武雄・編　伊藤清司・解説

現代教養文庫八七五



中国奇談集
中国笑話集
沖縄民話集
日本伝説集
日本笑話集

鈴木了三訳編
村山吉廣訳編
仲井真元楷編
武田静澄著
武田明著

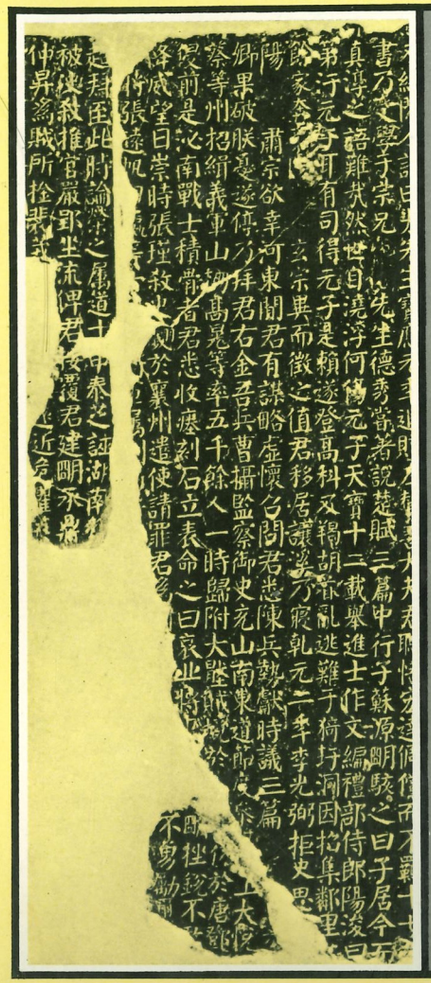
社会思想社
定価360円

0114-10875-3033

中国神話伝説集

松村武雄・編　伊藤清司・解説

現代教養文庫八七五



中国神話伝説集

松村武雄 編
伊藤清司解説

教養文庫
875
D
515
¥360

太初には天と地は相混じって、まるで鶏卵のようにふわふわとしていた。その中に盤古というものが生まれて来ると、初めて天と地との差別（けじめ）ができて、清いものは天空となり、濁っているものは大地となった。

その後は天空も大地も、それからこの二つの間に生まれた盤古もだんだんと成長して行った。天は一日に一丈ずつ高さが増して行った。地も同じく一日に一丈ずつ厚さを加えて行った。そして、その間に挟まっている盤古も、劣らじと一日に九度姿を変えながら同じく一丈ずつ背が延びて行った。……

天空と大地との間が今日のように遠く離れているのは、全くこれがためである。（『三五略記』）

本文「天地の創生」より

現代教養文庫

875

中国神話伝説集

松村武雄 編
伊藤清司解説

社会思想社

中国神話伝説集

松村武雄 編
伊藤清司解説

教養文庫

875

現代教養文庫
875

中国神話伝説集

松村武雄　編
伊藤清司　解説

社会思想社

中国神話伝説集　目次

天地の創生　一二
天地の分離　一二
太陽説話　一三
太陰説話　一六
星辰説話　一九
牽牛織女　一九
天の河に行った人間　二一
貝の中の美女　二三
生の星と死の星　二四
雨風雪の説話　三〇
雨を司る神　三〇
風を司る神　三三
雪を司る神　三八
雲雷の説話　三九
虹の説話　四八
人間製造　五四
五色の石と亀の足　五五
黄帝の昇天　五七
洪水説話　六一
唐山羽衣伝説　六三
唐様浦島(一)　六六
唐様浦島(二)　六七
唐様浦島(三)　七〇
唐様浦島(四)　七一
唐様浦島(五)　七三
嚢の中の鳥　七五

武陵桃源　七九
竹から生まれた男　八三
林檎樹から生まれた男　八四
継娘物語　八五
人間を吐き出す口　九〇
鬼酒鬼肉　九三
石亀の眼　九七
水を噴く臼　一〇〇
黄鳥の報恩　一〇一
読経魚　一〇三
鶴と明月珠　一〇五
人虎奇譚(一)　一〇八
人虎奇譚(二)　一一〇
烏喙将軍　一一三
碓の怪　一一五
多毛の人　一一八
巨人伝説　一二〇
小人伝説　一二六
神樹の最期　一二九
枸杞の精　一三一
梓の中の青牛　一三三
大亀と桑の精　一三四
怪剣物語　一三六
空飛ぶ木の鳶　一三九
愚公の山移し　一四一
弓の名人と油売り　一四四

人頭と椰子の実　一四五
蚕の起源　一四七
犬の大手柄　一五〇
説明説話(一)　一五三
説明説話(二)　一五六
夜叉物語　一六〇
龍蛇伝説　一六二
沈鐘伝説　一六九
仙桃説話　一七四
怪誕説話　一七九

注　一八三
解題　松村武雄　一九五

解説　伊藤清司　二〇五

本文中（）の数字は原注が一六三頁以下にあることを示す。
本文中の＊は解説者注が一六三頁以下にあることを示す。
なお、原注に対する解説者注は当該頁に原注に続けて示す。

天地の創生

太初には何物も存していなかった。ただ一種の気が濛々として広がり満ちているだけであった。そうしているうちに、その中にものの生ずる萌芽が始まって、やがて天と地とが現われた。

天と地とは陰陽に感じて盤古という巨人を生んだ。盤古が死ぬときに、その体がいろんなものに化して、天地の間に万物が具わるようになった。即ち息は風雲となり、声は雷となり、左の目は太陽となり、右の目は月となり、手足と体とは、山々となり、流れる血潮は河となり、肉は土となり、髪の毛や髭は、かずかずの星となり、皮膚に生えていた毛は、草や木となり、歯や骨は、金属や石となり、汗は雨となった。

他の神話によると、盤古が死ぬと、その頭は四岳となり、二つの目は太陽と月になり、脂膏（あぶら）は流れて河や海となり、髪の毛は化して草や木となったという。

また更に他の神話によると、盤古の頭が東岳に化し、腹が中岳に変じ、左の臂が南岳となり、右の臂が北岳となり、足が西岳となったとも言い伝えられている。（『述異記』・『五運歴年記』＊）

天地の分離

太初には天と地とは相混じって、まるで鶏卵のようにふわふわとしていた。その中に盤古というものが生まれて来ると、初めて天と地との差別（けじめ）ができて、清いものは天空となり、

濁っているものは大地となった。

その後は、天空も大地も、それからこの二つの間に生まれた盤古もだんだんと成長して行った。天は一日に一丈ずつ高さが増して行った。地も同じく一日に一丈ずつ厚さを加えて行った。そしてその間に挟まっている盤古も、劣らじと一日に九度姿を変えながら、同じく一丈ずつ背が延びて行った。

そうしているうちに、一万八千年という永い年月が経った。その間に盤古の身の丈が延びに延びて、九万里となった。九万里という恐ろしいのっぽうが、天と地との間に挟まることになったので、もともと相接していたこの二つが、九万里ほど隔たってしまった。

天空と大地との間が今日のように遠く離れているのは、全くこれがためである。(1)（『三五歴記』）

太陽説話

太陽の中には、烏がいるといわれ、また鶏がいるともいわれる。烏は火烏と呼ばれ、鶏は金鶏と呼ばれる。太陽にこもっている陽の精気が凝り集まってなったものである。だから火烏も金鶏もみな足が三本生えている。陽の気はその数が奇数であるからである。

太陽は車に乗って、一日に一回東から西へと空をかける。車には六頭の龍が結びつけられている。そして羲和というものが、それらの龍を御して、太陽の車をかけらすのであった。太陽はこうして朝に暘谷を出て、夕方に虞泉にせまると、世界がうす暗くなり、更に蒙谷に入ってしまうと、全く夜となる。昼と夜とはこうして生ずるのであった。(2)（『楚辞』その他）

鐘山という山に神がいた。その名を燭陰という。燭陰が目を見開くと、世界中がたちまち明るくなる。世の中の人は、これを昼と呼んでいる。燭陰が目を瞑ると、たちどころに世界中が真暗になる。世の中の人は、これを夜と呼んでいる。またこの神が口から息を強く吹くと、世界中が急に寒くなる。世の中の人は、これを冬と呼んでいる。彼が口を開いて呼ぶと、世界中がにわかに暑くなる。世の中の人は、これを夏と呼んでいる。(燭陰はまた一名、燭龍とも言われる)。（『山海経』）

北の方に鐘山という山があった。山の上に一つの石の首があって、人間の首そっくりの形をしていた。

その石の首には、二つの目と一つの口とがついていた。左の目は太陽で、右の目は月であった。石の首は左右の目をかわるがわる開く。左の目が開いているときは昼であり、右の目が開いているときは夜である。それから口が開いているときは、春と夏となり、口を閉じているときは、秋と冬となった。（『元中記』）

一の説話によると、太陽の精は、金鶏でもなく、火烏でもなくて、鬱華というものである。鬱華はまた鬱儀とも呼ばれる。鬱華は、もと人間界に住んでいた一人の仙人であったが、後

燭陰　最上段の中央にいる人面蛇尾の神像が燭陰である。別名、燭龍ともよび、昼と夜を掌る。燭陰の右にある烏のいるのが昼をあらわす太陽、左の蟾蜍と兎のいるのが夜を示す月である。図は先年、中国湖南省の長沙馬王堆漢代墳墓出土の帛画の一部。

に故あって天空に昇って太陽の中に留まることになったと言われる。（『黄庭経』の注に引く上清紫文）

堯の帝のとき、十個の太陽が大空に並び出た。一つでさえ、なかなか熱いのに、十の太陽がいっしょになって、かんかん照りつけたので、大地の草や木が、見る見る焦げ枯れ始めた。堯の帝は非常におどろきおそれて、

「これは大変なことになった。うっかりしていると、世界が焼け滅びてしまうであろう。太陽は一つでたくさんじゃ。あとの九つはどうにか始末しなくてはならぬ」

と考えて、弓を射ることに巧みな羿というものを呼んで、

「そなたに頼みたいことがある。速刻九つの太陽を射落としてもらいたい」

と言った。羿は仰せをかしこみて、すぐに大空に向かって、数本の矢を射放った。名人の手練に仇矢はなくて、九つの太陽にいる九羽の烏の体を貫いた。烏どもはみな死んで、はらはらと羽翼をおとした。こうして地上の人々はやっと無惨な焼死をすることを免れた。（『楚辞』天問篇の王逸の注）

『山海経』に載せた一つの説話によると、東南海の外、甘泉の間に、羲和国という国があった。この国に羲和と呼ばれる女があって、俊の帝の妃となって、十個の太陽を生んだ。かの女はいつも自分の子である太陽たちをつれて、甘泉に行って、水浴をさせたと言われる。堯の世

になって、弓の名人のために射殺された九つの太陽というのは、多分これらのものであろう。（『楚辞』・『淮南子』・『山海経』・『霊憲』・『五経通義』・『拾遺記』等参照）*

太陰説話

月の中には、一本の桂の樹が生えている。高さ五百丈というすばらしい樹である。そして樹の下に一人の男がいて、斧を振っては、絶えずこれを斫っている。しかし月の桂はいつまでたっても、伐り倒されそうにもない。なぜなら伐るにしたがって、片っ端から創が癒え合ってしまうからである。

男は、それでも一所懸命になって斧を振りまわしている。よせばいいのにと思うのは、この男の運命を知らぬからである。男の姓名は呉剛という。始めから月の中に住んでいたのではない。もとは西河の人で、仙人について仙術を学んでいたものである。

呉剛は、仙術を修めつくして、あっぱれひとかどの仙人になるつもりであった。ところがある日思わぬ過ちをしでかした。それがために仙人が怒り出して、

「お前のようなものには、仙術を修めさせるわけにゆかぬ。月の世界に追い放つことにする。月の中に大きな桂の樹が生えている。お前は自分の犯した過ちの罰として、その樹を伐らなくてはならぬ」

と言い渡された。

だから呉剛は、いつまでも月の桂に斧をあてているのである。（『酉陽雑俎』）

昔、あるところに羿と呼ばれる男がいた。彼は死ぬということを思うと、いつも身ぶるいするように嫌な気がした。

「おお嫌だ、嫌だ。折角この世に生まれて来て、いつかは死ななくてはならないなんて、なんとつまらないことだろう。なんとかしていつまでも生きつづけることはできないものかな」

と、いろいろ考えた末に、

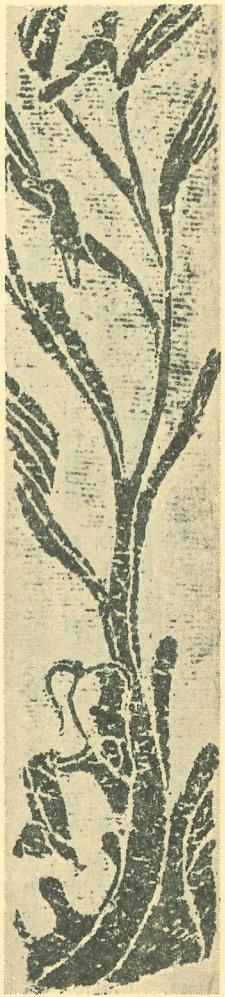
「そうだ、いいことを思いついた。西王母さまのところに行って、不死の薬を貰い受けることにしよう」

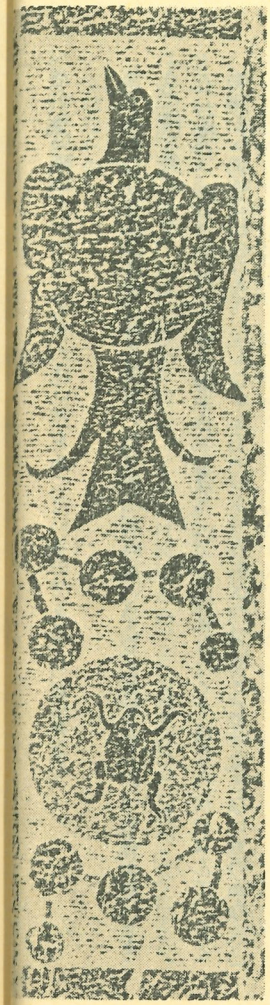
羿はこう思って、すぐに神人西王母の許に訪ねて行った。そしていろいろに頼み込んで、とうとう首尾よく不死の薬を手に入れた。

「しめたぞ、これさえあれば、いつまでたってもぴんぴんしていられるぞ」

と、大喜びで家に帰って来た。

ところが羿の妻の姮娥が、早くもそれを知って、ひそかに不死の薬を盗み取った。しかし夫に悟られては、どんな酷い目にあうかも知れぬと思ったので、薬を飲んで仙人となり、とうとう大空に逃げ昇って、月に身を託することになった。かの女は不死の薬でいつまでも生きつづけている。月の面に蟾蜍のような斑点が見えるのは、即ち姮娥の姿である。（『淮南子』・『太平御覧』・『霊憲』等）





月中の蟾蜍図　（左）上方に太陽を象徴する金烏、下方に月輪をあらわす蟾蜍。そして、その上下にある線でつないだ黒い丸印は星座を示す。四川漢代墳墓の壁画の一部。
（右）樹の枝に二羽の烏が止まっており、樹下でこれを射ているのが羿であり、羿射日の伝承を表現する。漢代の墓の壁画の一部。共に「中華人民共和国画像石碑刻拓本展」カタログより。

月の中には、一匹の兎が棲んでいる。これを玉兎という。夜になって、月が大空に照り出すと、一所懸命になって薬を搗く。世の中の人々に幸福を降すのは、この玉兎の業であると信ぜられる。玉兎は夜中あまり精を出して薬を搗いているので、昼になると、一度に疲れが出て、こくりこくりと眠ってばかりいる。そして日が暮れかかる頃になると、そろそろ起き出して、また薬を搗き始めるのであった。（『五経通義』・『傅咸文』等）

星辰説話

牽牛織女

大空に流れる天の河の東に、麗しい乙女がおった。天帝の娘で、織女と呼ばれた。

かの女は、機を織ることを仕事としていた。明けても暮れても、日ごと、杼を動かしている。杼の動くにつれて、雲霧消兼の美しい衣が織り出されるのであった。

織女は機を織りつづけるだけで、他にはなんの楽しみもなかった。そして絶えず仕事に追われているので、髪をつくろったり、面貌をととのえたりする暇もなかった。

天帝がそれを見て、そぞろに憐れみを催して、

「織女もほんとうに可哀そうだ。日ごと骨の折れる仕事ばかりして、いまだに独身で寂しく暮らしている。夫でも持たせたら、少しは気が晴れるだろう」

と考えて、天の河の西に住んでいる牽牛という男と結婚させることにした。

織女の生活は、急にはなやかになった。かの女は、結婚生活の明るさ楽しさに、すっかり酔ってしまって、機を織ることなどまるで忘れ果てたように、絶えず牽牛のそばにくっついていた。

これを見ると天帝は眉をひそめて、

「あの女にも困る。寂しさを慰めてやるつもりで、夫を持たせたら、すっかりおのが仕事を投げ出してしまった。どうにかしなくてはなるまい」

と言って、夫婦が住んでいるところに行って、

「織女、そなたは不心得千万じゃ。早く天の河の東に帰って、機を織るがいい。機を織るのが、そなたの天職じゃ。愛におぼれて、仕事をなおざりにするとは何事じゃ。今後は一年に一度だけ牽牛に会うことを許すことにするから、そう思うがよい」

と叱りつけた。

織女は夫のそばを離れるのが辛くてたまらなかった。しかし天帝の言いつけに背くわけにいかないので、夫に別れを告げて、すごすごと天の河の東に帰ってきた。そして明け暮れ機を織りつづけながら、年に一度の逢瀬を待ち侘びている。

牽牛と織女とが、年ごとに会う日は、普通に七月七日と信じられている。二人はこの日の来るのを、ひたすら指折りかぞえて待っている。しかしあいにくその頃に雨が降りつづいて、天の河の水量が増すと、七月七日という日が来ても、二人は会うことができない。東と西とに別れて、河の岸に突っ立ったまま、恨めしげに河の面を見つめていなくてはならない。そのいじらしさ悲

しさを見かねて、烏鵲が、天の河を渡す橋となって、織女を東の岸から西の岸へと渡してやると言い伝えられている。（『淮南子』・『述異記』(3)）

天の河に行った人間

大空に白く流れている天の河は、人間世界にある海とつながっている。海辺には年々浮木が流れ漂っているが、これこそ天の河に住む人たちが、大空と人間界とを往来する舟なのである。

昔、博望侯張騫というものが、漢の武帝から、

「天の河の源を探ってまいれ」

という仰せをこうむった。張騫は浮木に乗って天の河に行こうと思って、たくさんの粮を用意して、海辺に出て見た。すると折よく浮木が見つかったので、すぐにそれに飛び乗った。

浮木は張騫を載せたまま、昼から夜に、夜から昼に、どこともなく流れ漂って行った。彼はなんだか気が茫となって昼と夜との区別がわからなくなってきた。

幾日か幾月かたつと、とあるところに漂い着いた。見ると、目の前に大きな館が聳え立って、その中の部屋で大勢の女が機を織っていた。張騫はかすんだ目をこするようにして、

「一体ここはどこだろう」

と呟いた。すると一人の男が逞しい牛を引っぱって流れに降って来た。そして水際に立って牛に水を飲ませ始めたので、張騫が声をかけて、

「もし、ここは一体なんというところです」

と尋ねた。男はその声で人間がいるのに気がついて、じろじろと張騫の顔を眺めていたが、

「驚いたね、お前はどうしてこんなところにやって来たのかね」

と言った。

「一体ここはどこなのです」

と、張騫がまた同じことを尋ねた。すると牛をつれた男は、それには答えないで、

「お前は、蜀の厳君平を知っているだろう」

と言った。

「知っていますよ」

と、張騫が答えると、

「じゃ、蜀に行って、君平に聞いて見るがいい」

と、牛をつれた男が言った。

張騫は何が何やらわからなくなって、また浮木の流れるままに身を任せていると、やがて人間世界に帰ってきた。そこですぐに蜀に行って、厳君平に会って、今までの出来事をくわしく話した。そして、

「一体わしはどこに行ったんだろうね」

と尋ねると、君平は、

「君が不思議な目にあったというちょうどその日に、星が斗牛を犯した天象が見えたよ。だから君は、天の河に行きついたのださ」

と答えた。（『博物誌』）

貝の中の美女

謝端が十七になった時のことである。ある日海の中で一つの大きな螺を手に入れた。あまり大きくて珍しいので、家に持って帰って、甕の中にしまって置いた。するとその後は、謝端が野良から帰って来るたびに、家の中がちゃんと片づいていて、火がおこって、湯が沸いて、食事の用意ができているのであった。

「一体どうしたというんだろう。わしの家には、わしの他に誰もいないのに、留守の間に、食事の支度ができているなんて、いかにも合点がゆかぬ。よし、ことの次第を見届けてやろう」

彼はこう思ったので、ある日いつものように野良に出かけて行くふりをして、そっと引き返した。そして籬の外からひそかに様子をうかがっていると、やがて甕の中から一人の麗しい少女が現われて来た。

「おやっ、変なところから、少女が現われたな。あの甕の中には、いつぞや海から拾って来た大きな螺が入っているだけだと思っていたのに……」

と、なおも様子を見ていると、少女はかいがいしく煮炊を始めて、やがてすっかり食物を用意してしまった。謝端はいきなり家の中に駆け込んで、驚く少女に、

「あなたは一体誰です。どうしてわたしの家に来て、食事の世話をしてくれるのです」

と尋ねた。少女はにこりと笑って、

「わたしは天の河の白水素女です。天帝があなたが独身で、貧しくて、そして気立てのよいのを哀れんで、わたしをやってあなたのお世話をおさせになったのです」

と答えた。謝端はこれを聞くと、

「それはどうもかたじけないことです。いつまでもわたしの家に留まっていて下さい」

と言った。少女は頭をふって、

「それは駄目です。わたしはあなたのために好いお嫁さんを捜し出して、それから天の河に還るつもりでしたが、あなたがわたしのことを怪しんで、時ならぬ時に現われていらっしゃったから、わたしはもうこの家に留まることができなくなりました。ここにまだ貯えのお米が残っています。これを置いて行きますから、どうかお使い下さい。決して米には不自由をなさらぬでしょう」

と言った。と思うと、風が吹き雨が降り出して、少女の姿が見えなくなった。（『捜神記*』）

生の星と死の星

昔、管輅という人があった。彼はいろんな術に通じて、過去のことでも未来のことでも、はっきりと知ることができるのであった。

五月のある日、南陽の野原を歩いていると、一人の少年が、田の中で麦を刈っているのを見た。管輅は少年の顔を見ると、思わず悲しそうな吐息をして通り過ぎた。

少年はそれを怪しんで、管輅に声をかけて、

神仙打碁図　両方の人物の背にある羽根は神仙をあらわす。現代のそれとやや異なるが、すでに碁は漢代以前から行なわれていた。単なる遊戯ではなく、一種の占いの性格があったものと推測される。四川出土の漢代墳墓の壁画図。『四川漢代画像選集』より。

「どうしてあなたは、そんな悲しそうな吐息をおつきになるのです」
と尋ねた。管輅は少年の姓名を聞いた。少年が、
「姓は趙、名は顔と申します」
と答えると、管輅は言葉をつづけて、
「実はお前さんは二十歳をこえないうちに死ぬことになっているのだよ。それが気の毒で、覚えず吐息をついたのじゃ」
と言った。これを聞くと、趙顔はおどろき恐れて、たちまち管輅の足もとに身を投げながら、
「それは大変でございます。どうかわたくしの命をお助け下さい」
と、ひたすら哀願した。しかし管輅は、
「いや、気の毒じゃが、人間の寿命は、天のつかさどるところで、わしの手ではどうにもならぬのじゃ」
と言いすてて立ち去った。
趙顔は、身も世もあらぬ気持ちになって、大急ぎで家に駆けもどった。そして父にそのことを話すと、父も非常に驚き悲しんで、
「それは本当に一大事じゃ。どうしてもそのお方にお願いするよりほかはない」
と言って、わが子といっしょに馬に乗って管輅のあとを追っかけた。十里ばかり駆けつづけると、やっと管輅に追いついた。親子は馬から飛び下りて、彼を伏し拝んで、一所懸命に命を長くして下さいと願った。

管輅はとうとう可哀さに負けて、
「それでは、家に帰って清酒を一樽と、鹿の肉を一斤ほど用意して置いて貰いたい。そしたら卯の日にわしが訪ねて来て、なんとか工夫をして見るから」
と言った。親子は非常に喜んで、すぐに家に帰って、言いつけられた通りの支度をして、ひたすら管輅が訪ねて来るのを待ち侘びていた。
卯の日になると、管輅がやって来た。そして趙顔にむかって、
「お前さんが麦を刈っていたところの南に、大きな桑の樹があって、その下で二人の男が碁をうっている。で、お前さんは、そっとその側に歩み寄って、酒を杯についで、肉を並べて置くのじゃ。そしたら二人は、その酒を飲んで肉を食べるだろう。杯の酒がなくなったら、またついで置くがいい。そのうちに二人が、お前さんのいるのに気がついて、何者じゃ、何しに来たと尋ねるに違いない。その時お前さんは、口をきいてはいけない。ただ黙ってお辞儀をしていなくてはならぬ」
と教えてくれた。
趙顔は教わった通りに、大きな桑の樹のところに行って見ると、果たして二人の男がその下で碁をうっていた。趙顔は静かにその側に歩みよって、鹿の肉を並べ、酒を杯についだ。二人の男は、碁に夢中になっていたので、趙顔がやって来たことにも、酒肴を並べ立てたことにも、まるで気がつかなかった。しかし酒があり肴があるのは目についているので、誰が持って来たかということなどは考えないで、碁をうつ手があきさえすると、杯の酒を飲んでは、鹿の肉を口に詰

め込むのであった。趙顔も黙々として、しきりに杯に酒をついだ。

しばらくすると、一局が終った。二人の男はほっとわれに返って顔を挙げた。と、見知らぬ少年が自分たちの側に立っていたので、北側に座っていた一人が非常に腹を立てて、

「お前は何者じゃ。何用あってここに来た?」

と叱りつけた。しかし趙顔は、管輅の教えを守って、ただうやうやしくお辞儀をするだけで、なんとも返答をしなかった。

しばらくすると、南側に座っている男が、北側に座っている男にむかって、

「他人の酒を飲み酒を喰った以上、知らぬ顔をしているわけにも行くまい。なんとかしてお礼を言わなくては、あまり無情に過ぎるね」

と言い出した。北側に座っている男は、これを聞くと、困ったような顔をして、

「しかし文書はもう決まってしまって、たやすく改めるわけには行かぬではないか」

と言った。南側に座っている男は、

「まあ、そう言わずに、その文書を貸しておくれ」

と言って、北側に座っている男から文書を借りて、ぱらぱらと繰りひろげていたが、趙顔の名を記したところに来ると、ぴたりとそこに目をつけた。文書には、趙顔の命は十九歳となっていた。男は、

「よし、これを改めることにしよう」

と言って、筆をとり上げて、十九をひっくりかえして九十にした。趙顔はこれを見て、心の中でしめたと思った。南側に座っている男は趙顔の方をふり向いて、

「お前の命を延ばしてやったよ。九十歳までは大丈夫だよ」

と言った。趙顔はもう嬉しくてたまらないので、むやみにお辞儀をして、大急ぎで家に帰って来た。

管輅は彼からその話を聞くと、

「うまくいってよかった。これで安心だろう」

と言った。趙顔は、

「あの二人の方は一体どなたでございます」

と尋ねた。管輅はにこりと笑って、

「北側に座っていたのは北斗星で、南側に座っていたのが南斗星じゃ。そして南斗星は生を注し、北斗星は死を注するのじゃ」

と語った。

親子の喜びは一方ではなかった。そして趙顔の父はやがて帛と金を持ち出して、

「お陰さまで、息子の命が助かりました。こんな嬉しいことはございません。これはまことにつまらぬものではございますが、ほんのお礼のしるしにお納め下さい」

と言った。しかし管輅はそれらの品には手も触れないで、飄然として立ち去ってしまった。(『捜神記』)

雨風雪の説話

雨を司る神

雨を降らすことを司る神は、雨師と呼ばれる。『淮南子』に、

「雨師をして道に灑がしめ、風伯をして塵を掃わしむ」

とあり、『礼記』月令にも、

「立夏、有司に命じて雨師を祀らしむ」

と見えている。それならば雨師という神は何者であるかと言うと、『列子』には、赤松子神農氏が雨師であると言っている。なるほど、神農氏は雨と深い関係がある。『尸子』の中にも、神農氏が天の下を治めているときには、自分の力で自由に雨を降らせて、五穀をよく実らせたということが出ている。

しかし雨を降らせるものは神農氏に限られたことではなく、民間の信仰や説話には、いろんな人物がこの役割を引き受けているように思われる。『神異記』の言うところによると、西海の上に、一個の異人があって、真白い衣を纏い、赤いたてがみをした白馬にまたがって、十二人の童子を従えながら、飛ぶように馬を駆けらせる。そしてその至るところの国には、雨がさんざめいて降り出すのであった。

昔、劉毅というものが、あるとき涇水に沿うた路端で、一人の女が羊の世話をしているのを見

て、怪しんで、

「どうしたのです。こんなところで羊を飼っているなんて。あなたは一体誰です」

と尋ねると、女は、

「わたしは洞庭湖の龍君の少女（むすめ）です」

と答えた。

「羊を飼って、何にするつもりです」

と、劉毅が重ねて尋ねると、女は笑って、

「これは羊ではありませんよ。雨工ですよ。まあ雷霆のようなものですよ」

と答えた。（『異聞録』）

萍郷の玉女ガ岡という岡があった。天が雨を降らせようとすると、まず五色の雲気が、その岡の石の間から湧き出て来るのであった。人々はそれを見ると、

「玉女が衣を披いたな」

と言うのが常であった。玉女が衣を披くと、雨がどんどん降ると信じられた。唐の段成式の詩にも、そうした信仰が描き出されている。（『安城記』）

唐の開元中に、旱魃がつづいたので、一行というお坊さんに、明皇が雨を祈るように命じた。一行は、承知したが、

「龍の状のついている器が一つ欲しいものでございます」

と言った。そこで帝が家来たちに言いつけて、あまねく内庫を探させたが、どうしてもほどよい品が見つからなかった。数日たって、古い鏡に龍の状のついているのを見つけて、一行がそれを持って、道場に入ると、一夕にして雨が降り出した。（『酉陽雑俎』）

風を司る神

風を司る神は、いろんな名の下に考えられている。第一には風師である。第二は飄師である。『周礼』に「飄師を祀る」と見えている。第三には風伯である。『韓非子』に、

「風伯は掃を進め、雨師は道を灑ぐ」

とあり、『淮南子』に、

「風伯をして塵を掃わしむ」

とある。しかし風師、飄師、風伯というのは、要するに「風を司るもの」を意味するに過ぎない。それなら風を司るものの本名は何であったかというと、これもいろいろある。『呂氏春秋』によると、風師の名は飛廉となっているが、『楚辞』や『風俗通義』では、風伯の名が、飛廉で、風師の名は箕星であるとしている。更にまた『荊州星占』の言うところに従うと、箕星は一名巻舌とも呼ばれ、これが動くと、大風が起こると信じられた。それから、『括地図』によれば、鐘山に燭龍という神があって、それが息をつくのが、風である。全くは神になりきらないで、人間らしい面目を備えた風の司もある。『幽怪録』に見えた巽二、「酉陽雑俎」に

現われる封姨、もしくは十八姨、『潜確類書』に載せた孟婆の如きこれである。

以上はみな人格的な風の司であるらしいが、一方には、これらよりもいっそう原始的な考え方によって、ある動物もしくはある物を風の源となしている。いわばアニミズムの信仰観念に近い見方であると見てよかろう。『山海経』によると、獄濛山という山の中に山狸という獣が棲んでいる。歩くのが非常に迅くて風のようである。そしてこの獣が現われると、風が吹き出すと信じられた。また『水経注』に従うと、屈県に風山という山がある。山の上に一つの穴が開いていて、輪のような形をしているが、これが風の吹き起こる門であると言われる。

中国では、一年中の時々の風にいろんな名をつけている。『山海経』を見ると、凱風とか条風とか、その他さまざまの風が出ている。九月に吹くのを鯉魚風というが、これに類した風に、離合風、烈士風、幽人風、羽客風等がある。その他、小寒の頃吹くのを花信風といい、五月に吹くのを麦信風となし、十月の初めの五日に吹くのを五風と呼ぶ。面白いのは、石尤風である。また鄭公風というのがある。若耶渓に吹く風をそう呼ぶのであるが、これらに一場の由来譚がある。

昔、石氏の娘が、尤郎に嫁いだ。二人は非常に仲がよくて、いつも影の形に添うようにしていた。と、ある時、尤が商売上の用事で遠くに行かねばならぬようになった。妻は、

「あなた、どうか行かないで下さい。わたし一人で寂しいんですもの」

と、しきりに引き留めたが、尤はそれをふり切って出て行った。そしてどうしたのか、いつまで

も帰って来なかったので、妻はとうとう病気になってしまった。病いが次第に重くなって、死にかけたとき、かの女は、

「ほんとうに、あのときたって引き留めればよかった。今後商用のために遠くに出かける男があったら、わたしがきっと大風を起こして、天が下の女のために引き留めて上げる」

と言って、息が絶えた。それ以来旅商人たちが、船を乗り出すとき、逆風に会うと、

「やあ石尤風が吹き出したぞ。今日の船出はとり止めだ」

と言って、旅出を思いとまるようになったと伝えられる。（『江湖紀聞』）

昔、鄭弘という男が、毎日のように白鶴山にわけ入って、薪を採っていた。と、ある日一本の箭が落ちているのを見つけて、拾って帰った。するとある人が訪ねて来て、

「どうかそなたの拾った箭を返してもらいたい」

と言った。鄭弘はすぐに返してやった。客は非常に喜んで、

「何かお礼をいたしたい。欲しいと思うものを言っておくれ」

といった。鄭弘は、その人の容姿が世の常と異なっているのを見て、心の中で、

「この客はきっと神人であろう」

と思った。そこで、

「わたしは、毎日、白鶴山の若耶渓に行って、薪を採るのですが、風のためにひどく苦しむことがあります。これをどうにかしていただきたい」

と言うと、相手は、

「いいとも、どんな風が欲しいと思うのかね」

と尋ねた。

「朝に南風が吹いて、日暮れに北風が吹いたら、なにより結構です」

と、鄭弘が答えた。これを聞くと、客は、

「よろしい、承知いたした」

と言って立ち去った。それ以来若耶渓には、朝に南風が吹き、日暮れに北風が吹くようになった。そこで土地の人たちが、それを鄭公風と呼ぶようになった。（『後漢書』鄭弘伝の注）

昔、処士の崔玄微というものが、道術にふけって、いつも霊草を服していた。

ある時、霊草がつきたので、童子たちを連れて、嵩山に分け入った。そしてあちらこちらと霊草を探し歩いて、一年ばかりして帰って来ると、屋敷には草が茫々と生い茂って、人けもなくなっていた。折から春の夜のことで、風が清く月が朗らかに照らしていた。

玄微は、一間に座ったまま眠りかねていると、三更過ぎて、どこからとなく青い衣を纏った乙女が現われて、

「数人の女といっしょに十八姨のところに訪ねて行こうと思っていますが、しばらくの間ここに休ませていただきたい」

と言った。玄微がこれを許すと、やがて十人あまりの乙女が入って来た。そして、緑の裳をつけ

たものは、楊氏であると言い、緋の衣を纏ったものは、阿措と名乗った。
みんなが座についたかと思うと、門の外で十八姨がやって来たという声がした。これを聞くと、
「まあ、ちょうどいいところだったのね」
と言って、喜んでこれを出迎えた。十八姨と呼ばれる老女が入って来ると、なんとなく一道の風気が座に溢ぎるような気がした。そしてそれにつれて芬々たる花の香りがあたりに漂い始めた。
やがて酒が出て、みんな歌ったり舞ったりした。十八姨が威張り加減に酒を傾けていた。そうしているうちに、十八姨が手にしていた盃から、酒がこぼれて、阿措の緋の衣を汚した。阿措は顔色を変えて、十八姨を睨みつけながら、
「みんなはお姨さんが恐くて、大騒ぎをして御機嫌をとっていますが、わたしはけっしてそうではありませんよ。少し気をおつけなさい」
と言って座を立った。で、みんなも立ち上がって、十八姨は南の方に立ち去り、他のものは玄微の庭の花園の中に入って行った。
翌晩も乙女たちが、玄微の家に集まった。そして、そのうちの一人が、
「さあ、これから十八姨さまのところに行って、お世話を頼んで置きましょうよ」
と言うと、阿措が、それを遮って、
「姨さんなんかに頼むより、この家の御主人に頼んで置いた方がいいわよ」
と言った。
「そうね、それがいいわ」

と、みんながこれに同意した。すると、阿措は玄微のいるところに来て、
「わたしたちは、みんなあなたのお庭に住んでいるものでございますが、毎年悪い風に悩まされるので、いつも十八姨さまに助けを頼んでいます。が、昨夜姨さまの機嫌をそこねましたので、今年は駄目でございます。どうかあなたに助けていただきたいと存じます」
と言った。玄微は驚いて、
「いや、わたしにはそんな力はありませんぞ」
と答えると、阿措は、
「なに、大したことをお願いするのではありません。毎年赤い幡を一つこしらえて、それに日月五星を書いて、お庭の花園の東に立てて下されば、それで風の災いを免れることができるのでございます」
と言った。
「そんなことなら、お安いことです」
玄微がこう答えると、乙女たちは声を揃えて感謝の意を表し、うやうやしくお辞儀をして座を立った。玄微も立ち上がって、月あかりにあとからついて行くと、花園のところで乙女たちの姿が、掻き消すように見えなくなった。
玄微は頼まれたとおりの幡をこしらえて、花園の東に立てた。と、その日に烈しい風が吹き出して、砂を飛ばしたり樹を折ったりしたが、玄微の庭の花だけは、少しも動かなかった。それに気がつくと、玄微はにこりと笑って、

「なるほどこれでやっとわかった。あの乙女たちはみな花の精だ。緋の衣をつけた阿措というのは柘榴に相違ない。そして十八姨という老女は風の神だったのだな」

と独り言を言った。

それから二、三日たった夜、乙女たちがまた玄微の家に訪ねて来て、桃や李の花をたくさん渡して、

「どうかこれをお飲み下さい。そうすればいつまでも年をお取りになりませんから」

と言った。玄微は教わった通りにした。すると体が健やかになって、いつまでも若々しい姿を保っていた。(4)（『酉陽雑俎』）

雪を司る神

雪を降らすことを司る神は、青女という女性であった。『淮南子』天文訓に、

「秋三月……青女すなわち出でて、以て霜雪を降らす」

とあり、『淵鑑類函』にこれを引いて、

「青女は霜雪を司る神なり」

とある。青女という名は、雪の青白い色から取ったものであろう。

昔、周の霊王が昆明という高台をこしらえた。そして多くの方士を召して、酒宴を催すことにした。あちらこちらから大勢の方士が集まって来たが、そのうちの二人は、空を飛ぶ輦に乗って

やって来て、盛んに酒をあおって、とうとう酔いつぶれてしまった。

その頃ひどい旱魃がつづいていたが、たまたま酒宴の最中に、あまりの暑さに地が裂けて木が燃え出した。人々が大騒ぎをしていると、空飛ぶ輦に乗って来た方士の一人が、むくりと起き上がって、

「お騒ぎめさるな。それがしがほどよく取り計らって進じ申す」

と言った。人々はどんなことをするかと思って、目を見はり息をこらしていると、その方士は静かに歌をうたい出した。そして大きく息を吸い込んで、それから強く吹き出したかと思うと、見る見る雲が湧き出て、雪が紛々と降り出した。方士は歌によって雪を召し出したのであった。（『拾遺記』）

雲雷の説話

雲を起こすことを司る神は、雲師と呼ばれ、雷をとどろかすことを司る神は、雷師と呼ばれる。『春秋説題辞』には、

「雲師を豊隆という」

とあるが、豊隆は雲師というよりは、むしろ雷師であったらしい。『楚辞』に、

「われ豊隆をして雲に乗らしむ」

とあり、『淮南子』に、

「季春三月、豊隆すなわち出でて、以てその雨をおこなう」

とあるが如き、雲師というよりも、雷師であるにふさわしい書きざまである。それなら雲を司るものはなんという名であったか。『呂氏春秋』によると、

「雲師を屏翳という」

とある。これが当たっているらしい。なぜなら雲は、ものを屏り翳らすものであるからである。また雲中君という雲の神もある。

赤帝の女（むすめ）に姚姫というのがあった。まだ人妻とならないうちに、若くして死んだ。赤帝は哀れみ悲しんで、巫山の陽（みなみ）に丁寧に葬ることにした。そこで人々はこれを巫山の女と呼びならわしていた。

あるとき、楚の懐王が、高唐というところに遊びに出かけたことがあった。一日うつらうつらと昼間の夢を貪っていると、だしぬけに一人の麗しい乙女が現われて来た。王が驚き怪しんで、

「そなたは誰じゃ」

と尋ねると、乙女は恥ずかしそうに微笑んで、

「巫山の女でございます。高唐の地に遊びに参っていたところ、王がいらっしゃったと承って、訪ねて参ったのでございます。もしお気に召したら、お側にいて、お伽を致したいと存じますが」

と言った。王は喜んで、乙女と枕席を共にした。

乙女は王の許から帰って行くとき、

「わたしは、巫山の陽に住んでいるのでございます。そして旦には、朝雲となり、夕には行雨となるのでございます」

と言った。

朝になって、懐王が、

「いや楽しい夢を結んだものではある。あの乙女の言ったことは真実かしら」

と思って、巫山の方を見やると、果たして一抹の朝雲が美しくたなびいていた。そこで王は乙女のために廟を建てて、これに朝雲と名をつけた。（『文選』）

天上に駆雲使者というものがある。上帝に使われて、雲を駆り雨を降らす役をつとめるものである。ところが、あるとき誤ってあまりたくさん雨を降らせ過ぎた。上帝はこれを知ると、大いに怒って、

「不届至極じゃ。罰として人間界に流すことにする。早く行け」

と言った。駆雲使者は恐れ入って人間界に降って来た。そしてとある石の洞穴の中に隠れて、流謫（しまながし）の期限が来るのを、ひたすら待ちこがれていた。

しかし永い間洞穴に隠れているうちに、退屈でたまらなくなったので、ある夜外に遊びに出て、心やりにいろんな不思議なことをしていた。たまたま張某というものがあって、その夜古い廟に宿っていた。張は燭を消して寝たが、夜中にふと目を覚まして見ると、あたりの廟の中が真昼

のように明るくなっていた。張は大いに怒って、

「何者の悪戯じゃ」

と叱りつけると、燈の光がおのずと外へ移って行った。張はそれを追っかけて行って、松の樹の下に投げつけると、ぱっと消えてしまった。

翌朝早く松の樹の下を探ると、大きな石の洞穴が見つかった。

「昨夜の怪物は、きっとこの中に潜んでいるだろう」

と思ったので、里の人たちを呼び集めて、

「この洞穴を掘り返して見るがいい」

と言った。里の人たちはすぐに鋤を持ち出して掘り返すと、大きな錦被が見つかった。開いて見ると、中に一つの屍がつつまれてあった。目が三つあって、臂が四つあって、口から白い烟を吐いていた。人々は驚きおそれて、どうしていいかわからなかった。張は、

「怪しいものじゃ、焼いてしまうがいい」

と言って、薪を集めて、その屍を焚いてしまった。それは駆雲使者であった。

駆雲使者は、張のために自分の体を焼き傷つけられたが、霊魂は死ななかった。そこである人の侍者の体を借りて、一個の美少年となって、張の前に現われて来た。そして張に向かって、

「わしは駆雲使者じゃ。罪があって人間界に降り、昨夜出でて遊んでいる間に、そなたに見つかって、とうとう体を焼かれるようなことになった。仕方がないので、ある人の侍者の体を借りてやって来たのじゃ。そなたは一刻も早く某の道士を呼んで、四十九日が間、霊飛経を読

ませてもらいたい。そうすればわしの体が火の中からあつまって全きことを得るであろう。そなたは、本来、提督一品の官に上る運命を持っていたが、こんなことをしでかしたので、上帝が怒って、その運命を記したところを削ってしまわれた。だから把総となって、それで終わるであろう」

と言った。

これを聞くと、張は大いに恐縮して、駆雲使者に言われた通りにした。と、少年はたちまち大空に飛び上がって姿を消してしまった。張は果たして把総になると、ぴたりと昇進がとまってしまって、とうとうそれで身を終えた。(『新斉諧』(5))

雷がどうして起こるかということを説明する神話には、この他に、いっそう原始的なものが存していることを忘れてはならぬ。東方朔の『神異経』によると、中国を遠く離れた荒野に、一つの石の鼓があった。径千里という途方もない大きな鼓である。それを叩くと、天地に轟き渡る音を立てる。それがすなわち雷である。そして天帝がこの鼓を使って、自分が喜んだり怒ったりした心持ちを示すのであったと言われる。『河図帝通記』に、

「雷は天地の鼓なり」

と記してあるのも、多分こうした意味であろう。それから『神異経』の注には、電光がどうして起こるかということを説明した一つの神話が載せてある。男性の仙人の群れの首領、東王公がときどき王女といっしょになって、投壺の遊びをする。それがうまくゆけばいいが、時に仕

損ずる場合が少なくない。すると天がそれを見て、口を開いてからからと笑う。そのときに烈しい光が流れ出る。それがすなわち電光であるというのである。また王充の『論衡』を見ると、民間では、雷公というものが太鼓を叩くのが雷であると信じたらしい。雷公は一人の若い力士の姿をしている。そして幾つかの太鼓を連ねたものを持っていて、ときどき左手でこれを引き、右の手でこれを推す。そのときに起こる音が、すなわち雷であるとされた。以下雷に関する興味ある若干の説話を挙げることにする。

昔、陳という姓の猟師がいた。

陳の家に一匹の犬が飼ってあった。珍しい犬で、九つの耳を持っていた。そしてその犬が、一つの耳を動かすと、一匹の獣が捕れ、二つの耳を動かすと、二匹の獣が捕れるというように、動く耳の数で、捕れる獣の数が、ちゃんとわかるのであった。もし耳が一つも動かない日には、いくら陳が山の中を駆け廻っても、さっぱり獲物が無いのであった。

ある日、その犬の耳が九つとも一時に動き出した。それを見た陳は非常に喜んで、

「今日は、すばらしい獲物があるに違いないぞ」

と、勇み立って山に入って行った。ところが案に相違して、朝早くから正午まで狩り立てても、一匹も捕れなかった。陳はすっかり気をくさらして、ぶつぶつ犬に小言を言っていた。

と、たちまち犬が駆け出して、地が凹んでいるところに行って、けたたましく吠え立てながら、足でそこを掘り始めた。陳は驚き怪しんで、深く掘り下げて見ると、一つの卵が見つかった。た

雷公打鼓図　右側が雷神。太鼓を打って雷鳴をとどろかせている。なお、左側は風神で、口から風をおこしている図。山東省出土の後漢時代の墓にある壁画の一部。『金石索㈢』より。

だの卵ではない。斗のように大きなものである。

陳は珍しがって、その卵を持って帰って、几の上に載せて置いた。すると翌日の朝早くから雷が轟き雨が降り出して、目を射るような電光が家をめぐって閃き渡った。陳はおどろき恐れて、

「どうも変だな。あの卵のせいかも知れないぞ」

と言って、卵を抱えて庭に持ち出した。途端に霹靂一声耳を裂いたかと思うと、卵がさっと二つに割れた。陳がこわごわ卵のそばに歩み寄って見ると、中に一人の子供が入っていた。絵に描いたように眉目が立派なので、陳は非常に喜んで、抱えて部屋の中に入った。そして自分の子として大切に育てることにした。

その子は大きくなって進士の試験に及第し、進んで本州の太守となった。そして才があり知恵に富んで、よく人民を治めていたが、五十七歳になったとき、にわかにその腋の下に翅が生えた。と思うと、大空高く舞い上がって、姿が見えなくなった。人々はこれを祀って雷祖と呼ぶようになった。(『新斉諧』)

雷公がある時、雨を降らしたり雷を轟かせたりすることにあまり精出し過ぎて、疲れ果てて病気になってしまった。天界では、代わりのものがいなくてひどく困った。そこで鬼どもが、人間界に降って、あちらこちらを歩き廻っていると、一人の男が昼寝をしていた。鬼どもはその側に集まって、つくづくその寝顔を眺めながら、

「どうだい、その男の口の尖っている具合は、雷公そっくりではないか」

「なるほど、これはよく似てるね。この男に雷公の代わりをつとめてもらおうじゃないか」

と語り合っていたが、やがて斧を取り出して、男の袖の中に入れて、引き立てて行った。

昼寝をしていたのは、董某という男であった。董は夢心地のうちに壮麗な館に連れられて行った。そして一間に呼び入れられると、殿上に座っていた王者らしいものが、

「楽平県の某村の女朱氏が至って不孝者で、いつも姑を苦しめている。これを罰しなくてはならぬが、あいにく雷公が病気で寝込んでいる。そなたに符を授けるから、よろしく雷公の代わりとなって働いてもらいたい」

と言った。

董は命を拝して出かけて行った。そして足の下を見ると、雲が湧いて電光が閃き渡っていた。某村の界に来て、空中から見下ろすと、果たして一人の女が、姑を罵ったり苦しめたりしている。そして大勢のものがそのまわりに集まって、わいわい騒いでいるのが、ありありと目についた。董は、案内のものにむかって、

「あれが朱氏という女だろうか」

と尋ねると、案内のものが、そうだと答えた。そこで董は、袖の中から斧を取り出して、女を目がけて投げ墜した。斧は誤たず女にあたって、たった一撃でたおしてしまった。見ると、大勢のものがおどろき懼れて、地面にぺたりと座り込んでしまっていた。

董が館に帰って来て、王者らしいものに、朱氏の女を殺したことを告げると、相手は大いに喜んで、

「どうじゃ、このままわしのところに留まっていては。相当の職を授けることにするが……」
と言った。董は、
「有り難く存じますが、母が年老いていますので、仰せに従うことができません」
と答えると、王者らしいものは、
「それなら無理に引き留めぬことにしよう」
と言って、人間界に送り帰してくれた。と思うと、董は昼寝の夢から覚めた。
彼は非常に不思議に思って、楽平県某村を調べてみると、果たして朱氏の女が雷にうたれて死んでいた。(『新斉諧』)

虹の説話

虹には雄と雌とがあると信じられた。『爾雅』の言うところによると、空に現われた虹が、色が鮮かで盛んなのが雄であり、やや闇い色をしているのが雌である。このように雄雌があるという考えは、中国に盛んに行なわれる陰陽説から来ているらしい。宋務光が、
「虹霓紛錯、陰陽の滲るるなり」
と言った如き、蔡邕の『月令章句』に、
「虹は陰陽交接の気の形色に著るるものなり」
とあるが如き、『京氏易伝』に、
「蜺は日旁の気なり。その占に言う、妻夫に乗ずれば、すなわちこれを見る。陰の陽に勝つ表なり」
とあるが如き、また『春秋元命苞』に、
「虹霓は陰陽の精なり」
とあるが如き、よくこれを示している。そして虹については、二通りの見方が存していた。一つは虹の現われるのを凶い兆とする見方で、『淮南子』に、
「虹霓は天の忌なり」
と言い、『文子』が、(淮南子にも)
「虹霓、見れず、盗賊行なわれず、徳を含むの致すところなり」
と言い、また『淵鑑類函』に、
「陰陽和せず婚姻序を失すれば、即ちこの気を生ず」
と言っている如き、これである。他の見方は、虹を瑞兆とするもので、『瑞応図』に、舜の帝の母が、大きな虹を見て、これに感じ孕んで、舜を生んだとなし、『符瑞志』に、少昊の帝の母が、星が虹の如く下るのを見て、これに感応して孕んだとなす如きもこれである。
虹霓は、その雌雄によって、呼び方が異なっていた。『爾雅』によると、雄は「虹」と呼ばれ、雌は「蜺」と呼ばれた。しかし『尸子』では、両者をひっくるめて、「析翳」となしている。それなら虹霓はどうしてできるかというと、『春秋運斗枢』には、
「枢星散じて虹霓となる」

とあり、『河図緯』にも、

「鎮星散じて虹霓となる」

とあり、『文子』は、

「天の二気が即ち虹をなす」

と言っている。もっと民間の信仰に近く思われるのは、虹を目して、空にかかる弓となす観念で、『白虎通』に、

「虹は天の弓なり」

とある。また同書に虹のことを帝弓と呼ぶともある。天帝の手にしている弓のことか、それとも黄帝の弓のことか、とにかく面白い見方である。また多くの民族におけるように、中国の民衆も、虹を空にかかる橋と考えたらしい。『皇明政要』に載せた彭友信の物語や、李白の詩に、

安得二五彩虹一
架レ天作二長橋一

とある如き、この観念を暗示していると言えるであろう。次に虹に関する説明を二、三挙げて見よう。

昔、陳済という男が、作州の役人となって、任地に赴いた。その妻の秦というものが、一人留守をしていると、いつの頃からとなく、身の丈一丈余りの凛々しい男が訪ねて来るようになった。

男はいつも赤碧の光り輝く衣を纏っていた。

二人は山の中の渓間で相曳をしていた。そして女は気がつかなかったらしいが、近所の人たちは、その男がいるところに、いつも虹がたなびいているのを見た。男は秦が渓にやって来ると、よく黄金の瓶を持ち出して、それで水を汲んでは、かの女に飲ませるのであった。

女はやがて一人の子を生んだ。と、間もなく夫の陳済が、暇をもらって家に帰って来た。妻は驚き畏れて、子供を瓶の中に隠して置いた。すると、あるとき例の男が訪ねて来て、かの女に黄金の瓶を渡しながら、

「瓶の中などに押し込めて置かないで、これで覆い隠して置いてもらいたい。子供の着物などこしらえなくてもよい。わしが自分で始末をするから」

と言った。そして赤い色をした嚢を取り出して、子供の体をつつんで、

「ときどき嚢から出して乳を飲ませておくれ。わしのところに連れて行きたいが、あまり小さいので、しばらくそなたに預けておく」

と言って、立ち去った。

子供がやや大きくなったある日のこと、空がにわかにかき曇って、雨風となった。それが止んだかと思うと、美しい虹が空から陳済の屋敷の庭に降って来た。と、たちまち一人の凛々しい男になって、子供を小脇に抱えながら、家から出て来た。またひとしきり風が吹きすさび、雨が降りしきった。しばらくして空が明るく晴れたかと思うと、二つの虹が、陳済の屋敷から空へのぼって行った。（『搜神後記』）

アフリカの黒人族は、虹が現われるのは、天界に住んでいる怪物が、大空から体をのばして、大地の水を飲むのであると信じているが、中国の民衆も、虹が下界の水を飲みに来ると信じていた。『筆談』に、

「世に伝う、虹はよく澗渓に入って水を飲むと。まことに然り」

と言って、永正二年三月、虹が潤州の大将軍張子良の家に入って来て、まず水瓶の水を飲み、それがつきると、今度は井戸に頭をさし込んだと記している。

上官桀が昭帝を廃して燕王を迎えようとたくらみ、家来たちがみな支度をしていると、にわかに雨が降り出して、虹が空から降って来て、宮中の井戸に頭をさし込むなり、ことごとくその水を飲み乾した。（『漢書』）

晋の時代に、虹が薛願の家に入って来て、釜の中の水を飲み始めた。やがて水がなくなったので、薛願が、

「目出度いことじゃ。お祝いをして上げよう」

と、酒を釜の中に入れてやった。虹は喜んで酒を飲み出したが、すっかり飲んでしまうと、釜の中におびただしい黄金を吐き出して去った。おかげで薛願は急に大金持ちになった。（『異苑』）

侯弘実が十三、四歳の頃、簷の下に眠っていると、雨が降り出した。しばらくすると虹が現われて、河の中に頭をさし入れて、しきりに水を飲んでいたが、やがて弘実の口の中に入った。弘実の母がそれを見つけて、息をこらしながら眺めていると、やがて虹はするすると弘実の口の中にもぐり込んでしまった。

やがて弘実が目を覚ましたので、

「お前、夢を見やしなかったのかえ」

と、母が尋ねると、弘実は、

「ええ、見ましたよ。河に入って飽きるほど水を飲んで帰って来た夢でしたよ」

と答えた。これを聞くと、母は心の中で、

「この子はきっと立身するだろう」

と喜んでいた。果たして弘実はあとで高い地位に登り、家が富み栄えた。（『鑑戒録』）

劉義慶というものが、広陵にいる頃、病気にかかって、お粥を食べていた。と、たちまち白い虹が部屋の中に入って来て、そのお粥を飲み始めたので、義慶はびっくりして、お粥の入っていた器を投げ出したと言う。（『独異志』）

韋皐鎮というものが、あるとき客人を集めて、酒宴を開いていると、にわかに烈しい雨が起こった。みんな驚き畏れているうちに、やがて空がからりと晴れて、虹が現われた。虹は見る見る

空から降りて来て、庭の中に入った。そして首を垂れて、酒宴の席にあった酒をぐいぐい飲んで、また立ち去った。韋皐鎮はひどく不機嫌になって、

「虹は凶い兆のものだと聞いている。こんなことがあったのでは、わしの身に今後ろくなことはあるまい」

と言った。と、その席にあった一人が、

「いや、虹は天の使いです。よこしまなことで降って来れば、災いの基でありましょうが、正しいことでやって来れば、まことに吉瑞であります。あなたは、いつも正しい行ないをしていられる。だからこれははなはだお目出度いことであります」

と言ったので、彼も気をよくした。それから十日ばかりたつと、天子から詔がくだって、韋皐鎮は中書令に拝せられた。(『祥験集』)*

人間製造

天空と大地とができても、人間はまだ一人もいなかった。

女媧という女神がそれをひどく物足りなく思った。

「せっかく広い大地ができても、住むものがなくては、ほんとにつまらない。わたしだって寂しくて仕方がない。一つ人間をこしらえることにしよう」

女媧はこう思った。

「人間をこしらえるとして、何を材料にしたらいいだろう。石にしようか、それとも樹にしようか。いやいや土でこしらえることにしよう」

女媧はこう言って、黄色い土に水をまぜて、それを粘って人間を造り始めた。たくさんの人間をこしらえようというのだから、なかなか忙しい。一人また一人と造っているうちに、体がへとへとに疲れてきた。

「これではかなわぬ。なんとかして一時にたくさんの人間ができる工夫をしなくては、とても体がつづきそうにもない」

女媧はこう思って、しばらくの間考え込んでいたが、やがて縄を取り出してきて、それをどろどろになっている土の中に縦横無尽にひっぱり廻し始めた。縄にくっついた泥が、ぽたりぽたりと続けざまに落ちる。と、それがみな人間となった。

こうして人間の中には、丁寧に土を粘ってこしらえたのと、乱暴に縄を引っぱり廻して造ったのとがある。一方はなかなか出来がよいが、一方はどうも出来が悪い。賢い者や富んでいる者は、出来のよい方の人間であり、愚かな者や貧しいものは、出来の悪い方の人間であると言いつたえられている。(『風俗通義』)*

五色の石と亀の足

大昔、天地に大変なことが起こった。

天が高いところから墜ちないように、太初から、東の隅と西の隅と南の隅と北の隅とにおのおの一本の大きな柱があって、これを支えているのであった。

ところが、ある時この四本の柱がぽきりと折れた。たちまち天空がどっと墜ちて来るし、大地が裂け傾いた。

まことに大変なことになった。炎々たる猛火が到るところに燃え出す。河や海の水が溢れて、人畜をひとのみにしようとする。猛々しい大鳥や獣類が、それにつけいって、老いたるもの弱きものを、ほしいままに噉い殺すという騒ぎとなって、人間どもは、もう生きた心地もしなくなった。

すると、体が蛇で首が人間の姿をしている女媧という女神が、

「これは大変なことになった。このままにしておくと、世界は亡びてしまうに違いない」

と思って、大急ぎで五色の石を練って、天空に亀裂のはいっているところをつくろい、また大きな亀の足を切り取って、東西南北の四隅の柱となした。こうして天地の修繕がすむと、今度は蘆を焼いた灰を高く積み上げて、流れ溢れている水をせきとめ、荒れ狂う黒龍を斬り殺したので、ようやく人間どもが安堵するようになった。

ところが、ずっとその後になって、共工氏というものが、帝王になろうという野心を起こして、それをさまたげる顓頊高陽氏というものと烈しく相争った。しかしどうも事がうまく運ばないので、腹立たしさのあまりに、

「帝王になれぬほどなら、死んだ方がましだ」

と、不周山という山に駆けつけて、いきなり自分の頭をこれに叩きつけた。素晴らしい勢いで叩きつけたと見えて、天を支えていた柱が折れ砕けた。それがために西北に傾き、地が東南に欠けて、そこに大きな窪みができた。河という河の水がみなその窪みに集まって、海となった。(『淮南子』等)(7)

黄帝の昇天

大昔、黄帝と蚩尤とが、涿鹿の野原で烈しく戦ったことがあった。

蚩尤は、よこしまな心を持った怪物であった。彼は風を起こしたり、雨を呼んだり、煙を吹いたり、霧を立ちこめさせたりして、ひたすら黄帝の率いる軍勢を悩まそうと務めた。黄帝の兵士たちは、ひどい霧に閉じこめられて、一寸先も見ることができず、苦しみに苦しんだ。

黄帝はこれを見ると、

「これでは駄目だ。とても蚩尤を平らげることはできぬ」

と言って、軍勢をひきつれて、太山のほとりに帰ってしまった。そして、

「どうも蚩尤という奴は、いろんな術を心得ているので、わしの手におえぬ。どうしたら彼奴にうち勝つことができるだろう」

と、ため息をついて憂い嘆いていると、女神の王母がそれを見て、九天玄女というものを、黄帝のところに遣って、さまざまの術などを授けて、

蚩尤図　頭上には弩（おおゆみ）、両手両足にそれぞれ武器をもち、恐ろしい獣の姿をしている。しかし、蚩尤は五兵（五種の兵器）の創始者として、軍神でもある。図の五つの武器はその五兵を表わすものであろう。後漢時代の山東省出土の墓壁画。『金石索㈢』より。

「なにも心配することはない。わしの授けた術を使えば、きっと蚩尤を攻め滅ぼすことができる」

と勇み励ました。

黄帝は喜び勇んで、また蚩尤と戦いを交じえることになった。蚩尤は、風の神の風伯（ふうはく）と雨の神の雨師（うし）とに頼んで、すさまじい雨風を起こさせた。しかし黄帝は王母からいろんな術を授かっているので、その術を使って、旱（ひでり）の神である魃（ばつ）を呼び下ろして、これに応ずることにした。旱の神がやって来ると、さしも今まで荒れ狂っていた雨が止み風が止んで、かんかんと陽が照り出した。黄帝はそれにつけいって、

「蚩尤を攻め滅ぼすのは、今時じゃ。進め進め」

と兵士（つわもの）を励ました。兵士たちは元気百倍して、勢い鋭く攻めつけたので、蚩尤は散々にうち破られて、とうとう殺されてしまった。

蚩尤には、八十一人の兄弟があって、みんな獣の形をして人間の言葉を話す怪物どもであったが、これもことごとく平らげられた。黄帝は、蚩尤の姿を絵にかかせて、天下が乱れるたびにそれを持ち出して戦いに臨むことにした。敵の軍兵はその絵姿を見ると、

「あの恐ろしい蚩尤がまだ死なないでいるぞ。うかとしたことをすると、ひどい目にあうぞ」

と、みんな恐れおののいて、すぐに黄帝に降参をするのであった。

黄帝は、また凄まじく鳴りひびく太鼓を持っていた。東の海の中に流波山（りゅうはざん）という山があって、そこに一匹の怪獣が住んでいた。形は牛のようであったが、体中が真蒼で、角が生えていなかっ

た。そして目が日月のように光り輝き、吼える声は雷の轟くに似ており、一本の足を水につけると、たちまち風が吹き起こり、雨が凄まじく降り出すのであった。黄帝はその怪獣を捕えて、その皮を剝いで、太鼓をこしらえた。そして雷獣の骨でその太鼓を叩くと、五百里四方に鳴り渡るのであった。

黄帝は、蚩尤の絵姿とこの太鼓とで、天が下の強の者どもをことごとく恐れ入らしてしまった。

こうして黄帝は永い間天下に号令していた。そのうちに大分年をとった。ある日、黄帝は家来たちに言いつけて、首山という山から銅を採って、荊山という山の下で鼎を鋳らせた。そして、それを眺めながら、

「うん、これはなかなかよくできた」

と感心をしていると、たちまち一匹の龍が天から降りて来て、長い髯を垂らしながら、黄帝のそばに寄って来た。それを見ると、黄帝は、

「天帝がわしをお召しになるのであろう」

と言って、龍の背に跨った。身分の高い家来たちも、

「それでは、わたくしたちもお伴をさせていただきます」

と言って、つづいて龍の背に乗るものが七十人にあまった。これを見ると、身分の低い家来たちまでが、われもわれもと龍の背に乗ろうとしたが、すでに七十人以上も乗っているので、いくら大きな龍でも、もう座るところがなかった。まごまごしているうちに、龍が大空に飛び上がりかけたので、非常にあわてて、長く垂れている髯にすがりついた。あまり大勢のものがすがりついたので、とうとう髯が龍の口から抜けてしまった。家来たちは、あっという間もなく大地にころげ落ちた。その騒ぎに黄帝が手にしていた弓も下に落ちてしまった。

龍は黄帝をのせたまま、しだいに高く大空に上って行った。取りのこされた人々は、黄帝の弓と龍の髯とを抱きしめて、名残り惜しさに、声をあげて泣き悲しんだ。(8)(『史記』・『古今注』・『中華古今注』・『述異記』等)

洪水説話

昔、大きな洪水が起こって、天下の民が非常に苦しんだ。天帝はそれを見かねて、多くのものを集めて相談をした末、みんなの説をいれて、鯀というものに言いつけて、洪水を治めさせることにした。

鯀は大地に漲り溢れている水を、どうにかして退かせようと、一所懸命に骨を折った。しかし彼は心が頑なで、人々の言うことを聴かなかったので、九年が間働いても、洪水を治めることができなかった。あるいは鴟や亀の言うことを聞いて、水を退かせようと努めたが、すっかり失敗してしまったとも言われる。

時の帝の堯はこれを見て、鯀の罪を責めて、罰として彼を羽山に追い放った。彼は羽山に味気ない月日を送っていたが、三年たってもその罪を赦されなかったので、とうとう、

「こうなっては生きている甲斐がない」

と、黄能（三足の亀）に姿を変えて、羽淵という深淵に沈んでしまった。一説には帝が祝融に言いつけて、羽郊というところで鯀を殺させたと言い、また他の一説では、鯀は羽淵に身を投げると、玄魚となって、鬚を揚げ鱗を振るって、波の上を泳ぎ廻っていた。人々はそれを見ると、

「あれは河の精だ。うっかりすると、ひどい災いを受けるぞ」

とおどろき恐れて、羽山に廟を立てて、春夏秋冬に鯀を祭ることにした。

堯の帝のあとを継いだ舜の帝は、鯀の子の禹に命じて、洪水を治めることにさせた。禹は巧みに山を拓き河を通じて、洪水を退かせることにした。その間の苦心は一通りでなく、大亀や龍が現われて、禹をその背に乗せては、あちらこちらと運んでくれた。また轘轅山を拓くときなどは、禹みずから化して熊となったこともあった。禹は熊に化している姿を他人に見られたくなかったので、いっしょに働いている塗山氏という男に、

「飯を食べるときには、太鼓を鳴らすから、その声を聞いてから、自分のところに来るのじゃ」

と言いつけておいたが、あるとき熊になっていた禹が、石を跳り越えようとして、誤って太鼓にぶつかったので、塗山氏がすぐにやって来た。禹は変な姿を見られて、大いに困ったが、塗山氏も見てはならぬものを見たのを慙じて、嵩高山の下に立って石となった。

こういうふうな大騒ぎがあって、禹はとうとう首尾よく洪水を治めることができたのであった。(9)

（『尚書』・『楚辞』・『淮南子』・『漢書』・『拾遺記』等）

唐山夫人羽衣伝説

昔、予章というところに住んでいる一人の男が、野原を歩いていると、田の中に六、七人の乙女が遊び戯れているのに気がついた。見ると毛衣が幾枚か傍に脱ぎ捨ててあった。男は地面に腹這って、乙女たちがそれに気がついて、

「あれっ、大変だわ」

と、みな大急ぎで毛衣の方に駆けよって来た。そしておのおのそれを体に纏ったかと思うと、たちまち鳥に変じて、空高く飛び去った。

ただ一人の乙女だけは、男のために毛衣を盗まれたので、飛び去ることができなかった。乙女は悲しそうな顔をして、

「どうぞ衣を返して下さい」

と頼んだが、男はどうしても聞き入れなかった。そしてしきりに、

「わたしの妻になってもらいたい」

と言い張った。

乙女は仕方がないので、とうとうその男の妻となった。男は、毛衣を高く積み上げた稲の下に隠して、

「こうしておけば、大丈夫だ。これさえ見つけ出されねば、いつまでもあの女を自分の許に留めておくことができるからな」

と、ひとりでほくそ笑んでいた。

だんだんと年月がたって、夫婦の間に三人の女の子が生まれた。ある日、母は子供にむかって、なにげない様子で、

「いい子だから、お父さんに毛衣はどこにあるのですと聞いてごらん」

と言った。

女の子たちは、父のところに行って、

「お父さん、毛衣はどこに蔵ってあるの」

と尋ねた。男は心の中でぎょっとしながら、

「どこに蔵ってあったって、いいではないか。そんなことを聞くものではないよ」

とたしなめた。しかし女の子たちは、いつまでもしつこく尋ねるので、

「稲が積んであるだろう。あの下に蔵ってあるのだよ。だがそんなことをお母さんに知らせてはいけないよ」

男はこう言って、堅く女の子たちを戒めた。しかしかの女らはすぐに母に毛衣の所在を漏らしてしまった。

女は非常に喜んで、夫が気がつかないうちに、稲の下から毛衣を取り出した。そうしてそれを体に纏うなり、鳥に変じて大空に飛び去った。

しかしかの女は、子供に別れるに忍びなかったので、あとになって毛衣を持って、また人間界に降って来て、三人の女の子を連れて行った。（『元中記』）

南昌府の東に、浴仙池という池がある。

昔一人の少年が、この池のほとりをぶらついていると、美しい女が五人、水の中に浴っているのを見た。

「おお、綺麗な女たちだな」

と感嘆しながら、ふと岸辺を見ると、目も眩むような彩衣が五枚ほど、そこに脱ぎ捨ててあった。

「あの女たちが脱いだのだな。よし、少しばかり困らせてやろう」

少年はこう思って、女たちに気づかれぬように、足音を忍ばせて、彩衣の側に歩みよるなり、そのうちの一枚を隠してしまった。

しばらくすると、女たちは水から上がって、彩衣を体に纏った。と、雪をあざむくような真白い鶴となって、大空高く舞い上がった。しかし一人の女だけは、衣が見つからぬので、いっしょに飛び去ることができなかった。

「おお、わたしの衣はどうなったのでしょう」

と、女は嘆き悲しみながら、そのあたりをうろうろしていた。それを見ると、少年は衣を持ち出して、

「あなたが探しているのは、これでしょう」

と言った。女は衣を見ると、驚き喜んで、少年の手からそれを受け取ろうとした。しかし少年はどうしても返してくれなかった。仕方がないので、とうとう請われるままに、その妻となることにした。

「でも、いつまでも人間界に留まっていることはできません。三年で衣を返して下さい」

女はこう言って、少年の家に行って、その妻となった。

それから三年たつと、彩衣を返してもらって、それを着けるなり、白い鶴となって天界に飛び去った。(10)(『淵鑑類函』)

唐様浦島(一)

太始年中に、北海の蓬球というものが、山に入って木を伐っていると、風につれて、なんとも言えぬいい香りがして来た。

「はてな、どこかに素晴らしいところがあるに違いないぞ」

と、風に遡ってだんだんと奥深く分け入るうちに、玉女山という山に来た。そこに美々しい宮殿が聳えていた。球は門を入って、あたりを見廻すと、五本の玉樹が生えているのに目がついた。つかつかとその方へ進んで行くと、世の人とも思われぬ麗しい乙女が四人、堂の上で碁を弾いていた。

四人の乙女は球を見ると、驚いて、いっせいに起き上がって、

「どうしてここにいらしたのです」

と尋ねた。

「いい香りをたどって、やって来たのです」

と、球が答えた。球は少し腹が空いたので、玉樹の葉の上にたまっている露を舐めていると、たちまち一人の女が鶴に乗って現われて来た。女は乙女たちを睨みつけて、

「お前たちは、どうしてこんな俗人にここにいることを許したのじゃ」

と叱りつけた。

球は恐くなったので、あわてて門の外に逃げ出した。そして後をふり返ると、いつの間にか宮殿は掻き消したように見えなくなっていた。彼はすごすごと自分の家に帰って来たが、家は跡形もなくなっているし、村の人たちもみんな見知らぬものばかりであった。彼は夢心地でぼんやりしていたが、人々に聞くと、建平年間であるという。つまり彼は太始年間から建平年間まで数十年山に入っていたわけである。自分ではたった一日のつもりであったが。(『酉陽雑俎』)

唐様浦島(二)

剡県に昔、劉晨という男がいた。漢の永平年間に、友達の阮肇といっしょに天台山にわけ入って、薬草を探しているうちに、路に迷ってしまった。

二人は十三日の間深い山の中をうろつき廻っていた。腹がへって喉が渇いてたまらないので、

桃の実をちぎって食べて、それから渓に下って水を飲んでいると、杯が一つ流れて来た。見ると、その中に胡麻飯が入っていた。二人は非常に喜んだ。

「こんなものが流れてくるところを見ると、きっとこの近くに人の住む家があるに違いないね」

「そうだ、これでどうやら野たれ死にをしなくてすみそうだ」

二人はこう言って、一つの山を越えると、大きな渓に出た。渓のほとりに二人の女が立っていたが、彼らの姿を見ると、お互いに顔を見合わせて、にこにこ笑いながら、

「まあ劉晨さんと阮肇さんですね。きっと杯をしるべに訪ねて来たんでしょう」

と言った。二人の男は、見も知らぬ美しい女たちから自分たちの名を言われて、口もきけないほど驚き怪しんだ。女たちはまた笑い出して、

「そんなにびっくりなさらなくてもいいんですよ。わたしたちはあなた方のお出でを待っていたのですよ」

と、なれなれしく言って、二人を家に連れ帰った。

家には大勢の侍女（こしもと）がいた。二人の女は侍女たちに言いつけて、すぐに御馳走の用意をさせた。しばらくすると胡麻飯が出る。山羊の肉が出る。酒が出る。女たちは酒を勧めながら、笙を吹くものもあれば、糸をかなでるものもあり、更に立ち上がって、節おもしろく歌いかつ踊るものもあった。

二人の男は夢心地で、美しい女の家に楽しい日を送っていた。しかし半年ばかりたつと、さすがに故郷が恋しくなって、そっとため息ばかりつくようになった。二人の女は早くもそれを見て

とって、

「あなた方は、家に帰りたいんですね。浮世の罪障がまだすっかり尽きていないから、それも無理ありませんわ」

と言って、くわしく帰りの道を教えてくれた。

二人の男は、教わった通りの道を歩いているうちに、いつの間にか自分たちの村に帰りついた。しかし知った顔は更に無いし、村の様子もすっかり変わってしまっていた。二人は驚き怪しんで、村の人たちによくよく聞きただして見ると、二人が薬草を採りに行ってから、もうすでに人間の七代が過ぎてしまったということがわかった。

二人はのぞけるばかり驚いて、

「さてさて不思議なこともあるものだな。たった半年ばかりも山の中に留まっていたと思ったのに」

「こんなに村が変わってしまっては、ここにいてもつまらない。も一度あの女たちのところに訪ねて行こうではないか」

と、すぐまた天台山の奥深くわけ入ったが、いくら探しても、美しい女たちの家を見つけることができなかった。

太康八年になって、二人の男は行方がまったくわからなくなってしまった。（『幽明録』・『神仙記』）

唐様浦島(三)

晋の時代に、衢州に王質という樵夫が住んでいた。山の中に入って木を伐っていると、一つの石室が目についた。

王質は何げなく石室の中に入って見た。するとその中に二人の童子が座り込んで、しきりに棋を囲んでいた。王質は棋をもてあそぶことが好きであったので、そっと童子たちの側に歩みよって、手に持っていた斧を地面に置いて、一所懸命に棋の争いを見つめていた。

童子たちは、王質がやって来たのに気もとめない様子で、熱心に棋をたたかわしていたが、しばらくすると、棗の核のようなものを取り上げて、王質に渡して、

「これを口に含んでいるがいい」

と言った。

王質は、

「なんだ、つまらぬものをくれたな。こんなものを食べても、腹の足しにはならんだろう」

と思いながら、試みにそれを口にすると、なんとも言えぬ甘い汁が腹に流れ込んで、すっかり飢えを忘れてしまった。王質はいい気になって、なおも棋の争いを見つめていると、童子が、

「もう帰ったがいいだろう。ここへ来てから大分月日がたったから」

と言った。これを聞くと、王質は驚き怪しんだ。

「大分月日がたったなんて、おかしなことを言うな。まだ一日もたたないではないか」

彼はこう思ったが、とにかく帰れと言われたので、立ち上がって、何げなく斧を取り上げようとすると、斧の柄がすっかり朽ちてしまっていた。王質は飛び上がるほど驚いた。

「なるほど斧の柄が腐ってしまったところを見ると、永い年月がたったに違いない。不思議なこともあればあるものだな」

と、大急ぎで自分の村に帰って見たが、誰一人知ったものがいない。聞いて見ると、彼が山に入ったのは、もう数百年の昔であるという。王質は何が何だかわからなくなって、ぼんやり突っ立っていた。(11)(『述異記』・『列仙伝』)

唐様浦島(四)

隋の時代に元蔵幾という男がいた。

あるとき船に乗って、海路を渡っていると、にわかに天気が悪くなって来た。真黒い霧があたりに立ちこめて、さっぱり行手がわからなくなった。

「これは困ったことになった」

と、船人たちは、用心に用心をしていたが、なにしろ風が強いために、山のような大浪が絶えず船に襲いかかる。そのうちにひときわ凄まじい波がどっとうち寄せたかと思うと、船はめりめりと大きな音を立てて壊れてしまった。

船の中の人々は、老いも若きも荒浪に巻き込まれて、またたく間に溺れ死んでしまった。元蔵幾も波にもまれながら、とても助かることはあるまいと思っていると、大きな木の片が見つかった。これ幸いと、それに懸命にすがりついて、波のまにまにほとんど半月ばかり漂っていた。

すると見も知らぬ島に流れ寄った。元蔵幾はへとへとになって、磯辺に倒れていると、島の人たちがそれを見つけて、親切に介抱してくれた。元蔵幾は少し人心地がついて、

「ここはなんというところです」

と尋ねた。

「滄州といって、中国から幾万里も離れているところですよ」

と、島の人たちが答えた。大変なところまで流されたものだと思っていると、島の人たちが、菖蒲の花や桃の花でこしらえた酒を持ち出して来て、

「さあ、これをおあがりなさい。元気が出ますよ」

と言ってすすめてくれた。元蔵幾はそれを飲むと、急に元気になった。

彼はそのまま島に留まっていた。しかし月日がたつにつれて、中国に帰りたくてたまらなくなった。島の人たちはそれを見ると、

「よろしい、お帰りなさい。ただし並々の船では、とても駄目です。少しお待ちなさい、丈夫な船をこしらえてあげるから」

と言って、どんな烈しい風でも凌げるような船をこしらえてくれた。

元蔵幾がそれに乗り込むと、水の勢いが矢のようで、十日もたたないうちに、中国の東萊に着いた。元蔵幾はそんなに永く滄州に留まっていたとも思わなかったのに、帰って見ると、二百年たっていた。（『杜陽雑編』）

唐様浦島(五)

唐の中宗の世に、房州竹山県に陰隠客というものがおった。井戸をこしらえるつもりで、二年の間地を掘らせて、深さ千尺あまりになったが、水は少しも出てこない。更に一月あまり掘りつづけさせると、地の中に鶏や犬や鳥や雀などの鳴く声が聞こえてきた。工人（いどほり）は驚き怪しんで、また掘り上げると、数尺にして、一つの穴が現われた。

穴を伝って行くと、初めは真暗であったが、やがてかっと明るくなって、別世界が目の前に現われた。五色の鳥や扇のように大きな蝶が、咲き誇る花の間に舞っていて、澄みきった泉があって、華やかな御殿が聳えていた。工人は御殿のそばに近寄ると、軽やかな衣を纏い金冠をかむった二人の門衛が、驚き怪しんで、

「そなたは、いったいどうしてここに来たのじゃ」

と尋ねた。工人は詳しく今までの成行きを話し始めた。その話がまだ終わらぬうちに、門の中に数十人の男が現われてきて、

「どうしたのじゃ。急に濁った気があたりに漂うようになったが……」

と門衛をなじった。門衛たちは恐れ入って、

「実は、御門の外に、人間界の工人が参っているのでございます」
と答えた。
工人は門衛の話によって、自分が下界の仙人国に来ていることを悟った。門衛は工人を案内して、いろんなところを見物させてくれた。耳に聞くもの目に見るもの、ことごとく不思議なものばかりなので、工人はただ夢に夢を重ねたような気持ちであった。
しばらくして風が起こり雲が湧いて、あたりが少しも見えなくなった。門衛は工人にむかって、
「もう帰ったがいいだろう」
と言った。
やがて雲が晴れた。工人は気がついて見ると、いつの間にか、自分の身は房州の北三十里のところにある孤星山の頂にある洞穴の中にいた。彼は急いで故郷に帰って来た。そして人々に、
「陰隠客さんの家はどこにあるのかね」
と尋ねると、人々はびっくりして、
「なに、陰隠客さんだって？　そんな人は今はいないよ。なんでも三、四代前に陰隠客とかいう人がいたそうだがね」
と答えた。工人は驚き怪しんで、自分が井戸を掘ったところに行って見ると、大きな坑が空しく残っているだけであった。彼は人々と交わるのが嫌になって、五穀を口にしないで、足にまかせて、あてもなく歩き廻っていた。
数年の後、剣閣鶏冠山のそばで、彼に出逢ったというものがあったが、その後はふっつり行方がわからなくなってしまった。（『博異志』）(12)

嚢の中の鳥

会稽の剡県というところに、袁相と根碩という二人の男が住んでいた。
あるとき二人は、深い山の中に分け入って、狩りをしていた。すると六、七頭の山羊が見つかったので、すぐにそれを追いかけた。山羊は足早にどんどん逃げ出して、一つの石橋を渡って行った。二人もそのあとをつけて石橋を渡ると、目の前に真赤な色をした絶壁が屏風のように突っ立っていた。そこに通じている九十九折の小径を辿って行くと、向こうに洞穴があって、門のように開いていた。二人は洞穴の中に入り込んだ。すると中は広くて平らで、草や木がみななんともいえぬいい香りを放っていた。二人は顔を見合わせて、
「おい、珍しいところに来たものだな。なんだか人里らしくないじゃないか」
「まあいいや、も少し先に行って見よう」
こんなことを話し合いながら、なおも先へ進んで行くと、一軒の家が目についた。
「家が見えるね」
「そうだ、あそこに行って見よう」
二人はその家を訪れた。家の中には、二人の乙女が住んでいた。どちらも十五、六歳で、どちらも青い衣を纏って、どちらも非常に麗しい容貌をしていた。

二人の乙女は、袁相と根碩とを見ると、いそいそと家の中に迎え入れて、
「わたしたちは、早くからあなた方のお出でを待っていましたのよ」
と言った。二人の男は驚き怪しんで、
「えっ、わたしたちの来るのを待っていたんですって？　どうしてそんなことがわかっていたんです。わたしたちはここに紛れ込んだだけですよ」
と言った。
「まあ、そんなことはどうでもいいじゃないの、せっかくいらっしゃったんだから、いつまでも逗留して下さいな」
二人の乙女はこう言って、袁相と根碩とを手厚くもてなして、果てはその妻となってしまった。
二人の男は、夢のような気持ちで一日一日を送っていた。そのうちに人里が恋しくなってきたが、さすがに口に出してそれを乙女たちに告げることはできなかった。二人はなんとなく落ちつかぬ気持ちで明かし暮らしていた。
するとある日、二人の乙女は、袁相と根碩とに向かって、
「わたしたちのように、新しくお婿さんを迎えたものがありますの。だからこれからお喜びに行って来ますよ」
と言って、出て行った。
二人の乙女が岩の上を歩き出すと、はいている履が、まるで珠でも転がすように涼しい美しい音をたてるのであった。しかし二人の男は、履の音などに耳を傾けているどころではなかった。

お互いに顔を見合わせて、
「おい、いい機会だ。人里に逃げ帰ろうではないか」
「よかろう。こんなところは仙人の住むところだ。おれたちにはどうも向かない。女たちが帰らぬうちに、脱け出すことにしよう」
と話し合った。
二人の男は、こうして不思議な家を飛び出した。そしてもと来た路をどんどん駆けていると、たちまちどこからとなく二人の乙女が現われて来た。男たちはぎょっとして思わずそこに立ちすくんだ。乙女たちは、
「どこかへいらっしゃるの。大変急いでいらっしゃるのね」
と尋ねた。男たちは心の中を見透かされたような気がして、覚えず苦笑をした。乙女たちは、二人の顔をじっと見つめながら、
「あなた方は、自分の家に帰りたがっていらっしゃるのね」
と言った。男たちはどぎまぎして、
「いや、そのなんで……」
と口ごもってしまった。
「隠さなくってもいいんですよ。たって帰りたいというのなら、仕方がありませんわ。では、お別れのしるしにこれを上げましょう」
二人の乙女はこう言って、一つの嚢を男たちに与えながら、

「どんなことがあっても、この嚢を開けてはいけませんよ」
と戒めた。
二人は大切そうに嚢を抱えて、人里に還って来た。そして乙女たちの教えを守って、決してその口を開けなかったが、ある日のこと、根碩の妻が、夫の留守に好奇心に駆られて、とうとう嚢を開いて見た。嚢は蓮の花のように幾重にも重なっていた。一重めくると、また一重というふうになっていた。根碩の妻は、いよいよ面白くなって、
「まあ、ほんとうに不思議な嚢だこと。中には何が入っているでしょう」
と、一重また一重と、めくっていると、五蓋の奥に、青い小鳥が蹲っていた。
「まあ、可愛らしい」
と、根碩の妻が目を見はった途端、小鳥はぱっと飛び立って、どこともなく姿を消してしまった。しばらくして帰って来た根碩は、妻が嚢を開いて、小鳥を取り逃がしたことを知ると、がっかりして、大きな吐息をついたが、今更どうすることもできなかった。
その後、根碩が田を耕しに出たので、妻が食物を届けに行って見ると、夫は田の中に突っ立ったまま、身動きもしないでいた。
「おや、どうしたんです」
と、かの女が駆けよって見ると、夫の体から魂が脱け出して、もぬけの殻となっていた。(『捜神後記』)

武陵桃源

晋の太元年間のことであった。
武陵に住んでいた一人の男が、渓川に魚を捕りに出かけた。渓に沿ってだんだんと舟を遡らせて行くうちに、いつの間にか路の遠近を忘れてしまった。
と、やがて桃の林が、岸をはさんで、花を咲かしているところに出た。見渡すかぎり桃の樹ばかりで、他の樹は一本も生えていなかった。
「すばらしい桃の花だな。いったいどこまでつづいているのだろう。この林のおしまいになるところまで行ってみよう」
男はこう独り言を言って、ぐんぐん舟を漕いでいった。そのうちに桃の林がおしまいになって、渓川の源に出た。そこには一つの山があって、その山に小さい穴があった。穴の側に歩みよって見ると、なにやらほのかに光がさしているように思われた。男は舟から出て、穴の中に入った。初めは狭くて、やっと人が通れるくらいであったが、数十歩ほど進むと、たちまちあたりが広く平らになって、見事な田畑があり、立派な家が立ち並んでおり、鶏や犬の鳴声が、静かな空に響き渡っている。往来をする男も女もこの世の人と服装がすっかりちがっていた。そしてみんなの顔が、いつも穏やかで、のんびりしていて、楽しくてたまらないといったふうであった。
彼らは漁夫の姿を見ると、驚き怪しんで、

「あなたはどこから来たのです」
と尋ねた。漁夫が仔細をうち明けると、一人が、
「まあ、わたしの家にお出で」
と言って、漁夫を自分の家につれ込んで、酒を出したり、鶏を殺して御馳走をこしらえたりしてくれた。そうしているうちに、村中の人が、
「珍しいお客がやって来た」
というので、われもわれもとその家におしかけて来た。漁夫はみんなにとり囲まれながら、
「あなたたちは、いったい誰です。どうしてこんなところに住んでいるんです」
と尋ねた。人々はかわるがわる、
「わたしたちの先祖が、秦の世の乱れを避けて、妻子や村の人たちをつれて、人里はなれたここにやって来たそうです。それ以来誰一人、この隠れ里を出ないので、世間が今どうなっているか、さっぱりわかりません。いったい今日はなんの時代です」
と言った。隠れ里の人たちは、漢の時代も知らねば、魏や晋の時代も知らなかった。そこで漁夫がくわしく話して聞かせると、人々はみな目をまるくして驚いていた。
その後は、隠れ里の人たちが、かわるがわる漁夫を自分の家に招いて、御馳走をしては、いろんな話を貪り聞くので、思わず日数を重ねてしまった。
とうとう漁夫は、人々に別れを告げて、人里に出ることにした。舟に乗り込んで、川を下りながら、ところどころに目印をつけておいた。そして家に帰ると、すぐに郡の太守のところに出かけて行って、珍しい隠れ里のことを逐一物語った。
太守は非常にもの珍しく思って、
「もう一度その里を探して見たいものじゃ」
と言った。
「わけはありません。帰りに目印をつけておきましたから」
と、漁夫が答えた。そこで太守は数人の家来を漁夫につけて、もう一度出かけさせることにした。漁夫は渓川に行って、自分がつけておいた目印を探したが、どうしても見つからなかった。そのうちに道に迷ってしまって、とうとう隠れ里に行きつくことができなかった。(『捜神後記』)

崇高山の北に、一つの大きな穴があった。その深さがいくらあるか測り知れなかった。
晋の初めに、一人の男が誤ってこの穴の中に陥った。男の友達が、
「大変なことになった。こんな深い穴に落ち込んだんだから、多分命は無かろうが、もし生きていたら、食物に困るだろう」
と言って、食物を穴の中に投げ込んでやった。
穴に陥った男は、死ななかった。彼は友達が投げ込んでくれた食物を携えて、穴の中を先へ先へと辿って行った。はじめは真暗であったが、十日余り歩くと、急にあたりが明るくなった。見ると、一軒の草屋があって、その中に二人の男がむきあって、碁を打っていた。
穴に落ちた男は、腹が空いて喉が渇いて仕方がないので、二人の傍に行って、

「何か口に入れるものはありませんでしょうか」
と言うと、二人は側にあった一つの杯を指して、
「これを飲んだらいいだろう」
と言った。杯の中には白い色をした液が入っていた。男がそれを飲むと、たちまち気持ちがすがすがしくなって、気力が十倍した。碁をうっていた二人は、彼にむかって、
「どうだね、お前さんはここに留まっているつもりかね」
と尋ねた。男が、
「いいえ、家へ帰りたいと思います」
と答えると、
「それではここから西へ行くと、一つの井戸があって、その中にたくさんの蛟龍が棲んでいる。それを恐がってはいけない。思いきって井の中に飛び込むと、おのずと人間界に出られるのじゃ。もし腹がへったら、井の中にあるものをとって食べるがいい」
と、二人が教えてくれた。
男は教わった通りにした。すると半歳ばかり経って蜀中に出ることができた。あとで張華というものに、その話をすると、張華は、
「そなたが訪ねて行ったところは、仙人の住む館じゃ。杯から飲んだのは瓊漿で、井の中で食べたものは龍穴石髄じゃ」
と言った。(『搜神後記』*)

竹から生まれた男

中国から西南にあたる遠いところに、夜郎県という地があった。
ある時、その地に住んでいた一人の乙女が、河に入って、衣を洗いそそいでいた。すると節の三つついた一本の竹が、河上から流れて来て、乙女の足の間にまつわった。乙女はそのままにしてなおも衣を洗っていると、にわかに足のあたりで子供の泣き声がした。
「おや、おかしいな。どこに子供がいるのでしょう」
乙女はこう言いながら、竹を取り上げた。泣き声はどうも竹の中から出ているらしい。乙女は驚き怪しんで、竹を割って見た。と、その中に可愛らしい小さい男の子が入っていた。
「まあ、可愛い子だこと」
と、乙女はそれを抱き上げて、いそいそと自分の家に帰って、大切に育て上げることにした。
竹から生まれた男の子は、すこやかに生い育った。大きくなるにつれて、知恵が衆にすぐれ、武勇もなみではなかった。彼はとうとう自ら夜郎県の主となった。そして竹の中から生まれたというので、竹をおのが姓とした。
漢の武帝が、元鼎六年に、中国の西南に住んでいる夷どもを征伐した。武帝の軍勢は、あちらこちらを切り従えて、とうとう潮のように夜郎県に攻め入って来た。夜郎県の主竹王は、
「凄まじい勢いだな。天子の軍勢に刃向かっても、到底勝つ見込みはない」

と思って、武帝の軍勢を出迎えて降参することにした。武帝はその志を嘉して、

「夜郎県は、そのままそなたが治めていくがよい」

と言って、玉印綬を授けた。

竹王が死ぬと土地の人々は、

「あの方は、人間から生まれたのではない。不思議な方だ」

と言って、みんなで一つの廟をこしらえて祀ることにした。今日、夜郎県に竹王神というのがあるのは、すなわちこれである。（『後漢書』西南夷伝・『華陽国志』・『述異記』）(13)

林檎樹から生まれた男

隋の時代に黍陽城の東十五里のところに、王徳祖というものが住んでいた。その家に一本の大きな林檎の樹があったが、あるときその樹の幹に、大きな瘤ができた。

「変なものができたな。どうしたのだろう」

と思っていると、三年たって瘤が朽ちただれてきた。徳祖はそれを見て、何げなく皮を剝ぎ取った。と、一人の赤ん坊が、自分で自分の胎を抱いたまま、瘤の中から現われ出た。

徳祖は驚き怪しんだが、なにしろ珍しいので、大切に育て上げることにした。七歳になると、子供が徳祖にむかって、

「誰がわたしを育てて下さったのです。そして名はなんというのです」

と尋ねた。徳祖は、くわしく今までのことを話して聞かせた。この子は菩薩の化身であると言われた。王梵志というのは、この人のことである。（『桂苑叢談』）

継娘物語

昔、その土地の人々から呉洞と呼ばれた男がいた。呉洞には葉限という一人の娘があった。小さい時からなかなか利口であったので、ひどく両親に可愛がられていた。

呉洞は妻を失って、あといりの妻を迎えたが、それから間もなく死んでしまった。継母は、葉限を憎んで、絶えずこれを苦しめていた。葉限は毎日のように険しい山に登って薪をとったり、深い谷川に下って水を汲んだりしなくてはならなかった。

ある時、葉限は谷川で二寸ばかりの魚を捕えた。背の鰭が真赤で、目が黄金色をしていて、非常に可愛かったので、かの女は継母にかくして、小さな容物に入れて、大切に養い育てていた。魚は日増しに大きくなるので、幾度も容物を取り換えねばならなかった。そのうちに余り大きくなって、とても容れる物がなくなったので、近くの池に放してやった。

葉限は、いつも自分の食べ残したものを池の中に投げ入れて、魚の餌にしていた。魚は心から葉限になついて、かの女が池の側に来さえすると、きっと水の上に頭を現わして、水際に泳ぎよるのであった。しかし他のものが行っても、けっして姿を見せることはなかった。

継母は、葉限がよく池のそばに行くのを変に思っていたが、そのうちに不思議な魚のことに気

がついた。

「いまいましい。あの子の味方をするものは、魚でもなんでも生かしてはおけぬ」

と、継母はそれから毎日池のはたにたたずんで、魚の現われるのを待ち構えていたが、魚はちらりともその姿を見せなかった。

「これはきっと継娘の着物に見覚えがあるにちがいない。よし、それではこちらにも考えがあるよ」

継母はこう思って、ある日、葉限を呼んで、優しい口調で、

「毎日よく働いてくれますね。何か骨折賃を出さなくてはなりませんね。そう、そう、あまり着物が汚なくなっているようだから、これに着換えたらいいだろう」

と言って、新しい着物を与えた。葉限が喜んでその着物を着ると、継母はまた猫なで声を出して、

「今日は御苦労だが、いつもの泉とちがったところから水を汲んで来ておくれよ」

と言って、とある泉の名を挙げた。その泉は、家から数里も離れているところにあった。継母の胸に恐ろしい企てが潜んでいるとも知らぬ葉限は、すぐにそこに水を汲みに出かけた。

葉限の姿が見えなくなると、継母はすぐにかの女が脱いだ着物を着込んで、鋭い刃物を袖の中にかくして、池のはたに出かけて行った。そしてできるだけ継娘のような声をして魚を呼ぶと、さすがの魚も欺されて、水の上に頭を出した。継母はすかさず刃物でそれをさし殺した。

「ああ、これでやっと気がせいせいした」

継母はこう言って、魚を持って帰って、肉は食べてしまって、骨だけを糞の下に隠して置いた。

葉限はその後、池のはたに行ったが、いくら魚を呼んでも、魚は現われて来ないのであった。かの女は、継母が急に優しい口ぶりで着物を着換えさせたり、遠いところまで水汲みにやったりしたわけが、やっとわかった。かの女は悲しくてたまらないので、野原に駆けて行って、思うさま泣いていた。すると真黒い衣を纏って、髪の毛をふりかぶった一人の人が、天から降りて来て、しきりにかの女を慰めにかかった。かの女は泣きはらした目で相手を見つめながら、

「でも、わたくしの大切なお友達の魚がいなくなってしまったんですもの、泣かずにはいられませんわ」

と言った。するとその人が、

「そなたの継母が殺したのだよ。だが骨は糞の下に隠してあるから、そっと取り出して、そなたの部屋にしまって置くがよい。そうすればなんでもそなたの欲しいと思うものが現われるから」

と教えた。

葉限は、教わった通りにして、糞の下に隠してあった魚の骨を探し出した。そしてそれを自分の部屋にしまって置くと、その後というものは、黄金、白銀、美々しい着物——なんでも自分が欲しいと言いさえすれば、すぐに現われて来るようになった。

ある日、継母は自分の生んだ女の子を連れて、お祭に出かけた。葉限は継母の言いつけで、一人あとに残って、庭の果物の番をしていなくてはならなかった。しかしかの女は、継母たちが遠くまで行った頃を見はからって、綾錦の衣を纏って、黄金の履をはいて、お祭を見に出かけた。

と、腹ちがいの妹がそれに気がついて、母の袖をひっぱって、
「お母さん、あそこに綺麗な着物を着て立っているのは、姉さんじゃなくって？」
と囁いた。継母はこれを聞いて、その方を見ると、なるほど憎いと思う継娘そっくりの乙女が立っている。それでも継娘があんなに美々しい着物を持っているはずがないと思うと、人違いかという気もする。半信半疑の体で、ひたすら見つめていると、葉限は早くもそれを覚って、大急ぎで逃げ出したが、あまりあわてたので、黄金の履を片方だけ途中で落としてしまった。
継母も急いで家に帰って来た。すると継娘は汚ない着物を着て、庭の果物の樹を抱いたまま、こくりこくりと眠っていたので、
「やっぱり、さっきの綺麗な乙女は、他の家の娘さんだった」
と思って、やっと気がやすまった。
黄金の履は、ある男に拾われた。男は陀汗（だかん）という国の王にそれを売りつけた。王は履をいじりまわしながら、
「なんという素晴らしい履だろう。こんな履をはいている乙女は、きっと世に稀な美人に違いない」
と思った。そこで国中の乙女たちを呼び出して、その履をはかせて見たが、一人としてうまくはまるような足をしたものがなかった。王はがっかりして、履を売りつけた男を召し出した。そして、
「お前は、誰からこの履を貰ったのじゃ。なに、路に落ちていたのを拾った？　そうではないであろう。非道なことをして奪い取ったのだろう。早く本当のことを申せ」
と責（せ）めただしたが、男はどこまでも路で拾ったというので、さっぱり履の持主を探し出す手がかりが得られない。王はますます気を焦らせて、
「致しかたがない。この上は黄金の履を路に棄てて、ひそかに見張りをしているがいい。そして履をはきに参る乙女があったら、ひっ捕えてわしの前に連れて来てもらいたい」
と、家来たちに言いつけた。
家来たちは、黄金の履を路ばたに棄てて、自分たちは物陰に隠れて、じっと様子をうかがっていた。しばらくすると一人の乙女が、人目をはばかるようにして現われて来た。そしてあたりを見廻して履に足を入れようとした。途端に家来たちが駆け出して来て、乙女を捕えようとすると、かの女は素早く身をひるがえして逃げ出してしまった。
この由を王に申し上げると、王は勇み立って、
「それでやっと手がかりができた。一刻も早くその乙女の逃げ出したあたりを家探ししよう」
と言って、大勢の家来たちといっしょに家探しを始めた。一軒一軒と探し歩いているうちに、とある家の一間で、さっき逃げ出した乙女が見つかった。それはほかならぬ葉限であった。
家来たちは携えて来た黄金の履を葉限の足にはかせて見ると、大きくもなく小さくもなく、ぴたりとはまった。
「これだ、これだ。わしが求めていた乙女はこれだ」
王はこう叫んだ。乙女はしばらく物陰に引っ込んでいたが、やがて美々しく衣を纏い、黄金の

履をはいて、静々と王の前に現われた。その姿の麗しくて気高いこと、さながら天女のようであった。乙女は今までのことをくわしく王に物語った。王は葉限と魚の骨とを輿にのせて、自分の国に連れ帰った。継母とその娘とは、憎いと思う乙女が思いがけなくも玉の輿にのったので、嫉ましく腹立たしくて、煮えくり返るような胸をおさえたまま、茫然としてそのあとを見送っていると、どこからとなく大きな石が飛んで来て、それに撃たれて死んでしまった。

陀汗王は国に帰ると、葉限を上婦となしたが、かねて魚の骨の不思議な力を耳にしていたので、絶えず骨に祈って、いろんな宝を出させた。しかしあまり王の欲が深すぎたので、さすがの魚の骨もあきれ返ったのか、あとではなにひとつ出してくれなくなったということである。（『酉陽雑俎』）(14)

人間を吐き出す口

陽羨の許彦というものが、綏安山のほとりを歩いていると、一人の書生が、路の端に寝ていた。許彦が怪しんで、

「どうしてそんなところに寝ているのかね」

と尋ねると、書生は、

「脚が痛んで仕方がないんです。どうかあなたの背負っていらっしゃる鵝の籠に宿をさせて下さい」

と言った。許彦は笑って、

「冗談を言っては困るよ」

と言った。しかし書生は身を起こしたかと思うと、もう籠の中に入って、鵝と並んでいた。そして鵝も別に驚いた様子もなく、すっかり平気な顔をしていた。

許彦は籠を背負って歩き出したが、ちっとも重いと感じなかった。しばらく歩いているうちに、疲れて来たので、とある樹の下に籠をおろして休むことにした。と、書生が籠の中から出て来て、

「あなたに少し御馳走をして上げたいと思いますが……」

と言った。許彦が、

「よかろう、結構じゃ」

と答えると、書生はたちまち口の中から銅で拵えた一つの銅盤を吐き出した。銅盤の中にはさまざまの食物や酒がちゃんと並んでいた。

しばらく酒を酌み交わしたあとで、書生が、

「わたしは一人の女を連れているんですが、ここに呼び出してもいいでしょうか」

と尋ねた。

「いいとも、結構じゃ」

と、許彦が答えると、書生はまだ十五、六と見える一人の麗しい乙女を口から吐き出した。

書生は乙女を相手にしきりに酒を飲んでいるうちに、すっかり酔って、ごろりと横になってしまった。すると乙女が許彦にむかって、

「わたしはこの男の妻となってはいますが、実は怨みに思うことがあって、他に男をこしらえています。夫が眠っている隙に、その男を呼び出したいと思いますが、どうか夫には黙っていて下さい」

と言った。許彦が承知したと答えると、女はすぐに口の中から二十三、四になる男を吐き出した。男が許彦に時候の挨拶をしていると、眠っていた書生が目を覚ましかけた。それを見た女は、すばやく錦の屏風を吐き出して、それを立てて、書生といっしょに寝ることにした。

あとに残った男は、許彦にむかって、

「あの女と仲よくなりましたが、どうも気に向かぬことがありますので、他に女をこしらえて、いっしょに伴っています。ちょっとここで逢いたいと思いますが、どうか口外しないで下さい」

と言った。許彦が承知したと答えると、男はたちまち口の中から二十ばかりになる一人の婦人を吐き出した。そして男女むかい合って、酒を酌み交わしながら、しきりに戯言を言い始めた。

そのうち屏風のかなたで、書生と女とが動き出した。と、酒を飲んでいた男は、

「二人が目を覚ましたらしい。うっかりしてはいられぬ」

と言って、今まで酒の相手をしていた婦人を口の中に呑み込んでしまった。と思うと、屏風のうちから女が出て来て、酒を飲んでいる男に、

「夫が起き上がって来そうですよ」

と言うなり、彼を口の中に納めてしまって、すまし返って、許彦と向き合って座っていた。

しばらくすると、書生がのこのこ屏風のうちから出て来て、

「大分永い間眠っていましたが、あなた一人でさぞかしつまらなかったでしょう。もう日が暮れかかっていますから、これでお別れすることにしましょう」

と言って、女や銅盤などをすっかり口の中に呑み込んで、どこともなく立ち去った。(『続斉諧記』(15))

鬼酒鬼肉

四川省の酆都県に、丁愷という男が住んでいた。あるとき文書を持って、旅に出かけた。鬼門関を通り過ぎると、一つの石碑が立っていて、それに「陰陽界」という三文字が記されていた。

「ほお、では、ここが人間界と冥府(よみじ)との境だな」

と言いながら、丁愷はその境を越えて、少しばかり冥府の世界に入って来た。それから、

「こんなところに永居は無用だ」

と、もと来た路を引き返そうとしたが、どうしたのか迷い込んでしまって、どうしても人間界に帰れなかった。仕方がないので、足にまかせて歩いていると、もの古びた廟の側に出た。

廟の中には、神の像があって、その傍に牛の頭をした鬼が立っていた。鬼の像には、灰埃が積もって蛛蜘の網がひっかかっていた。それを見ると、丁愷は、

「この廟には、お坊さんがいないと見えて、何もかも埃だらけだ。可哀そうに」

と言って、牛頭鬼の灰埃や蛛蜘の網を払いのけてやった。そしてまた二里ばかり行くと、河が流

れていて、一人の女が菜を洗っていた。近づいてよく見ると、その女は、いつぞや亡くなった自分の妻であった。

妻は丁憶を見ると、非常に驚いて、

「あなたはどうしてこんなところにいらしたのです。ここは人間界ではありませんよ」

と言った。丁憶は路に迷ったことを話して、

「お前は今どこに住んでいるのかね。そして洗っているのは、なんという菜だね。いやに紫っぽい色をしているじゃないか」

と尋ねた。

「わたしは亡くなったあとで、閻羅王さまの手下の牛頭鬼のところに縁づいて、今ではこの河の西の槐の樹の下に住んでいますよ。洗っているのは、紫河車というもので、つまり世間で言う胞胎のことですよ。十ぺんも洗ったのは、子供が生まれてから、器量がよくて身分が貴く、二、三べん洗ったのは、中位の身分の子供となり、一ぺんも洗わないのは、汚なくて愚かな子供になるんです」

と、妻が教えた。これを聞くと、丁憶は、

「どうだろう、わしを人間界に帰らせてくれないかね」

と頼んで見た。すると妻は、

「わたしでは駄目です。主人が帰るのを待って、相談をして見ましょう。とにかくわたしの家にいらっしゃい」

と答えて、丁憶を自分の家に案内した。そして親しげに人間界のことをいろいろと尋ねているうちに、門を叩く音が聞こえて来た。丁憶はおどろき懼れて、牀（ねだい）の下にもぐり込んだ。

女が立ち上がって門を開くと、牛頭鬼が家の中に入って来た。そして牛の頭に手をかけたと思うと、すぽりと脱ぎ取って、几の上に投げ出した。見ると、それは仮面であって、鬼と見えたのに、眉目かたちも、笑ったり語ったりする様子も、ただの人間と変わりはなかった。

「いや、どうも今日は閻羅王のお側で、いろんな事件を審いて、脚が棒のようになった。酒でも飲ませてくれ」

鬼はこう言っていたが、急に驚いたような顔をして、

「はて、いやに人間臭いぞ。どうしたんだね」

としきりに鼻をくんくんいわせた。妻は隠しても駄目だと思ったので、牀の下から丁憶を引っぱり出して、

「この人は、なんにも知らずに、ここに迷い込んだのです。可哀そうだから、助けてやって下さい」

と、鬼に哀願した。鬼は丁憶の顔を見ながら、

「いや、この人なら助けてやるとも。実はね、わしが今日、廟の中で顔中を灰だらけにしていると、この人が親切に拭き取ってくれたんだよ。だがこの人の寿命がどうなっているか、わしにはわからない。明日になったら、判官のところに行って、そっと帳簿を盗み見することにしよう。さあ酒だ、酒だ」

と言った。

やがて酒肴の用意がととのったので、三人は車座になって、酒を飲み始めた。丁愷は酒の肴を挟もうと思って、箸を取りあげようとすると、鬼と妻とがあわててそれをひったくって、

「いけない、いけない。鬼の酒はいくら飲んでも、別状はないが、鬼の肉を食べると、いつまでもこの世界に留まっていなくてはなりませんからな」

と、注意をしてくれた。

あくる日、鬼は家を出て行ったが、日暮れに嬉しそうな顔をして帰って来た。そして、丁愷にむかって、

「いや、おめでとう。判官の帳簿によると、あなたの寿命はまだ尽きていませんよ。大丈夫、人間界に帰れます。それに私も用事があって、ちょっと冥府から出かけることになりましたから、ついでにお送りしてあげよう」

と言った。それから一塊の肉を取り出して、

「これを人間界に持っていらっしゃい。大金を儲けることができるんですから」

と言った。肉は真赤な色をしていたが、腐れかけて、ひどい臭いがしていた。丁愷は驚き怪しんで、

「どうしたというんです。どうしてこの肉が金儲けの種になるのです」

と尋ねた。鬼は笑って、

「河南に張某という大金持ちがいます。これは其奴の背の肉です。張という男は、悪いことばかりしているので、閻羅王が生捕にして、鉤でその背を鉄錐山に吊して置かれたのです。ところが夜中に背の肉がちぎれて、張の奴、人間界に逃げもどったのですが、背の傷が痛んで仕方がない。たくさんの医者が手をつくしても、少しも利目がない。で、この肉を持って行って、すり砕いて傷口に並べると、すぐによくなります。そしたらきっとお礼に大金をくれるに違いありません」

と話した。

丁愷は鬼にお礼を言って、肉を紙に包んだ。そして鬼といっしょに出かけたが、鬼門関を出ると、鬼の姿は忽然として見えなくなった。丁愷はすぐに河南に出かけて行った。と、果たして張某という大金持ちが背の傷に悩んでいるということを聞き込んだので、鬼に教わった通りにすると、傷がたちどころに癒えた。張某は非常に喜んで、お礼として五百金を丁愷に贈った。(『新斉諧』)(16)

石亀の眼

昔、和州歴陽県に、一人の書生があった。年をとった一人の女が、この書生を可愛がって、心から親切にもてなしていた。

ある時、書生がこの老女にむかって、

「お婆さん、わたしはお婆さんにぜひ話しておきたいことがあるんですがね」

と言った。老女は、
「わしに話したいことって、いったいなんだね。早く話しておくれ」
と答えた。書生は真面目な顔をして、
「この県の門に石でこしらえた亀があるでしょう」
と言った。
「あるとも。その石の亀がどうしたと言うのかね」
と、老女が尋ねた。
「あの亀によく気をつけておくれ。そしてもし亀の眼から血が出ていたら、すぐにこの県から逃げ出すんですよ」
と、書生が言った。老女は変な顔をして、
「それはまたどういう訳だね」
と尋ねた。
「だって、石の亀の眼に血が滲み出ると、この歴陽県がすっかり凹んでしまって、大きな湖になるんですよ。命が惜しかったら、早く逃げるんですね」
と、書生が言った。
老女は、その後は、毎日のように県の門のところに出かけて行った。そしてしばらくの間、石の亀の眼をじっと見つめたあとで、
「まだまだ、大丈夫じゃ」

と独り言をいっては、帰って行くのであった。
そんなことが幾日も続くので、門を守っていた役人が不審に思って、ある日、帰りかけた老女を呼び留めて、
「お前は、根気よくここにやって来ては、石の亀の眼を見つめているが、いったいどうしたというんだね」
と尋ねた。老女は書生から聞いたことを逐一話して、
「だから毎日こうやって、亀の眼を調べに来るのですよ」
と言って、立ち去った。そのあとで役人は、
「石の亀の眼に血が滲み出るなんて、大笑いだ。ましてこの県が凹んで湖になるなんて、そんな馬鹿げたことがあってたまるものか」
と、大きな声で笑っていたが、やがて、
「うん、面白いことを思いついた。あの婆さんが、書生とやらが言ったことを、大真面目に信じ込んでいるから、一つびっくりさせてやろう」
と思って、赤い珠を以て石の亀の眼に点じて置いた。
あくる日になると、老女がまたのこのことやって来た。そして石の亀の眼を覗き込んだかと思うと、たちまち頓狂な声を出して、
「さあ大変じゃ。亀の眼に血が滲み出したぞ。これはぐずぐずしていられぬ」
と言うなり、大急ぎで北山の上に登って行った。役人はそのあとを見送って、

「あっはっは、芝居がうまく当たったわい。婆さんの、あのあわてようはどうじゃ」
と言って大笑いをした。しかししばらくすると、にわかに天地が崩れたかと思うような大きな音がして、歴陽県一帯が凹んで湖となった。そして婆さんのことを笑った役人はもとより、県中のものがみな死んでしまった。（『述異記』*）

水を噴く臼

昔、有莘氏の娘が、桑を採りに行くと、どこからとなく子供の泣き声が聞こえてきた。
「おや、どこに子供がいるんでしょう」
と、あたりを見廻していると、大きな桑の樹の幹に空洞ができていて、その中に男の赤ん坊が入っていた。乙女は、それを拾って帰って、主君に献上した。
主君は、庖人（りょうりばん）にその児を養わせることにしたが、
「なんにしても、木の幹から子供が生まれ出たことは珍しい。これには何か仔細があるだろう」
と思って、いろいろ詮議をしているうちに、その理由が明らかになった。
伊水のほとりに、一人の女が住んでいた。かの女が身重になっている頃、不思議な夢を見た。夢に神さまが現われて、
「臼から水が出たら、東に走るがよい」
と告げた。女は驚き怪しんで、臼に気をつけていると、その翌日、果たして水が噴き出した。女は神の教えに従って、すぐに東へ東へと駆け出した。十里ばかり駆けつづけたあとで、
「わたしの村はどうなったでしょう」
と、後の方をふり向いて見ると、いつの間にか、かの女の住んでいた村はすっかり水の下に沈んでしまっていた。かの女はおどろき悲しんだ拍子に、一本の桑の樹に変わった。そして身重になっていたので、その幹から赤ん坊が生まれ出たのであった。この子が成長して伊尹となった。（『呂氏春秋』17）

黄鳥の報恩

弘農の楊宝という男が、九歳の時のことであった。
ある日、ぶらりぶらりと歩き廻っているうちに、華陰山という山の近くにやって来た。と、たちまちけたたましい鳥の鳴き声がしたので、はっとして、声のした方を見ると、一羽の黄鳥が、羽根を乱して、地面に苦しそうにもがいていた。黄鳥はたちの悪い鴟梟のために叩きおとされたのであった。
楊宝はその側に歩みよって、
「可哀そうなことをしたな。ひどくやられているらしい」
と独り言をいって、じっと黄鳥を見つめていた。黄鳥は小さな目を閉じたり開いたりして、しきりに地面をころげ廻っている。ふと気がつくと、いつの間にか大きな蟻がたくさん黄鳥の体にた

かって、ところかまわず刺しているのであった。

「ほんとに可哀そうだ。このままほおっておいたら、死んでしまうだろう」

楊宝は子供心にそう思って、そっと黄鳥を拾い上げた。そして自分の家に持って帰って、箱に入れて、黄花を食べさせて養って置いた。

黄鳥はだんだんと元気づいて来た。そして百日あまり経つと、鴟梟や蟻のためにむしりとられた羽根が立派に生えそろった。楊宝は心から喜んで、

「もうにがしてやっても大丈夫だろう」

と、箱の蓋を開けてやった。黄鳥は嬉しそうに、箱の中から飛び出したが、夕方になると、また還って来た。

こうして黄鳥は毎日朝になると、飛んで行って、夕方になると、再び還って来るのであった。ある晩、楊宝が熱心に書物を読んでいると、あたりに人のけはいがした。何げなく頭を上げると、自分の目の前に、黄色い衣を纏った一人の童子が立っていた。楊宝は驚き怪しんで、

「君は誰なの？」

と尋ねた。童子はここにこと笑いながら、

「わたしは王母さまの使者ですよ」

と答えた。楊宝は目を見はって、

「なに、王母さまのお使者だって。そしてどうしてわたしの家にやって来たの？」

と尋ねた。

「あなたは、黄鳥を助けてやったことがあるでしょう。わたしはあの黄鳥なんですよ」

と、童子が言った。黄鳥と聞いて、楊宝はさもなつかしそうに童子の顔を見つめながら、また、

「どうしてここに訪ねて来たの？」

と尋ねた。

「今度王母さまの言いつけで、南海に使いに出ることになったんです。で、もう二度とあなたのところへ来られなくなると思って、ちょっとお礼に来たのですよ」

童子はこう言って、懐から四つの白い環を取り出した。そして、

「ほんとにあなたのお陰で危うい命を助かりました。ほんのお礼のしるしに、これを差し上げます。あなたの子孫はこの環のように潔白で、位は三公に登るでしょう。では御機嫌よく」

と言って、四つの白い環を楊宝に渡すなり、どこともなく姿を消してしまった。

黄鳥が言ったように、楊宝の子孫は四代ひきつづいて三公の高い位に登った。（『捜神記』・『続斉諧記』(18)）

読経魚

彭蠡湖の畔に、李進勍というものが住んでいた。湖でとれた魚を船に積み込んで、あちらこちらに売りに出ることを商売としていた。

ある時、金陵に魚を売りに出かけた。そして一夜、三山の浦に泊っていたが、風が静かに凪

いで、月が冴え渡っているので、岸辺をぶらりぶらりと歩いていた。すると、自分の船の中で、おびただしい人々がお経を読んでいる声が聞こえて来た。進勗は驚き怪しんで、岸に突っ立ったまま、じっと耳をすましていたが、読経の声が、あまり清らかに澄み渡っているので、そっと船に入り込んで見た。と、不思議や、人影は更に見えないで、おびただしい魚があくあくしているだけであった。進勗はそれを見ると、急に悟るところがあって、

「輪廻転生ということがある。わしは永い間、魚を殺していたが、魚だってどんな人の生まれかわりかも知れぬ。さてさて罪深い商売であるわい」

と言って、船の中の魚をすっかり水の中に逃がしてやった。そしてその後は商売をかえて、薪を売ることにした。

あるとき、たくさんの薪を載せて、金陵に売りに出かけていると、途中で大風が起こって、筏が水に沈んだ。進勗も水の中に落ち込んだが、どうしたのか体がふわふわと浮いている。ふと気がつくと、なんだか下から自分の体を支えているものがあるように思われた。そうしているうちに、数本の竹が自分の側に吹き寄せられたので、それに縋りついて、やっと少し気が落ちついてきた。

「やれ、やれ、これで溺れ死ぬことはまぬがれるかも知れないぞ」

進勗はこう言って、あたりを見ると、数百尾の魚が、彼の体を支えたり、竹を引っぱったりしていた。

「ほう、魚どもが恩返しにやって来たな。有り難いことじゃ」

と言っているうちに、竹が、とある洲に漂い着いた。進勗は急いで洲の上にあがって、あとをふり向くと、魚どもはもうことごとく姿をかくしていた。

進勗は、洲の上をあちらこちらと歩き廻ったが、水の中の離れ島になっているので、どこにも行くところがない。そのうちに日がとっぷりと暮れてしまった。彼は地面に座り込んで、

「溺死はまぬがれたが、今度は飢死にをしなくてはならないのか」

と、涙を流して悲しんでいると、荻の叢立の中に何やら光るものが見えた。拾い上げると、それは二斤の金であった。途端に真白い衣を纏った一人の男が水の中から現われて、

「あなたに命を助けられた魚が御恩返しをするのです。御安心なさい」

と言って、姿を消してしまった。

翌朝になると、また数十尾の魚が、一隻の船を洲の近くに引っぱって来た。見ると、橈や棹などが、ちゃんと具わっていた。進勗は夢かと驚き喜んで、すぐにその舟に乗り込んで、岸辺に漕ぎ寄せた。（『搜神記』）

鶴と明月珠

昔、あるところに噲参という男があった。非常に孝心深くて、自分の母を一所懸命に大切にし

ていた。あるとき戎人が鶴を見つけて、矢を放った。矢はあやまたず鶴の体にあたった。傷ついた鶴は、ふらふらとなって、とある家の庭に舞い降りた。それは噲参の家であった。

噲参は、鶴が傷を負って、苦しみ悩んでいるのを見ると、自分の家に抱え込んで、心をこめて治療をしてやった。

しばらくすると、傷がすっかりよくなったので、

「さあ、お前の体を自由にしてやるよ。今後はよく気をつけて、怪我をしないようにおしよ」

と言って、放ってやった。鶴は嬉しそうに飛び去った。

それからしばらくたった後の夜のことである。噲参は門の外に鳥の啼く音を聞いた。怪しんで出て見ると、雌雄二羽の鶴が仲よく並んで立っていた。そのうちの一羽は、たしかに自分がいつぞや放してやった鶴であった。噲参は驚き喜んで、

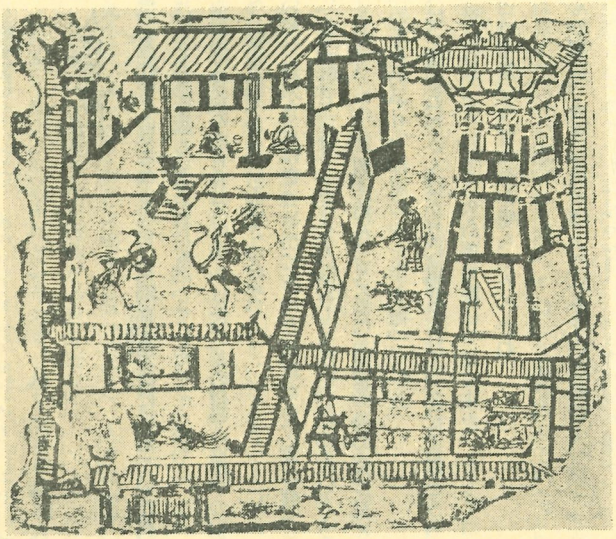
「おお、わしを忘れずに、よく訪ねて来てくれた」

と言った。二羽の鶴は、何やら光り輝くものを口にふくんでいたが、やがてそれを下に落として、どこともなく飛び去った。噲参は、

「なんだろう。妙なものを落として行ったな」

といぶかりながら、それを拾い上げて見ると、二つながら、紛れもなく明月珠という宝玉であった。噲参は、しみじみした気持ちになって、

「わしが少しばかり世話をしてやったので、夫婦うち揃って、お礼にやって来たのだな。感心なものじゃ」



舞鶴図　漢代の上層階級の屋敷で、右側にあるのが高楼。奥の建物では酒宴が催されており、その前庭に二羽の鶴がおりて舞っている。なお、下段ほぼ中央にあるのが井戸、その左側の門側に闘鶏の場面。四川漢代墳墓の壁画。『四川漢画像磚選集』より。

と思った。（『述異記』）

人虎奇譚(一)

宋の英宗の義熙四年のことである。東陽郡太末県に住んでいた呉道宗というものが、父を失くして、母といっしょに寂しくその日を送っていた。

ある日、道宗は貸金を取り立てに出かけた。その留守に道宗の家の中で、なんだか変な唸り声が聞こえた。隣家の人がそれを聞きつけて、

「おかしいぞ。道宗さんはさっき出て行ったんだから、家に残っているのは、お母さん一人のはずだが、今の唸り声は、どうも人間らしくない。いったいどうしたというんだろう」

と、驚き怪しんで、そっと覗き込んで見ると、道宗の母の姿は見えないで、真黒い斑紋のついた一匹の虎がのそりのそりと部屋の中を歩き廻っていた。

隣家の人は、腰をぬかさんばかりに驚き恐れて、急に太鼓をうち鳴らした。村の人たちは時ならぬ太鼓の音にびっくりして、大急ぎで駆けつけて来た。そして口をそろえて、

「おい、どうした。なぜ太鼓を鳴らしたのかね」

と尋ねた。

「道宗さんの家に、大きな虎がはいり込んでいるのだよ」

と、隣家の人が、顔色をかえて言った。

「なに、虎がやって来た。それは大変だ。みんなで叩き殺せ」

と、人々はすぐに道宗の家を取り囲んだ。そして元気のいい男たちが、家の中に踏み込んで見ると、虎の姿は見えないで、道宗の母がつくねんと座り込んでいた。かの女は人々がどやどやと入り込んで来たのを見ると、

「どうなすったんです。だしぬけに駆け込んでいらして」

と、いぶかしそうに尋ねた。人々は何が何やらわからなくなって、いい加減な返答をしながら、こそこそと引き上げた。

それからしばらくたつと、道宗の家から母の姿が見えなくなった。それと同時に太末県のあちらこちらで、虎に襲われたというものが頻々と現われて来た。そして襲われた者の話を聞くと、誰も彼もその虎には、真黒い斑紋がついていたと言うのであった。

人々は、そのまま捨てて置いては、大変なことになるというので、大がかりな虎狩りを催すことにした。虎は幾人も幾人も食い殺して、懸命に荒れ廻ったが、とうとう箭に胸を射られ、戟で腹を刺された。それでもなお死なないで、どこともなく逃げ去った。

それから数日たつと、道宗の家の寝台に、一匹の虎が寝ているという評判が立った。人々が訪ねて行って見ると、虎は胸と腹とに痛手を負っていた。人々はお互いに顔を見合わせて、

「さては、この虎は、道宗さんの母御だったんだな」

「いつぞやこの家に虎が入り込んだというので、わしたちが踏み込んで見ると、虎の姿は見えないで、母御が座っていたね。あのときは何が何だかさっぱりわからなかったが、これでやっ

とのみ込めたよ」

「そうだ、平常は自由に人間になったり虎になったりしていたが、痛手に弱って、今度は元の姿に還れないんだね」

などと囁き合った。

道宗の母は痛手に堪えかねて、とうとう死んでしまった。道宗は心から嘆き悲しんで、丁寧に葬った。（『齊諧記』・『太平御覧』(19)）

人虎奇譚(二)

魏の時代に、尋陽県の山の中に蛮人が住んでいたが、術を使って人間を虎にすることができるという噂であった。

ある時、周畛というものの召使いが、妻と妹とをつれて、山に入って薪を伐っていた。しばらくすると、召使いは二人にむかって、

「お前たちは、少しの間、高い樹に上って、わしがすることを見ているがいい」

と言い出した。二人は変なことを言うと思ったが、その言葉に従って、高い樹の上によじ登った。そしてどんなことが起こるだろうと思って、じっと下を見おろしていると、召使いはやがて草の中に入って、姿が見えなくなった。

と、たちまち一匹の大きな虎が、草の中から現われて、ものすごい声で吼え立てては、あちらこちらと駆け廻り始めた。樹の上の二人は、恐ろしさに身をふるわせて、懸命に枝にしがみついていた。

しばらくすると、虎はまた草の中に入って行った。と思うと、召使いが草ふみわけて、のこのこと出て来て、二人に、

「もう樹から下りてもいいよ」

と言った。二人が樹から下りて来ると、召使いは、

「お前たちが、今見たことは、けっして他人に話してはいけないよ」

と戒めた。

二人は、召使いのあとについて、黙々として家に帰って来た。そしてしばらくの間は、召使いの戒めを守っていたが、言うなと言われると、なおさら言ってみたいのが人情なので、とうとう怪しい虎の話を他人にうち明けてしまった。

その話が、やがて主人の周畛の耳に入った。

「それは不思議だ。何かいわくがあるだろう。よし、わしがそれを見破ってやる」

彼はこう言って、ある日、召使いを呼び出して、したたか酒を飲ませた。深いたくらみがあるとも知らぬ召使いは、好きな酒とて、がぶがぶ飲んでいるうちに、とうとう酔い倒れて、前後も知らず眠ってしまった。しすましたりと、周畛は、召使いの衣を剝ぎ取って、よく調べて見たが、なんの変わったこともない。体を調べて見たが、やはり怪しい節も見当たらなかった。

「おかしいな。何かあるはずだが」

と、なおも根気よく調べていると、召使いの頭髪の間に、一枚の紙が隠してあった。取り出して見ると、大きな虎を描いてあって、その側に符が添えてあった。

「ははあ、これだな。これの力で虎になるんだな」

と、周昉が、さも感心したように独り言を言っていると、やがて召使いが目を覚ました。

召使いは、隠していたことが現われたと悟ると、

「やあ、どうも弱りましたね」

と言って、苦笑をした。

「お前は、多分、山の中にいる蛮人から、虎になる術を教わったんだろう」

と、周昉が尋ねた。

「実は、そうなんで」

と、召使いが答えた。

「よく教えてくれたね。そんな珍しい術を」

と、周昉が言うと、

「いや、なかなか教えてくれませんでしたが、布を三尺、米を数升、それから赤い色をした雄鶏を一羽と、酒を一升やって、うまく機嫌をとりますと、やっと秘法を伝えてくれました」

と、召使いが答えた。(『捜神後記』*)

烏喙将軍

開元年中のことであった。郭元振というものが、晋から汾に旅をしていると、夜路に迷ってしまった。いくら行っても人間に出遇わぬので、

「困ったな。泊るところも見つからないで」

と呟いていると、どこからとなく人の泣き声が聞こえて来た。

「はて、変だぞ。何事だろう」

と、声をしるべに尋ねて行くと、一軒の家があって、その一間で美しい女がさめざめと泣いていた。郭元振は驚き怪しんで、

「そなたは果たして人間か、それとも鬼か」

と尋ねると、女は、

「人間でございますとも」

と答えた。

「どうしてただ一人、そこで泣いているのじゃ」

と、郭元振が尋ねた。

「それには仔細がございます。わたしの郷に烏喙将軍というものがいまして、よく人間に福を与えたり、禍いを下したりするのでございます。で、毎年、郷の者が美しい女を選んでは、烏

喙将軍のお嫁にささげて、利得をはかります。わたしの父も利に迷って、わたしにお酒を飲ませて、酔い倒れたのを見すまして、この部屋に閉じこめて行ってしまったのでございます。今に烏喙将軍が参って、わたしを手籠めに致すでございましょう。それが悲しくて泣いているのでございます」

と、女が答えた。郭元振はこれを聞くと、非常に腹を立てて、

「烏喙将軍とやら、実に怪しからぬ怪物じゃ。よし、わしがそなたを助けてやるから、安心するがよい。して其奴はいつになったら、やって来るのじゃ」

と尋ねた。

「夜の二更でございます」

と、女が答えた。

夜の二更になると、果たして烏喙将軍がやって来た。郭元振はいきなり物陰から躍り出して、刀を抜いてその腕を切り落とした。将軍は声も立て得ないで、こそこそと逃げ出した。

夜が明けはなれてから、切り落とした腕を見ると、それは猪の蹄であった。郭元振は、

「なんじゃ、猪の怪であったのか。重ね重ね不埒な奴じゃ」

と、すぐに郷の人たちを呼び集めて、夜の出来事を話し、猪の蹄を見せて、

「どうか、みんなで怪物を探し出してもらいたい」

と頼んだ。郷の人たちは、弓矢を手にして、こぼれている血潮のあとを辿って尋ねて行くと、とある大きな塚のほとりに出た。塚の中には、大きな猪が寝ていた。見ると前の蹄が失くなっている。猪は人々が押しよせて来るのを見ると、あわてふためいて塚の中から逃げ出した。人々は追い迫って、とうとう殺してしまった。（『幽怪録』(20)）

碓の怪

昔、楚の国に李楚賓というものがいた。大胆剛毅な男で、いつも狩りをして楽しんでいた。

その頃、董元範というものの母が、変な病気に悩んでいた。昼の間はなんともないが、夜になると、鋭い刃物で背を突き刺されるように、痛くて痛くてたまらないのであった。元範は非常に心配して、医薬をのませたり、針をうたせたり、灸をすえさせたりしたが、少しもきめがなかった。こうして彼の母は、もう一年ばかり苦しみ悩んでいるのであった。

そうしているうちに、朱邯という易者が、あるとき元範の家に泊った。あけの朝になって、朱邯が元範にむかって、

「どうしたのでしょう。昨夜おそくなってから、女の泣き叫ぶ声を聞きましたが……」

と尋ねた。元範は顔を曇らせて、

「いや、実は私の母が、一年このかた、わけのわからぬ病気になりまして、夜になりさえすると、刃物で背を刺されるような痛みを感じると申して、あんなに泣き叫ぶのです。いろいろ治療の法をつくしていますが、さっぱりききめがなくて、全く困りきっているところです」

と答えた。

「それはお気の毒ですな。私が占って見ましょう」
朱邯はこう言って、しきりに易の卦をうかがっていたが、やがて、
「いいことがあります。今日一人の男が弓箭を手にして、こちらにやって来ます。で、あなたは道端で待っていて、その人が現われたら、懇ろに頼んで、お家に連れておいでなさい。きっと母上の病をいやしてくれるでしょう」
と言って、辞し去った。
元範は、その言葉に従って、道端で待っていた。すると果たして一人の男――それは楚賓であった――が、弓箭を手にして通りかかった。元範はその側に歩み寄って、丁寧に時候の挨拶をしたあとで、
「突然にこんなことをお願いしてすみませんが、どうか今夜はまげて私の家にお泊り下さい」
と言った。楚賓は、じっと元範の顔を見つめながら、
「わたしはまだ一つも獲物がありません。それに陽がなお高いのですもの、宿をお借りする必要はありませんよ」
と答えた。元範はなおも言葉を卑くして、
「いや、わけを申さねば、御不審にお思いでしょう。実は……」
と言って、母の怪しい病気のこと、易者の語ったことなどをくわしく話して、
「そういうわけですから、どうか御迷惑でも、私の家にお出で下さって、母の命をお助け下さい」

と頼み込んだ。楚賓はこれを聞くと、気の毒に思って、元範の頼みに応ずることにした。
元範は楚賓を家に伴い帰って、酒肴を出して手厚くもてなした。その夜は、月が冴え渡って、あたりが昼のように明るかった。楚賓は夜中に月にうかれて、自分にあてがわれた東の房を出た。そしてあたりをぶらついていると、にわかに空中にものすごい羽音が聞こえた。はっと思って、上を仰ぐと、一羽の大きな鳥が、悠々と空をかけっているのが目についた。鳥は元範の母が寝ている部屋の上にとまって、くちばしで屋根をつつき始めた。と思うと、たちまち部屋の中から苦しみもだえる声が、けたたましく響いてきた。
「さては、あの怪鳥のせいだな。よし、今に見ろ」
楚賓はこう言って、急いで自分の部屋に帰って弓箭を持ち出した。そして屋根の上の怪鳥を狙いすまして、続けさまに数本の箭を射放った。箭はことごとく鳥にあたった。鳥はよろめきながら、どことなく姿を消した。途端に家の中の呻き声がぴたりと止んでしまった。
翌朝になると、楚賓は元範にむかって、
「昨夜、母上を悩ましていた病の根を除きましたぞ」
と言った。元範は非常に喜んで、
「それはどうも有り難うございました。どんなにして病の根をお除きになったのです」
と尋ねた。楚賓は夜中に一羽の怪鳥を射とめたことを話して、
「さあ、怪鳥の行方をつきとめようではありませんか」
と言った。元範はすぐにこれに応じて、二人で家のまわりを探し歩いたが、それらしいものは更

に見つからなかった。

「どうしたのでしょう。確かに射とめたのですから、遠くに逃げ去るはずはありませんが」

楚賓はこう言いながら、ふと碓の上を見ると、そこに数本の箭がつっ立っていて、そこから血潮が流れ出ていた。二人は驚きあきれて、

「さては、怪鳥は碓の精が化けて出たのであったな」

と、互いに顔を見合わせた。

元範はすぐに火を焚いて碓を燃やしてしまった。母の病気はけろりとよくなった。元範は一束の絹を取り出して、お礼のしるしに楚賓に贈ろうとしたが、彼はそれを受け取ろうともしないで、そのまま立ち去った。(『捜神記』)

多毛の人

陽房県に房山という山がある。山の四面にたくさんの石の洞穴があって、その中に異様な人間どもが住んでいた。

彼らはいずれも身の丈が一丈余りもあって、体中に毛が生えていた。これらの毛人はときどき山を下って、人里に出て来る。そしてのこのこと他人の屋敷に入り込んでは、鶏や犬を盗み出して、むしゃむしゃと食ってしまうのであった。人々が怒って、それを妨げようとすると、毛人どもは、大きな手をのばしてこれを引っ摑んだり擲りつけたりする。仕方がないので、鉄砲を撃ちかけるが、鉛子が彼らの体にあたったかと思うと、ことごとくはね返って、大地に落ちてしまうのであった。

昔から言い伝えられているところによると、彼らをやっつける手段は、ただ一つしかない。手をたたいて、大きな声で、

「長城を築け、長城を築け」

と叫ぶのである。この叫び声を耳にすると、さしもの毛人どもも、あわてふためいて逃げ去るのであった。

秦の始皇が、万里の長城を築いたとき、おびただしい男女が、人夫に狩り出された。そしてまるで犬や馬のようにひどく使い廻されたので、彼らは、

「これはたまらぬ。このままにしていたら、死んでしまうに違いない」

と言って、申し合わせて山の奥深く逃げ込んでしまった。毛人たちは、すなわちこれらの逃亡者のなれの果てであった。彼らは長城を築いた頃の憂き辛さが、骨身にしみ込んで、いつまでも忘れられないと見えて、人間の姿を見さえすると、

「城はもう出来上がったかね」

と尋ねるのであった。こんなふうだから、彼らを追い払うには、「長城を築け」と言うに限ると信じられたのである。(『新斉諧』)

巨人伝説

中国から西南に遠く離れたところに、一人の巨人がいた。その名を無不達と言った。背の高さが一丈、腹のまわりが九尺もあった。そして亀と蛇とを踏みつけて、朱鳥を頭にいただいて、左手を白虎にもたせかけているのであった。

大男は総身に知恵が廻りかねる、と言われているが、この巨人はけっしてそうではなかった。いろんな植物について、いちいちその味を知っており、天が下に住むありとあらゆる鳥や獣の言葉を解することができた。それで、もし人間がこの巨人に出会って、うやうやしくお辞儀をして、

「どうかわたしを知恵者にして下さい」

と頼めば、彼はこれに神のような知恵を授けるのであった。

それから、中国から西北に当たる海のかなたには、更に素晴らしい巨人が住んでいた。身の丈が二千里で、脚と脚との間が千里で、腹のまわりが一千六百里というのだから、ものすごい。五穀や魚の肉などはいっさい食わないで、ただ天の甘露を飲んでいる。一日に飲むこと五斗。腹が空いてくると、立ったまま上を向いて、天に口をつけて甘露酒をがぶがぶと飲みつづける。ときどきは大きな体をのっしのっしと揺るがして、山や海に遊びに出かけるが、悪気がないので、けっして人間の迷惑になるようなことをしない。命はというと、天地のあるかぎり生き続けるのであった。

更に中国から東南に遠く離れたところにも、一人の巨人があった。尺郭と呼ばれる大男で、身の丈七丈、腹のまわりはそれと同じくらいであった。赤い衣を纏って、縞の帯をして、赤い蛇を額に巻きつけている。人間の食べるところと違って、鬼を毎日の御飯にしている。毎朝、悪い鬼を捕えて、むしゃむしゃと食べること三千、夕方になると、同じく邪鬼を三千ほどぺろりと呑み込んでしまう。だから、またの名を食邪道師といい、もしくは呑邪鬼という。（『神異経』）

これらは、個々の巨人であるが、こうした大男がたくさん集まって一つの世界をなしている——いわゆる巨人国なるものも存していた。『河図龍文』の言うところに従うと、龍柏国というのが、そうした巨人国の一つであった。ここに住んでいるものは、背の高さが三十丈あった。それから大秦国の人間は身のたけ十丈で、その東十万里のところに佻国があって、国中の人はみな三丈五尺、更にその東十万里のところにある中秦国の人間は一丈。天の東南西北極には、おのおのもっと素晴らしい巨人国が存していた。頭が銅でできていて、額が鉄でできていて、背の高さは、三千万丈というのであるから、ちょっと想像もしかねる大男たちの群れである。それから車隣国というのも、一つの巨人国で、そこに住んでいるものは、男も女もみな背の高さが、八丈八尺あったと言われる（『魏略』）。また波谷山もまさしく巨人国である。波谷山は、東海のかなたに位したが、そこには大人の市があって、一人の大人が山のように蹲って両臂を張っていた。（『山海経』）

明の慶宗の御代に、倭寇を禦いでいた蘇州の軍士たちが、海上で烈しい暴風に遭った。船はさか巻く波に木の葉のように漂っていたが、やがて見も知らぬ一つの島に流れ寄った。軍士たちは、大きな吐息をして、

「やれ、やれ、これでどうやら命だけは助かったらしいぞ」

と言いながら、島に上がった。と、だしぬけに林の中から雲つくような大男が揺らぎ出て来た。背の高さが三、四丈、目が深く凹んで、顔が真黒で、見るも恐ろしい様子をしていた。

大男は軍士たちを見ると、たちまち跳りかかってこれを捕えた。そしてあたりに生えていた藤蔓をひきちぎって、数珠つなぎにして、樹の上にぶら下げると、げらげらと物凄く笑いながら、また林の中に姿を隠してしまった。

軍士たちは顔を見合わせて、

「おい、大変なことになったな。ぐずぐずしていると、命が失くなるぞ」

「大男がまたやって来ると、一大事じゃ。今のうちに逃げ出さなくては駄目だ」

と言って、みんなで力をあわせて、やっと藤蔓を断ちきった。そしてほうほうの体で船に逃げ帰ったかと思うと、また数人の大男が現われて来た。

「つかまっては大変だ。逃げろ、逃げろ」

と、軍士たちは、あわてふためいて、船を漕ぎ出した。しかし大男どもは海にわたり込んで、船を追いかけた。そしてまたたく間に追いつくが早いか、船端に手をかけて攀じ登ろうとした。軍士はもう恐ろしさに、手も足も出なくなって、いたずらにぶるぶる顫えていた。すると心利いた

一人の勇士が、いきなり剣を抜いて、船端を摑んでいる大男の手の指を切り落としたので、さすがの大男どもも船を見捨てて立ち去った。やっと気が落ちついた軍士たちは、船の中にころがっている大男の指を眺めた。そして、

「素晴らしく長い指だな」

と、みんな驚きあきれていたが、やがて長さを計って見ると、一節の長さだけで一尺四寸もあった。(『語林』)

昔、夸父という一人の巨人があった。

あるとき彼は、

「おれには、どんなことでもできぬということはない。何か一つどえらいことをしてやりたいものだな」

と、しきりに首をひねっていたが、やがて、

「そうだ、そうだ。太陽を追っかけ廻して、ひっ捕えてやろう」

と言い出した。

彼は、日の影を追って、太陽の沈むところまで駆けて行ったが、太陽を捕えることはできなくて、喉がやたらに渇き出した。

「これはたまらぬ。うかうかしていると、渇き死にをしなくてはならぬぞ」

巨人はこう言って、黄河と渭水の水をしたたか飲んだが、それでも渇きがとまらなかった。

巨人は物狂おしい気持ちになって、

「仕方がない。今度は大沢に行って、思う存分、水を飲むことにしよう」

と、いっさんに大沢指して駆け出した。しかしそこに行きつかないうちに、たまらなく喉が焦げついて来て、とうとう持っていた杖を地面に投げ出したまま、渇き死にしてしまった。

しばらくすると、巨人の肉や脂が腐って、そこに鄧林という大きな林ができた。林の広さは、数千里にわたったということである。(『列子』)(21)

魏の咸熙三年に、一人の巨人が襄武県に現われた。黄色の単衣を纏って、黄巾を頭につけていたが、その下から白髪が垂れていた。その巨人は大地に大きな足跡をつけて立ち去った。それを計って見ると、長さが三尺二寸に及んだ。(『魏志』)

昔、張靖というものが、路を歩いていると、一人の巨人に出遇った。身の丈が五丈もあった。張靖は驚き怪しんで、主の符健の前に出て、

「ただ今驚くような大男に出遇いました」

と言った。

「大男と申して、身の丈はどれくらいじゃ」

と、符健が尋ねた。

「そうでございますね。五丈はたっぷりありましたでしょう」

と、張靖が答えた。これを聞くと、符健は怒り出して、

「ふとどきな男じゃ。そなたは妄言を吐いて、世をまどわすつもりだな」

と言って、張靖を獄につないでしまった。

しばらくすると、霖雨（ながあめ）が降り出して、いつまでも止まなかった。それがために河という河が溢れた。と、河上から大きな履が一つ流れて来た。人々はそれを見ると、胆を潰して、

「なんという大きな履だろう」

と、大騒ぎをしてそれを拾い上げた。履の長さは七尺三寸あった。符健はそれを聞くと、

「張靖の言ったことは、真実であった。七尺に余る履をはくものがあれば、身の丈五丈の大男があるのは当然じゃ」

と言って、張靖をゆるしてやった。(『淵鑑類函』)

昔、王頎という太守が、高麗を討つために軍立をしたおり、沃沮国を通り過ぎた。この国の東は、大きな海に臨み、日の出るところに近いのであった。王頎は、その地の老人を呼んで、

「この海の東にも、人間が住んでいるのか、どうじゃ」

と尋ねた。すると老人はこれに答えて、

「住んでいると存じます。ただし普通の人間ではありません」

と言った。

「どうして、それがわかるのじゃ」

と、王頎が尋ねた。老人は、

「私めが、いつぞや海に出ていましたおり、一枚の衣が流れてまいりました。拾い上げて見ますと、人間の着物そっくりでございましたが、袖の長さが二丈もありました。定めし長臂の人間が着るものでございましょう」

と答えた。(『魏志』)(22)

小人伝説

『拾遺記』に、広延の国の人々は背の高さが二尺に過ぎなかった、とある。『国語』にも、僬僥国というのがあって、そこに住んでいるものは、身の丈三尺。そこで孔子は、これは「短の至也」と言っているが、広延の人間は二尺とあるから、さすがの孔子さまも間違ったことを申されたことになる。いな、まだまだ小さいのがいる。『漢武故事』の言うところによると、ある時、東郡から一人の小人を送り届けて来た。ちゃんと衣冠をつけて、しかつめらしく控えていたが、身の丈は七寸しかなかった。それでいて、その名は巨霊と称するのだから面白い。『神異経』に、鶴国というのがあって、そこに居る人間も、同じく身の丈七寸である。もっと小さいところを挙げるなら、これも『神異経』に、中国から遠く西北に離れた地に、身の丈一寸の人間が住んでいると記してある。

これらの小人の生活を語る説話もまた少なくない。試みにその二、三を記してみよう。

中国から西に当たる海のかなたに、鶴国という地がある。住む人は、男も女も長七寸。それでも自ずと礼儀を守って、経綸を好むとあるから、偉いものである。歩くことが極めてはやくて、さながら飛ぶようで、一日に千里も行くのであった。天が下のいかなるものも、あえてこれらの小人を犯すことがなかったが、ただ一つ彼らのひどくおそれているものがある。それは海にいる鵠の鳥であった。鵠の鳥は小人を見つけると、大きな口を開いて、腹の中に呑み込んでしまう。これらの小人は、いのちが長くて、三百年も生きている。鵠の鳥に呑まれても、命は失くならない。腹の中でやはり三百年が間生きつづけるのであった。(『神異経』)

斉の桓公が、あるとき狩りに出て、一羽の鵠の鳥を手に入れた。召使いの者が料理しようと思って、その腹を裂くと、餌嚢の中に一人の人間が入っていた。召使いの者は驚いて、それを取り出して見ると、身の丈三寸三分、白い色の袍をつけて、腰に剣を帯びていた。小人は目をいからせて、召使いの者の無礼を叱りのしった。彼はいよいよ驚いて、桓公の前にそれを持って出ると、桓公もひどく不思議に思って、並み居る家来たちに、

「どうじゃ、天下にこの小人に及ぶものがいるかな」

と言ったということである。(『博物志』)

康居の西に短人国というのがある。住んでいるものは、男女ともに身の丈が三尺に過ぎないの

であった。この国には、飛光明月の珠がたくさん存している。商人たちが、ときどき路に迷って、この異土に入り込んでは、珠の美しい光に驚くのであった。（『魏略』西域伝）

中国から遠く西北に離れたところに、小人が住んでいる。身の丈一寸。（一分となっているのもある）その首領は、朱の衣を纏って、冠を頭に戴いて、威儀おごそかに車に乗っている。普通の人間が、その乗車に出遇って、小人を抓み上げて食べるなら、辛くて苦い味がするのに気がつくであろう。そして一度こうした小人を食べると、死ぬまで腹の中に虫が湧かないのであった。（『神異経』）

僬僥国の人間は、身の丈一尺六寸。野原に宿っているので、絶えず風にあたる。小さい体だから、吹き飛ばされると大変である。だから風を迎えると偃せ、風に背くと伏さなくてはならなかった。（『外国図』）

畢勒国もまた小人の世界である。この国の人間は、身の丈が三寸しかないが、体に翼が生えている。言葉が巧みで、よく面白いことを言い合っては、笑い戯れている。そこでこの国を善語国と呼ぶ。いつもたくさんひとところに群らがって、陽の光にその体をさらしている。そして体が熱くなると、家に帰って丹露を飲むのであった。（『続博物志』）(23)

神樹の最期

昔、武王が天下を治めていた頃に、雍州の城の南に、一本の大きな神樹があった。土地の人々が、非常にこれを崇め尊んで、羊を牽っぱったり、酒を背負ったりしてやって来ては、うやうやしく祭るのであった。

あるとき、武王が城を出て、大勢のものが樹のそばに群らがっているのを見て、家来に、

「あれはなんじゃ。みんな何をしているのじゃ」

と尋ねた。

「土地のものが、あの樹に神があると言って、羊や酒をささげて、祭っているのでございまする」

と答えた。これを聞くと、武王は心中はなはだ面白からず、

「樹の神なんどが、わしの民草に損をかけるのは怪しからぬ。早く伐り倒してしまうがいいぞ」

と言った。

兵士たちは、すぐに樹を取り囲んで、伐り倒しにかかった。すると、にわかにひどい風が吹き出して、砂や石を飛ばし、電光が閃き、雷が轟き始めた。兵士たちはおどろきおそれて、蜘蛛の子を散らすように、八方に逃げ出した。

時に一人の男がいて、樹を去る百歩ばかりのところに倒れていた。彼は脚に怪我をしていた。

と、朱の衣を着た他の男が、馬に乗って、その側にやって来て、

「おい樹の神、朝から武王の家来たちがやって来て、そなたを伐り倒しにかかったようだったが、どこも痛んだところはないかね」

と尋ねた。と、怪我をした樹の神は、わざと平気な顔をして、

「いやなんでもないさ。わしの雷公が砂や石を飛ばして、あいつらに傷を負わせたので、みんなほうほうのていで逃げ出したよ。わしにはそれだけの威力があるもの、何も心配するにはあたらぬさ」

と、ひどく威張りちらした。これを聞くと、朱の衣を纏った男は、大いに怒って、

「そんなに威張るなら、わしは武王の家来たちにいいことを教えてやるとするよ。朱で顔を塗って、髪をふりさばいて、朱の衣を身につけて、赤い縄で幹を囲んで、それから斧で伐りつけたらどうする。それでもそなたの体がいたまないというのかね」

となじった。こう言われると、樹の神はすっかり参ってしまったと見えて、黙りこんだまま一言も返答をしなかった。朱の衣をつけた男は、馬の手綱をあおって、忽然として去ってしまった。

この怪しい問答を聞きつけたものがあって、武王に申し上げた。武王は大いに喜んで、すぐに兵士たちに神樹を伐り倒す手段を教えてやった。兵士はその通りにして、樹を切り始めた。初めのうちは、また大風が吹き出したり、雷鳴がしたりはしないかと、びくびくものであったが、斧が丁々と高い音をたてて、だんだんと樹の幹にくい込んで行っても、なんの変動も起こらなかった。兵士は大いに元気づいて、一所懸命に斧をふるいつづけた。

やがてさしもの大木も倒れそうになった。途端に樹からさっと血潮がほとばしり出たかと思うと、見る間にそれが変じて、一頭の牝牛となって、やにわに駆け出した。

「それっ、樹の精が逃げ出したぞ」

「逃がすな。生捕りにしろ」

兵士たちは、口々にこう叫んで、牛のあとを追いかけた。しかし牛の脚がひどく早くて、見る見る遠ざかって行った。そしてやがて豊水の中に飛び込むなり、見えなくなってしまった。（『捜神記』）

枸杞の精

いつの代のことだかわからないが、徐仙という男がいた。毎日、山に入って、薬を練っていた。ある日、どこからとなく一匹の黄色い犬が現われて来た。

「こんな山の中に犬がいるとは変だな」

徐仙はこう思って、いぶかしそうにそれを眺めていると、犬はくんくん鼻を鳴らしながら、薬を煮る鍋のそばに歩み寄った。と思うと、鍋のまわりを幾度となく廻り始めた。徐仙はいよいよ不思議に思ったが、別に邪魔にもならぬので、そのままにしておいた。しばらくすると、犬は鍋のまわりを廻ることを止めて、いずこともなく立ち去った。

「どうも変な犬だ。よし、明日やって来たら、行方をつきとめてやろう」

徐仙はこう思ったので、翌日は赤い糸を用意して山に入った。そしていつものように薬を煮ていると、やがてまた犬が現われた。徐仙はすかさずこれを捕えて、頸のまわりに赤い糸を結びつけた。

犬は鍋のまわりを歩き出し始めた。そして幾度も廻ったあとで、のこのこと立ち去った。徐仙は、そっとそのあとをつけて行ったが、とあるところに茂っている枸杞の叢の中で、ふっとその姿が見えなくなってしまった。

徐仙は叢の中をくまなく探したが、犬の姿はどうしても見つからなかった。しかし赤い糸はそこにひっかかっているので、試しに叢を掘り返して見た。根気よく掘りつづけていると、枸杞の根がむらがって、黄色い犬そっくりの形をしているのを見つけた。徐仙は思わず大きな声を出して、

「これだ、これだ。さてはあの犬は枸杞の精だったんだな」

と叫んだ。

徐仙は、その根を家に持って帰って蒸して見た。と、たちまちなんともいえぬいい香りが、部屋中に充ち満ちた。徐仙はそれを食べて仙人となることができた。(『夷堅続志』)

梓の中の青牛

秦の文公が長安宮という大きな宮殿を造った。宮殿は南の方が終南山に接していた。ところ

がこの山に一本の大きな梓の樹があって、真黒く枝葉を広げていた。それがために宮殿が昼さえ薄暗いので、文公は家来たちに言いつけて、

「あの梓の樹を伐り倒してもらいたい。あれが生えていると、うっとうしくて仕方がないから」

と言った。

やがて大勢の人々が梓の樹を伐り始めた。するとたちまち一天かき曇って、凄まじい風が吹き起こり、それにつれてしのつくような大雨が降り出した。人々は驚き恐れて、

「不思議なことじゃ。うっかりすると、樹の精に祟られて、ひどい目にあうかも知れぬぞ」

と言って、ひとまず仕事を止めた。

その夜のことである。どこからとなく鬼が現われて来て、梓の樹にむかって、

「とんだことになったな。おぬしの命も、もう永くはないぞ」

と言った。すると樹はせせら笑って、

「なに、心配することはない。わしの体に伐りつけたら、また大風大雨を起こしてやるまでだ」

と答えた。と、鬼が、

「そんなに威張られたものでもないよ。もし三百人のものが頭髪をふり乱して樹のまわりに糸をめぐらして、伐り始めたら、どうする」

と言った。これを聞くと、梓の樹は困ってしまったと見えて、一言も答えなかった。

ある人がこの問答を聞きつけて、その翌日、文公にその由を申し上げた。文公は非常に喜んで、

「それはいいことを聞かしてくれた。さっそく鬼の言ったようにして伐らせるとしよう」

と言った。

やがて三百人のものが、頭髪をふり乱して梓の側に集まった。そして樹のまわりに糸をめぐらして伐り始めると、果たして無事に仕事がはかどった。幹を裂くと、中から一匹の青い色をした牛が現われた。

「樹の精だ、樹の精だ」

人々はこう叫んで、総がかりで牛を追った。牛はそこから逃げ出して、豊水の中に飛び込んでしまった。こうしてさしも大きな梓の樹も難なく伐り倒された。(『元中記』)

大亀と桑の精

呉の時代に、東陽郡永康県に住んでいる一人の男が、山に入って、大きな亀を見つけた。男は、

「これは珍しい、ひっ捕えて帰ろう」

と、逃げて行く大亀を追い廻して、とうとうこれを生捕りにした。そして肩に担って帰りかけたが、まだ家に着かないうちに、日がとっぷりと暮れてしまった。仕方がないので、舟を岸につないで、そこに泊ることにした。

しばらくすると、どこからとなく、

「亀公、亀公」

と呼ぶ声がした。男は不思議に思って、あたりを見廻したが、人影らしいものも見えぬ。ただ一

本の桑の老樹が、闇の中に突っ立っているだけである。

「さては、あの桑の樹が声をかけているんだな」

と思って、男はじっと耳をすましていた。桑の樹はなお言葉をつづけて、

「亀公、お前は今に死ななくてはならないぞ」

と言った。すると今度は亀がこれに答えて、

「いや、大丈夫だよ。南山の樹という樹を薪にして、わしを煮ても、どうしてなかなかびくともするわしではないからね。だから心配してくれなくてもいいよ」

と言った。と、桑の樹はこれに応じて、

「いや、そうではない。油断はならないよ。諸葛恪(しょかつかく)という男は、なかなかものしりだから、お前のことから、ひいて禍いがわしの身に及ぶだろうよ」

と言った。

その翌日、男は大亀を呉の王に献上した。王は喜んで、家来たちに言いつけて、亀を煮させることにした。家来たちは、亀を三日三晩煮つづけたが、やはり死ななかった。王は不思議でたまらないので、ものしりで名高い諸葛恪を召し出して、

「わしは三日三晩亀を煮つづけさしたが、更に死にそうもない。ぴんぴんしている。どうしたわけだろう」

と尋ねた。諸葛恪は亀をじっと見つめていたが、やがて王にむかって、

「この亀には精が有るのでございます。ただの薪で煮たのでは、到底死ぬことはありません」

と答えた。

「では、どうすればいいと申すのじゃ」

と、王が当惑したように尋ねた。

「そうでございますね、桑の老樹を探し出して、それを薪にして煮ましたら、たちどころに亀がただれ死んでしまいましょう」

と、諸葛恪が答えた。

王はこれを聞くと、すぐに桑の老樹を伐り倒させて、それを薪にして亀を煮させた。すると果たして亀はすぐにただれ死んでしまった。(24)(『述異記』)

怪剣物語

呉の国に干将という鍛冶の名人がいた。呉王の闔閭が、天下の名剣を得たいと思って、干将を呼んで、

「願いじゃ。お前の技のかぎりをつくして、稀代の業物を鍛えてもらいたい」

と言った。

干将は仰せをかしこんで、まず五山の精、六金の英を採り集めた。それがすむと、今度は天地陰陽の気をうかがいすまして、満身の精力をこめて鍛え始めた。そのさまがあまりに真剣なので、もろもろの神が、干将の鍛冶場に現われて、一心不乱にその仕事を見つめているというくらいであった。

干将は汗みどろになって、炉の火を煽った。しかも選びに選んだ金鉄の精は、空をも焦がす猛火にも溶けて流れなかった。干将は気をいら立たせて、妻の莫邪に、

「さあ、髪を切れ、爪を切れ。そして炉の中に投げ入れるのじゃ」

と叫んだ。そして自分がまず髪と爪とを切って炉の中に投げ込むと、夫の大事とばかり、莫邪もすぐにこれにならった。そして三百人の童男童女に言いつけて、ふいごを鼓し、炭を装わせていると、二人の念力はとうとう金鉄の精をとろかすことができて、ここに陰陽一口の名剣が出来上がった。陽の剣には隠々として亀文があらわれており、陰の剣には髣髴として漫理があらわれていた。陽の剣は、夫の名をとって干将と呼ばれ、陰の剣は、妻の名をとって莫邪と呼ばれた。

干将は、

「いや、われながら素晴らしい出来じゃ。一口ともに王に献ずるのは、惜しいことである」

と言って、陽の剣を自分のところに秘め隠して、陰の剣だけを呉の王に献上した。呉の王は、陽の剣が隠されているとは気がつかないで、陰の剣を心から愛していた。(『呉越春秋』)

昔、呉の国の武器庫に、不思議なことが起こった。庫の中に蔵ってある剣や矛が、なにものかに食われてしまった。

「鉄を食うとは、えらい奴だな。だが、何者が庫の中に忍び込むのだろう。戸の錠前も、封印もちゃんと元のままだが」

と、人々は驚き怪しんでいた。王はそれを聞くと、家来たちに言いつけて、庫の中を隈なく調べさせた。と、一つの穴があいていて、その中に二匹の兎が潜んでいた。一匹は毛並が白くて、一匹は黄色であった。家来たちはそれを捕えて、腹を裂いて見た。と、胆も腎臓もことごとく鉄でできていた。家来たちはびっくりして、

「さては剣や矛を食ったのは、こいつらだな。なんという驚いたやつだろう」

と噂し合った。王はそれを聞くと、

「よし、うまいことを考えついたぞ」

と、一人の刀鍛冶を呼び出して、兎の胆と腎臓とを渡して、

「それで剣を造ってもらいたい」

と言った。刀鍛冶は、渡された品で二口の剣を鍛え上げた。一口は雄で干将と呼ばれ、一口は雌で莫邪と呼ばれた。二口とも非常に切味がよかったので、王は深くこれを愛し、その刀でとうとう天下をわがものにすることができた。

天下が治まると、王は、石の匣をこしらえさせて、その中に二口の剣を蔵めて、大地に埋めて置いた。ところが後に晋の時代になって、斗星と牛星との間に、いつも紫色の気が漂っていた。張華がそれを見て、

「これはどうも王者の気ではなくて、剣気じゃ。雷煥という男は名高いものしりだから、あの男を豊城の主にして見よう。斗牛の間といえば、豊城あたりになるから」

と言って、雷煥を豊城県の令となした。雷煥は任地に赴くと、紫色の気をたどって、県の獄屋の

下を深く掘り下げると、二口の剣を見つけた。雷煥は一口を張華に送り、一口を自分の腰につけることにした。

張華が死んだ後、その子が親譲りの剣を佩びて、延平津という川のほとりを歩いていると、たちまち剣がむくむくと動き出して、あっという間もなく水の中に躍り込んだ。彼は驚き怪しんで、人を雇って河の中を探させると、剣は化して龍となっていた。電煥が持っていた剣も、その子が腰にして、延平津を通っていると、いきなり水に飛び込んで龍に化してしまった。(『拾遺記』・『中華古今注』)

空飛ぶ木の鳶

雲の梯でよく知られている名工の魯般は、粛州の敦煌の人であった。あるとき、彼は涼州に浮図をこしらえて、そこに住むことにした。そして木で造った鳶に乗って、妻のところに通って来ては、また帰るのであった。

しばらくすると、妻が身重になった。それを見ると、両親が驚き怒って、

「夫と離れていながら、身重になったとは、怪しからぬことじゃ」

と責めた。妻は、魯般が木の鳶に乗って、ときどき訪れて来る由を話した。と、父親が、

「それは珍しいことを聞くものじゃ。わしも乗って見たいな」

と言って、ひそかに折をうかがっていた。

魯般は、木の鳶に跨ると、いつもそれに楔を撃つ。そうすると、鳶がすぐに空中に飛び上がるのであった。それを見つけた父親は、魯般が知らぬ間に、木の鳶に跨って楔を撃った。と、たちまち勢いよく大空に舞い上がったので、

「これは愉快じゃ。面白い」

と、得意になって、一気に呉会まで飛んで行った。すると呉の人たちがそれを見つけて、

「怪物が現われた。引っ捕えろ」

と、大騒ぎをして追い廻した。そしてとうとう彼を捕えて殺してしまった。

これを聞いた魯般は、また新たに木の鳶を造って、それに乗って父親の亡骸を持ち帰った。しかしそれだけでは気がすまぬので、

「父の仇だ。呉のやつらをひどい目にあわしてやるぞ」

と、木で一人の仙人をこしらえて、それを粛州の城の南にたてた。仙人は手を挙げて、東南を指していた。

しばらくすると、呉の地にひどい旱魃が起こって、それが一年ならず、二年ならず、三年もつづいた。呉の人たちは驚き怪しんで、占師に占わせると、

「魯般が、父親を殺されたのを恨んで、仕返しをしているのです」

と教えた。呉の人たちは、これを聞くと、

「自分たちが悪かった。お詫びをしよう」

と、いろんな品物を魯般に贈って、あやまった。そこで魯般が仙人の片手を切り落とすと、その

日にたちまち呉の地にあまねく大雨が降り出した。（『朝野僉載』*）

愚公の山移し

太行山と王屋山という二つの山は、四方七百里、高さ万仞もあって、もと冀州の南、河陽の北に位していた。

愚公という男があって、九十近くの歳になって、この二つの山に面して家を建てた。ところが二つの山の北の方が塞がっていて、往来をするのに、遠廻りをしなくてはならなかった。愚公は日頃それをひどく苦にしていたが、とうとう家中のものを集めて、

「わしとお前たちといっしょになって、二つの山を平らに切り下げてしまおうと思うが、どうじゃろう。そうすると、一本の路が、まっすぐに予州の南に通い、漢水の南に行きつくことになるんだから」

と言い出した。

「それはいい思いつきですね」

「ほんとに結構ですわ」

と、家族のものが、みな声をそろえて、愚公の思いつきに賛成した。ただその妻だけは、

「そんな馬鹿なことは、お止しなさいよ。あなたは、これまでだって、ちっぽけな魁父の丘さ

え切りひろめることができなかったじゃありませんか。太行山や王屋山のような大きな山がどうして切り開けるものですか。それに仕事にとりかかるにしても、土や石をどこに置くつもりですの。第一、その置場に困るではありませんか」

と、異議を申し立てた。すると他のものたちが、

「なに、土や石は、渤海の岸、隠土の北に投げ棄てればいいんですよ」

と言って、とうとう仕事にとりかかることになった。

愚公は勇み立って子や孫などを三人だけ引きつれて、石を叩き割ったり、土を掘り起こしたりし始めた。そしてそれがたまると、畚に入れて、渤海の岸に運ぶことにしていた。

愚公の家の隣りに、京城子の後妻が住んでいた。そこに七歳になる男の子が一人いたが、愚公たちの仕事を見ると、ひどく面白がって、自分もそれに加わって、土や石を運ぶことになった。ところが自分の家から渤海までは、なかなか道が遠いので、一年かかって、やっと一度往復することができただけであった。

黄河のほとりに住んでいる智叟という男が、愚公の山移しを見ると、腹の底から笑い出して、ある日、愚公にむかって、

「ばかばかしいにもほどがあるじゃないか。お前さんはいつまで生きているつもりかね。九十にもなってからそんな仕事を始めて」

と嘲った。すると、愚公は大きな息をついて、

「お前さんの心は、あさはかだから、わしのすることなんか、とてもわからないんだよ。七歳

になる、あのこせがれよりも愚か者じゃ。たといわしが死んだとしても、子が残っているだろう。そして子が子を生み、その子がまた子を生んで、子々孫々どこまでも絶えることはない。それにひきかえて、山の方は、決して大きくなって行くようなことはないんだから、いつかはきっと平らに切り開くことができるはずじゃないか」

と答えたので、さすがの智叟もすっかり参ってしまって、一言もなかった。

海山の神は、愚公の決心を聞き知ると、

「恐ろしいやつがあればあるものじゃ。あの勢いでは、いつまでたっても仕事を止めることはあるまい。どうにかしなくてはならぬ」

と言って、その由を天帝に訴え出た。天帝は愚公のまごころに感じ入って、夸娥氏の二人の子を呼び出して、

「お前たち、人間界に降って、太行山と王屋山とを他処に移してやるがいい」

と言いつけた。

夸娥氏の二人の子は、すぐに人間界に降って来た。そして一人は太行山を背負い、他の一人は王屋山を背負ったと思うと、たちまち、のそのそと歩き出して、一つを朔東に移し、一つを雍州の南に置いた。こうして冀州の南、漢水の陰には、一つの小丘すらなくなって、まっすぐに道が通ずるようになった。（『列子』）

弓の名人と油売り

陳堯咨は弓を射ることが、非常に巧みであった。自分でも日頃それを自慢にしていた。

あるとき自分の家の圃で弓を射ていると、油を売る老人が通りかかった。老人は立ちどまって、荷をおろして、永い間それを見ていた。陳が切って放す矢は、十本のうち八、九本までは見事に的を貫くのであったが、老人はあまり感心したようでもなく、かすかにうなずくだけであった。

見ているものがあると気がついた陳は、弓を射ることを止めて、老人の方を向いて、

「お前も弓が射れるのかい。どうだ、わしの腕前は素晴らしいものだろう」

と自慢をした。すると老人は平気な顔をして、

「そんなことはなんでもありませんよ。手が馴れたというだけのことですからね」

と言った。これを聞くと、陳はひどく腹を立てて、

「不届きな、お前はわしの射術をばかにしているね」

となじった。

「いいえ、けっしてそんなことはありません。ただ手が馴れさえすりゃ、なんでもうまくできるのが当たりまえだと言っただけです。わたしも永年油を売っていますので、自然とそうした理前がわかったのです。これをごらんなさい」

老人はこう言って、一つの葫蘆を取り出して、地面に据えて、孔のあいた銭でその口を覆うた。

なにをするのだろうと、陳がみはっていると、老人はひしゃくになみなみと油を酌み入れて、その油を高いところから葫蘆に垂らし始めた。油は糸を引くようにして滴々と下に落ちるのであるが、うまく銭の孔を通して葫蘆の中に流れ込み、しかも銭は汚れなかった。

ひしゃくの中の油がつきると、老人は陳の方をふり向いて、

「どうでございます」

と言った。陳は黙ってうなずくだけであった。老人はにやにや笑って、

「これも自慢にはなりません。ただ、手が馴れただけですから」

と言った。陳はとうとう笑い出して、油売りの老人をゆるしてやった。(25)(『金坡遺事』)

人頭と椰子の実

昔々のことである。

林邑王と越王とが非常に仲が悪くて、絶えずいがみ合っていた。恨みに燃える林邑王は、どうにかして越王を殺してしまいたいと思った。そこである日、一人の男を呼び出して、

「そなたも存じている通り、わしと越王はひどく仲が悪い。わしはどうしてもあの男を生かしてはおけぬ。そなた、刺客となって、あの男の首をとって来てくれないか」

と言った。男はしばらくの間、頭をたれて考え込んでいたが、やがて決然たる面貌をして、

「よろしゅうございます。やって見ましょう。越王とてけっして油断はありますまいが、命を

投げ出してかかったら、目的を遂げることができましょう」

と答えた。林邑王は面を輝かして、

「ありがたい。それでわしも安心した。どうかうまくやってもらいたい」

と言った。

刺客はすぐに忍びやかな旅路についた。日数経てめざす国に達すると、うまく越王の館に忍び込んだ。広い館の中を人目につかぬように歩き廻っているうちに、とうとう越王の居間を探しあてた。音のしないようにそっと戸を開けて見ると、越王は酒に酔いつぶれて、ぐっすり眠っていた。刺客はにやりと恐ろしい笑い方をして、静かに越王の側に歩み寄った。そして隠し持った匕首をぐさとその体に突き立てた。不意の痛手に、王は声も立てずに息が絶えた。刺客は手早くその首をかき落として、こっそり館を脱け出した。

越王の首を手にした林邑王は、非常に喜んで、

「これでわしも胸がせいせいした。越王の首は、樹に懸けて置くがいい」

と言った。

家来たちは、言いつけられた通りに越王の首を、とある樹の枝に懸けて置いた。と、日数経て、その首が見も知らぬ樹の実に化した。家来たちは驚き怖れて、口々に

「なんという果実だろう。まるで人間の頭のような格好をしているではないか」

「人間の念力ほど恐ろしいものはない。うっかりすると、この果実に祟られるぞ」

などと言い、騒いでいた。

その噂はすぐに林邑王の耳に入った。王はひどく腹を立てて、

「越王の奴、しぶとい男だ。よし、それではこうしてくれるぞ」

と言って、その不思議な果実の肉をえぐりとって、その殻で酒を飲む器をこしらえてしまった。

越王の頭からできた珍しい樹の実は、椰子の実であった。越王は殺された時に、ひどく酔っぱらっていたので、その頭からできた椰子の実の汁も酒のような香味がある。そして南人が今日でも椰子の殻で酒を飲む器をこしらえるのは、林邑王のやったことを承け継いだのであると言い伝えられている。(『南方草木状』)(26)

蚕の起原

大昔のこと、一人の男が軍に従って、遠くの地に出かけて行った。

遠征のあとに取り残された男の娘は、いつまでも父が帰って来ないので、寂しくて悲しくてたまらなかった。かの女は厩につないである一匹の馬をこの上もない友達としてわずかにやるせない思いを慰めていた。

それでもかの女は、とうとう父に会いたくてたまらなくなった。それである日、馬にむかって、

「わたしは寂しくて悲しくてたまらないよ。もしお前がお父さんを迎えに行って、首尾よく連れ帰ってくれたら、わたしはきっとお前のお嫁になってあげるよ。どうなの?」

と言った。と、馬はたちまち一声高くいなないて、ぷつりと手綱を断ち切るなり、厩を飛び出し

て、どこともなく駆け去ってしまった。

幾日かたつと、馬は遠くの国にいる乙女の父のところに、ひょっこりその姿を現わした。父は日頃、見馴れた馬が、はるばると自分を訪ねて来たのを見ると、

「これは、きっと家に何事か起こったのだろう。さっそく帰って見ることにしよう」

と言って、すぐに馬の背に跨った。

馬は乙女の父を乗せて、さも得意そうに家に帰って来た。乙女はそれを見ると、久しぶりに父に逢った嬉しさよりも、畜類の妻にならねばならぬという腹立たしさに駆られて、ひったくるように父を馬の背から下ろして、荒々しく馬を厩につないでしまった。父は驚き怪しんで、

「可哀そうに、はるばるわしを迎えに来てくれたのに、少しはいたわってやるがいいだろう」

と、娘をたしなめた。乙女はしかし浮かぬ顔をしているので、

「これ、どうしたというのかい。せっかくお父さんが帰って来たのに、そんなにふさぎ込んで……」

と尋ねると、乙女は余儀なく馬との約束をうち明けた。と、父はひどく腹を立てて、

「とんでもない約束をしたものだな。仕方がない、可哀そうだが、あの馬は殺してしまわなくてはならぬ」

と言って、すぐに馬を射殺した。そして皮を剝ぎとって、庭にさらして置くと、ある日、父の留守に、そこへ乙女がやって来て、足の先で皮を踏みにじりながら、

「お前は馬の分際で、人間の乙女をお嫁にしようなんて、とんでもない考えを起こしたから、

馬頭娘の図　右側上方にあるのが、馬の皮に包まれて昇天する娘。左側の騎馬の娘ののる木は桑の樹であろう。図は林羅山『怪談全書』による。

こんなに皮を剝がれたのだよ。少しは思い知ったかね」

と言った。途端に馬の皮がむくむくと動き出したかと思うと、さっと立ち上がって、乙女をひっ包んで、どこともなく飛び去った。

ほどなく帰って来た父は、娘がいなくなって、馬の皮が見えなくなっているのに、心から驚いた。で、あちらこちらと捜し廻っていると、とある大きな樹の枝に馬の皮らしいものがひっかかっていた。近づいてよく見ると、娘の体はことごとく化して蟲となっていた。(『中華古今注』)(27)

犬の大手柄

高辛氏に一人の美しい娘があった。高辛氏はその娘を自慢にして非常に愛でいつくしんでいた。ある時、犬戎が乱を起こした。高辛氏はすぐに軍勢を遣って、これを平らげさせようとしたが、犬戎の勢いがなかなか鋭くて、どうしても手におえなかった。高辛氏は困ってしまって、ある時ひとり言のように、

「誰でもいい、犬戎を討ち平らげてくれるものがあったら、わしの美しい娘を嫁にやる。いやそれだけではない、三百戸に封じてやるんだがな」

と言って、覚えず嘆息した。

高辛氏は、かねて槃護という一匹の狗を飼っていた。その狗が高辛氏の言葉を聞きつけて、その日から姿をかくしてしまった。

「おかしいな。どこへ行ったんだろう」

と、高辛氏が怪しんでいると、三月ほど経って、ひょっこりと帰って来た。見ると、その口に生々しい一つの首をくわえている。高辛氏は驚いて立ち上がった。そして狗の側に歩みよって、その首をよくあらためると、紛うかたなき犬戎の頭領の首であった。高辛氏は、思わず、

「やっ、これは大変なことになってしまった」

と叫んでそこに立ちすくんだ。永いあいだ、困りぬいていた犬戎の乱が平らいだのは結構であるが、いつぞやの言葉があるので、どうしても狗におのが娘を与えなくてはならぬと思うと、悲しくて口惜しくてたまらなかった。

しかし帝として多くの民を治めているものが、自分から約束を破っては、人民の治まりがつかぬと思ったので、とうとうおのが娘を狗の妻となした。が、自分の側に置くのはいかがかと考えて、会稽の東南二万一千里のところの海中に方三十里の地を求めて、そこに封ずることにした。

この奇妙な夫婦の子が生まれて、その子がまた子を産んで、だんだんと殖えていった。祖先が狗であるというので、その国は狗民国と呼ばれた。(『元中記』)

高辛氏の御代に、房王が乱を起こした。勢いがなかなか盛んで、うかうかしていると国が滅びそうになってきた。帝は非常に心を悩まして、広く天下にお触れを廻して、

「房王の首を得て、わしに渡したものには、金千斤と美しい女を与えることにする」

と言った。しかし房王の兵どもは非常に強いので、誰一人帝の募りに応ずるものがなかった。

辛の帝に秘蔵の犬があった。盤瓠という犬で、体中に五色の毛が生えていた。この犬がお触れの出た日から忽然と姿を隠してしまった。帝はこれを怪しんで、

「盤瓠はどこへ行ってしまったのだろう。重ね重ね面白くないことばかりじゃ」

と嘆息していた。

五色の犬は、やがてのそりと房王の館に現われた。房王はそれを見ると、大いに喜んで、

「これは高辛氏の犬じゃな。こうなると、高辛氏ももう駄目じゃ。犬までが主人を見棄てて、わしのところにやって来たのだからな。わしが天下を取るのは必定じゃ」

と、左右の家来たちに言って、前祝いのつもりで、盛んな酒宴を開いた。

房王は嬉しさのあまり、ぐんぐん酒をあおったので、すっかり酔いつぶれて、死人のように寝込んでしまった。と、五色の犬がこっそりその部屋に忍び込んで、あっと言う間もなく房王を咬み殺してしまった。

五色の犬は、房王の首をくわえて、辛の帝の館に帰って来た。帝は、愛犬が人間の首をくわえて、のそりと帰って来たのを見て、ひどく驚き怪しんだが、それが房王の首だとわかると、大騒ぎをして、

「盤瓠、お前は大した手柄を現わしたな。うい奴じゃ。感心な奴じゃ」

と、すぐにうまい肉を与えて、ちやほやした。しかし犬は肉なんぞ見向きもしなかった。帝は変に思って、

「盤瓠、こっちへ来い、こっちへ」

と呼んだが、いつもと違って、犬は寝そべったまま、起き上がろうともしなかった。帝はいよいよ不審に思って、

「盤瓠、お前は肉をやっても食べず、わしが呼んでも立ち上がらないね。一体どうしたのじゃ……おお、そうじゃ、お前はわしが約束に背いたのを恨んでいるのだな。よし、わしは偽りは申さぬぞ。約束通りにしてやるぞ」

と言った。これを聞くと、犬はたちまちがばと体を起こして、嬉しそうに跳び廻った。

やがて帝は五色の犬を会稽侯に封じ、五人の美しい女を与えた。

犬と女との間に、三人の男の子と六人の女の子とが生まれた。男の子は生まれたとき犬の尻尾が体についていた。その子孫がだんだんとふえて、一つの国をなした。犬の子孫だというので、その国は犬戎国と呼ばれた。周の幽王が殺されたのは、犬戎のためであると言われる。（『捜神記』(28)）

説明説話(一)

昔、舜の帝が、南方の地を巡り廻ったことがあった。あちらこちらを視察しているうちに、病に罹った。

あとに留まっていた舜の妃娥皇と女英とが、それを聞くと、非常に心配して、夫のあとを追って旅に出かけた。しかし舜の許に行きつかないうちに、舜は病に仆れてしまった。家来たちは心

から嘆き悲しんだが、今更どうすることもできぬので、その亡骸を蒼梧の野に葬った。

娥皇と女英とは、夫の死に目にあわなかったことを非常に口惜しがって、お互いに抱き合って泣きに泣いた。その涙が群竹の上にふりそそいで、たくさんの斑点をつけた。

斑のある竹はこうしてできたのであった。（『述異記』）

あるところに舒姑泉と呼ばれる泉があった。その由来について、一場の物語が残っている。

舒という男に一人の娘があった。ある日、その乙女が、父といっしょに森に薪をとりに行った。二人は森の中をあちらこちらと歩き廻って、懸命に薪を集めていた。そのうちにふと乙女の姿が見えなくなったので、舒氏は不審に思って、方々を探し廻っていると、やがて娘が地面の上に座り込んでいるのを見つけた。娘はまるで人形のように動かないでいた。

舒氏は驚き怪しんで、娘の側に駆け寄りながら、

「どうしたのじゃ。そんなところに座り込んで？」

と尋ねた。乙女は悲しむような顔をして、

「お父さん、わたしがふとここに座ると、まるで地面に吸いつけられたように、動けなくなったのです」

と言った。父はいよいよ驚いて、娘の体に手をかけて、力をこめて引き立てようとしたが、まるで乙女の体から根が生えて、地の中深く入り込んだかのように、びくとも動かなかった。舒氏は言いようもなくおそれあわてて、

「しばらく待っておくれ。わしが加勢のものを呼んで来るから」

と言うなり、飛ぶように自分の家に駆け戻った。そして言葉せわしく事の由を話して、みんなといっしょに再び娘のところにやって来た。しかし驚いたことには、乙女の姿はいつの間にか見えなくなって、かの女が座っていたあとに、こんこんと泉が湧き出ていた。（『述異記』）(29)

昔、戦国の時代に、魏の国の人々が、秦のためにひどく苦しめられた。魏の民は、おのが国をまもるために、絶えず戦さに出なくてはならなかった。

あるとき、魏の国の一人の男が、戦さに出た。あとに残った妻は、夫無き家を守って、寂しく悲しい月日を送っていた。しかし夫はいつまで経っても還って来なかったので、妻は、悩ましい思いに体をそこねて、とうとう死んでしまった。人々はこれを憐れんで、丁寧に葬った。

しばらくすると、かの女の塚の上に、一本の樹が生え出た。樹はだんだんと大きくなったが、その枝も、枝についている葉も、ことごとく夫の出て行った方角を向いていた。人々はこれを見ると、心から悲しんで

「あの女は死んでも、その霊魂（たましい）が樹にこもって、やはり夫を恋いしたっているな。ほんとに可哀そうなことだ」

と言って、いつとなくその樹を想思木と呼ぶようになった。（『述異記』）

精衛という鳥がいる。喙が白くて脚が赤くて、その啼声が自分の名を呼んでいるように聞こ

える。これには悲しい由来譚がある。

炎帝の娘に女娃という少女があった。あるとき東海に遊びに行ったが、誤って水に溺れて死んでしまった。そして精衛という鳥になったが、

「自分が命を失くしたのは、海のせいだ」

と言って、西山から木や石を喙でくわえて来ては、東海に投げ込んだ。永い間に東海をうずめてしまおうというのである。（『山海経』・『述異記』）

世間で蟬のことを齊女と呼びなしている。そのわけはこうである。齊の王さまの后が、何か腹の立つことがあって、王を恨んで、とうとう恨み死にをしてしまった。と、その屍が変じて蟬となったが、人間であった頃の恨みを忘れかねて、樹にとまっては、涙を流して大きな声で泣きつづける。だから蟬のことを齊女と呼ぶのである。（『中華古今注』）

説明説話(二)

正月一日には、鶏の声が聞こえると、家のものがみな起きて、庭で爆竹を鳴らす。中国から西に遠く離れたところの山の中に、山臊という怪物が住んでいる。身の丈一尺余の小男で、おまけに一本足であるが、なかなか図太い奴で、人間が癘に障ることをすると、熱病にかからせたり、寒さに顫わせたりする。そこで爆竹を鳴らして、これをおどしつけるのである。（『荊楚歳時記』・『神異経』）

呉県に住んでいた張成というものが、ある夜、ふと目を覚ますと、一人の女が家の南の角に立っているのに気がついた。驚き怪しんでいると、女が手を挙げて張成を招いた。張成は何事だろうと思って、その側に歩み寄った。すると女が、

「ここは、そなたの家の蚕室で、わしはこの地の神じゃ。明年正月半ばに、白粥を作って、その上に膏をうかべて、わしを祭ってもらいたい。そうすれば、そなたのところの蚕の出来ばえを、いつもより百倍もよくしてやろう」

と言った。と思うと、ふっと消え失せてしまった。張成は不思議に思ったが、言われるままに、翌年の正月半ばに膏粥をこしらえて、その地の神を祭った。すると果たして蚕がいつになく非常によく育った。

今世の人が、正月半ばに白い膏粥をこしらえるのは、こうしたことから始まったものである。（『続齊諧記』）

楚の屈原が世の中の汚れ果てたのを恨み嘆いて、長沙の汨羅の水に身を投げたのは、五月五日であった。楚の人たちは、この潔い高士の志をあわれんで、毎年五月五日になると、竹の筒に米を入れて、それを水の中に投げ込んで、屈原の霊を祭るのであった。

ところが、漢の建武年間に、長沙の区曲が、妙な様子をした一人の男に出遇った。男は、区曲

にむかって、
「わしは三閭大夫の屈原じゃ」
と名乗った。区曲は驚き怪しんで、
「あなたは、汨羅の水にお沈みになったはずでしたが、どうしてここにおいでになったのです」
と尋ねた。と、男はこれに答えて、
「いや、実は少しお頼みしたいことがあって参ったのじゃ。そなたたちが米をささげて、わしを祭ってくれるのは、はなはだありがたいが、水の中に蛟龍が棲んでいて、米を盗んでしまうのじゃ。どうか棟の葉で竹の筒の上を塞いで、綵糸をそれに纏ってもらいたい。この二つの品は、蛟龍が忌み憚るものであるから」
と言って消え失せた。区曲が教えられたようにすると、また屈原が現われて、
「ありがとう。これでささげ物が無事にわしの手に入るようになった」
と知らせた。今世の人が、五月五日に粽をこしらえたり、棟の葉や五花糸を帯びたりするのは、この風俗が遺っているのである。(『続齊諧記』)

宏農の鄧紹が、八月のある日、華山という山に入って、薬草を探し採っていた。と、一人の童子に出遇った。五色をした美しい嚢を手にして、柏の葉に宿っている露を承けていた。鄧紹は、
「木の葉の露なんか嚢にあつめて、いったい何にするんだろう」
と考えながら、じっと眺めていた。露は一滴一滴とこぼれ落ちて、やがて嚢いっぱいになった。

鄧紹は帰りかけた童子を呼びとめて、
「その露は何にするのかね」
と尋ねた。童子はふり返って、
「赤松先生(仙術に達した人)が、この露で目を洗って、はっきりとさせるのだよ」
と言ったかと思うと、忽然として見えなくなった。今世の人が、八月に眼明袋をこしらえるのは、これがためである。(『続齊諧記』)

汝南の桓景が、費長房の許に行って、仙術を習っていた時のことである。
ある日、長房が桓景にむかって、
「九月九日に、そなたの家に災いが起こることになっている」
と言った。桓景はおどろきおそれて、
「それは困りましたね。どうにかして、その災いを取り除けることはできないでしょうか」
と尋ねた。
「できないこともない。家中の人々に言い聞かせて、赤い嚢をつくらせるがいい。嚢ができたら、その中に薬を入れて、めいめいがそれを臂にかけて、高いところに登って菊花酒を飲むのじゃ。そうしたらうまく災いを除くことができる」
と、長房が教えてくれた。桓景は非常に喜んで、九月九日になると、教わった通りにして、みんなで山に登った。

夕方になって、家に帰って見ると、飼ってあった鶏や犬や牛や羊などがことごとく死んでしまっていた。人間の身代わりになったのである。今世の人が、九日に高いところに登って酒を飲み、女が茱を盛った嚢を身につけるのは、これから始まったものである。（『続斉諧記』）

周の昭王が二人の姫と江に舟遊びに出かけて、親子ともに水に溺れて死んでしまった。よくよく浮かばれないと見えて、そのあとでも三人が舟に乗って、水際で戯れている姿が、河のほとりに住む人たちの目に幻のように見えるのであった。

人々は哀れに思って、三人のために祠を建て、いろんな食物を水に沈めてやることにしたが、江に棲んでいる蛟龍が、それを横取りしてはいけないというので、食物を鉄でこしらえた器に容れてやることにした。

今日でもその風が遺っているそうである。（『拾遺記』）(30)

夜叉物語

汝州の傍県に住んでいた一人の女が、寝ている間に、何者かに連れ出された。夜が明けて見ると、古い塔の中に入っていた。そして側に凜々しい姿をした一人の男が立っていた。男は乙女にむかって、

「わしは天界のものだが、少し理由があって、人間界に降っている。その間、そなたに妻になって貰うのだが、永いことではないから、恐がらなくてもいいよ。だが、塔の中から外をのぞくことだけは、固く禁じておく。どうか忘れないように」

男は一日に二度、塔に帰って来て、食物をとるのであった。女は幾年か塔の中に住んでいたが、そのうちに故郷に帰りたくてたまらなくなった。

「いったいあの人は、なぜ外をのぞいてはいけないと言ったのだろう。かまうものか、のぞいて見よう、そしたら故郷に帰れるようになるかも知れない」

乙女はこう思って、ある日、男が塔から飛び出したあとで、そっと外をのぞいて見た。と、藍色の膚をして、火の髪をふり乱して、驢馬のような耳を持ったものが、矢のように空にのぼっていた。そしてそれが地面に降り立つと、凜々しい人の姿に還るのであった。乙女はあまりの恐ろしさに、体中に汗をかいたまま、茫然としていた。

しばらくすると、男が帰って来て、

「そなたは戒めを破ったな。わしは実は夜叉なのだ。が、縁があって夫婦となったからは、けっしてそなたには害を加えぬから、安心するがいい。もう正体を見られた上は、隠しても仕方がない。遠慮なく塔の外をのぞいてもかまわないよ」

と言った。

それから一年ばかりたつと、男は悲しみ泣きながら、

「そなたとの縁がつきて、別れなくてはならぬ。雨風を起こしてそなたを家に送り届けてやろう」

と言って、鶏の卵ぐらいの青い色をした石を女に渡した。そして、

「家に帰ったら、これを砕いて呑むがいい」

と教えた。

ある夕方、雷雨が起こった。と、乙女はいつの間にか塔の中から運び出されて、しばし空を行ったかと思うと、やがて自分の家の庭に墜ちた。乙女は教わった通りに、青い石を砕いて呑んだ。すると青泥のようなものを一斗あまりくだして、怪物の毒気から浄められた。(『酉陽雑俎』)

龍蛇伝説

昔、端渓に温氏という媼があった。毎日のように渓川に出かけて行って、魚を捕えては、生計(くらし)のたつきにしていた。

ある日、いつものように渓川に出かけると、水のはたに大きな卵がころがっていた。媼は、

「珍しく大きな卵だね」

と言って、それを持って帰って、器の中に入れて置いた。十日ばかりたつと、守宮のような形をした一尺余りのものが、卵の殻を破って現われた。そのままにしておくと、やがて二尺ばかりとなった。そして毎日、渓川に出かけて行っては、十余尾の魚を捕って帰るようになった。

だんだん大きくなって、五尺ばかりになると、いつも媼のうしろについて、魚捕に行くようになった。と、ある日、媼が魚を捕える拍子に、誤ってその尾を断ち切ったので、驚いて逃げ去った。

が、数年たってまた媼のもとに還って来た。見ると、体中が眩しいほど光り輝くようになっていた。そして始めのように媼のそばで楽しそうに遊び戯れるのであった。

秦の始皇がその噂を聞いて、

「それは龍の子じゃ。そんなものが生まれたというのは、一にわしの徳のいたすところじゃ」

と言って、使いの者をやって、媼をおのが館に迎えることにした。しかし媼は、生まれ故郷が恋しくて、毎日ふさぎ込んでばかりいた。龍の子がこれを悟って媼を舟にのせて、端渓につれ帰った。始皇は四たび媼を召しよせたが、その度に龍の子がつれ帰るので、とうとう媼を迎えることを思いとまらねばならなかった。

媼が死ぬと、龍の子は沙の上に転がり廻って、沙をいっしょにあつめて、墳となした。(『南越志』)

晋の永嘉年中に、平陽府平山の麓に住んでいた韓という媼が、野原を歩いていると、大きな卵を見つけた。拾って帰ると、やがて卵の中から一人の赤ん坊が生まれ出た。媼はこれに橛児という名をつけて、大切にその子を育てていた。

子供が四歳になったとき、劉淵が城を築くことになったが、よく築くものがなかった。そこでお触れを廻して、城を造り上げるものを募った。と、子供が媼にむかって、

「わたしが城を築いてあげよう」

と言い出した。媼は驚き怪しんで、

「大人でさえ手におえないのに、お前にできるものかい」
と言うと、子供は、
「できるよ。わたしが蛇になって這い廻るから、その跡に灰をまいておくれ。そして灰でできた図面の通りにこしらえると、立派なお城ができるよ」
と言った。
媼は不思議に思いながら、その言葉に従うことにした。子供は蛇に体を変えて、のろのろと動き出した。媼は灰を抱えて、そのあとから撒きちらしていった。するとやがて大地の上に図取りが出来上がったので、その通りに造り上げると、立派な城となった。
劉淵はこれを聞くと、
「それは不思議千万じゃ。早くその蛇をわしの前に連れて来るがいい」
と言った。しかし蛇は早くもこれを悟ったと見えて、のこのこと逃げ出した。人々がそれを追いかけて行くと、平山にある一つの穴の中に這い込んだ。人々はその尾が二、三寸穴の外に出ているのを見つけて、これを斬り落とした。と思うと、穴から水が噴き出して、大きな池になった。人々は、
「あれはきっと龍にちがいない」
と言って、その池を金龍池と呼ぶことにした。（『山川紀異』*）

黄墩湖（篁墩湖）の近くに、程霊銑というものが住んでいた。生まれつき武張ったことが好きで、弓を射る技に長けていた。

ある夜の夢に、一人の道士が現われて、
「わたしは、呂湖に住んでいる蜃のために、ひどく苦しめられています。どうかわたしを助けて下さい。助けて下すったら、厚くお礼を申します。白練を束ねているものを見たら、わたしと思って下さい」
と言って消え失せた。

道士に姿を変えて現われたのは、黄墩湖に住んでいる蜃で、早くから呂湖の蜃と闘っていたが、いつも相手のためにひどくやっつけられているので、とうとうたまりかねて、霊銑の助けを借りに来たのであった。

しかし霊銑は、そんなことは知らないので、
「どうも不思議な夢を見たな。あの道士はいったい何者だろう」
と怪しんだ。

「だが、ああして頼まれて見ると、知らぬ顔をしているわけにも行かぬ。とにかく湖のはたに出て見ることにしよう」
彼はこう思って、村の少年たちを連れて、湖のほとりに行った。少年たちは面白がって、鼓を鳴らして、わいわい騒ぎ立てていた。

しばらくすると、湖の面が揺らぎ出したかと思うと、丘のような大浪が湧き上がって、それが相撃って、さながら雷のような凄まじい音を立て始めた。と、たちまち湖から二匹の牛が現われ

て、追いつ追われつして、激しく闘い出した。

霊銑は、弓矢を手にしたまま、驚きあきれつつ、その闘いを眺めていた。しばらくすると、一方の牛が、へとへとに疲れて、今にも相手のために突き殺されそうになった。そのとき、彼は負色になった牛の脇腹が、白練のように真白であるのに気がついた。

「やっ、さては昨晩の夢に現われた道士は、あれだったな。よし、おれも男じゃ。頼まれたからには、見棄てては置かぬぞ」

彼はこう思って、手にしていた弓に矢を番えるなり、きりりと引き絞って、相手の牛を目がけて切って放した。狙い誤たず、矢はその牛の体にぐさと突きささった。二匹の牛はたちまち湖の中に姿を隠した。そしてそのあたりの水が真赤に変わった。

痛手を負うた蜃は、襲いに出かけた黄墩湖を引き上げて、自分の住家である呂湖に帰りかけたが、傷に弱って、とうとう途中で死んでしまった。黄墩湖の蜃は、危うい命を助けられたのを心から喜んで、霊銑に厚くお礼をした。(『太平広記』・『図経』)[31]

呉の末に、一人の猟夫が、山の中の小屋に泊り込んで、狩りをつづけていた。するとある夜、背の高さ一丈ばかりの大男が、黄色い衣を纏い、白い帯をしめて、その小屋に訪ねて来た。そして、

「わしに敵がある。明日やって来て、わしと闘うことになっている。どうかわしに加勢をしてもらいたい。厚くお礼をするから」

と言った。猟夫は驚き怪しみながら、

「ええ、加勢をして上げましょう。お礼なんかいりませんよ」

と答えた。大男は嬉しそうな顔をして、

「それはどうもありがとう。では明日、飯時に渓のそばに出て来ておくれ。敵は北の方から来るし、わしは南から現われる。そして黄色い帯をしているのが敵で、白い帯をしているのがわしじゃ。どうかそのつもりで」

と言って、立ち去った。

翌日、猟夫が渓のほとりに出て行くと、やがて北の方から雨風の荒ぶような音がして、草木を靡かせながら、大きな黄色の蛇が現われた。と、南の方からもまた一匹の白い大蛇が這い出して来た。二匹の大蛇は渓の中で出遇って、互いに組んずほぐれつして、懸命に闘い始めた。

しばらくすると、白蛇の勢いが弱りかけて来た。猟夫はここぞと思って、矢を放って黄色の蛇を射た。蛇は痛手にのたうち廻っていたが、やがて息が絶えてしまった。

その日の暮れ方に、大男がまた小屋に訪ねて来た。そして猟夫にむかって、

「どうもありがとう。おかげで危うい命を助かりましたわい。ついては、お前さんは、今年いっぱいここにいて、思うさま狩りをするがいい。わしが獲物をたくさん与えるから。だが明年になったら、ここを引き上げて、二度とやって来ないようにしていただきたい。もしやって来ると、ひどい禍いがふりかかるよ」

と言って、立ち去った。

猟夫は言われた通りに、一年の間、山に留まって狩りをつづけたが、いつもおびただしい獲物があったので、やがて素晴らしい金持ちとなった。一年すると、山を引き上げて、安楽な月日を送っていたが、数年たつと、

「どうもあの山での狩りの味が忘れられぬ。も一度出かけることにしよう」

と言って、また山の中に入って行った。と、白い帯をした大男が、どこからとなく現われて来て、

「二度と来てはいけないと、あんなに言っておいたのに、なぜわしの戒めを破ったのじゃ。先年お前さんに殺された者の子が、きっと仇をするだろう。わしはもう知らないよ」

と言った。これを聞いた猟夫は非常に恐くなって、急いで逃げ出そうとすると、たちまち行手に真黒い衣を着た男が三人現われて、彼の前に立ち塞がった。三人とも見上げるような大男であった。猟夫は魂身にそわず、がたがた顫えていると、大男どもは、大きな口をかっと開いて、彼を睨みつけた。途端に彼は息が絶えてしまった。（『捜神後記』*）

昔、柳毅というものが、涇陽のほとりで一人の女が羊の世話をしているのを見た。女は柳毅が通りかかったのに気がつくと、

「あなたにお願いがございます。わたしは洞庭湖の主の娘で、涇川に嫁入りをしましたが、召使いの女のためにだまされて、舅や姑の機嫌をそこねまして、ここに流されてしまいました。どうか、この手紙を父のところに届けて下さいませ。洞庭湖のほとりにいらっしゃると、大きな橘の樹が生えています。その樹を三度お叩きになりますと、誰か出て参ります。どうかその者に手紙をお渡し下さい」

と言って、一通の手紙を柳毅に渡した。

柳毅が洞庭湖のほとりに行って見ると、果たして大きな橘の樹が生えていたので、その幹を三度叩くと、たちまち目の前に美々しい宮殿が現われた。それは霊虚殿というのであった。柳毅は、宮殿の美しさに見とれていると、一人の男が出て来て、彼から手紙を受け取った。

洞庭湖の主は、娘の手紙を読んで、はらはらと涙を流しながら、

「わしの心がゆきとどかないで、かよわい娘に罪を犯させてしまった」

と言った。

しかし柳毅のおかげで、可愛い娘の消息を知ることができたというので、盛んな酒宴を催して、手厚く彼をもてなした。

その後、柳毅は盧という美しい乙女と結婚した。しばらくたってから、妻が彼にむかって、

「何をお隠し致しましょう。わたしはいつぞや涇陽でお目にかかった洞庭湖の主の娘でございます。あなたのお力添えで父に手紙が届きましたので、苦しいところを救われることができました。そのお礼に閨のお伽をいたしに参りました。末永く可愛がって下さい」

と言った。（『淵鑑類函』柳毅伝）

沈鐘伝説

ある寺に大きな鐘があって、蛟のような形をしていた。ある夕方、その鐘がむくむくと動き出したかと思うと、たちまち寺の前にある潭の中に飛び込んでしまった。お坊さんは非常に驚いて、人を雇って、水の中から鐘を引き上げさせた。と、ほんとうの蛟に変じて、目をむいて睨みつけたので、みんなあわてふためいて逃げ散った。そのすきに鐘はまた潭の中に沈んだ。今でも水の底から声を発するが、そのときには山や谷が震動するそうである。（『淵鑑類函』）

祁陽県の白鶴観という楼に、一つの鐘があって、重さ数百斤と言われていた。ある夕方、雷が轟いて大雨が降り出したかと思うと、その鐘がにわかに吼え出して、躍って江（かわ）の中に飛び込んだ。

それからしばらくたって、一人の客が夜、昭潭のほとりに泊った。すると夢に道士が現われ出て、

「わたしは、祁陽県白鶴観の道士です。ここにいるのが嫌になって、もとの住家に帰りたいと思っていたところです。どうかあなたの舟に載せて行っていただきたい」

と言った。客は、

「よろしい、承知しました」

と答えたかと思うと、夢が覚めた。変な夢を見たと考えながら、翌朝、舟に乗り込んで、纜を解いた。と、水の中に一つの鐘が沈んでいるのに気がついた。眼をこらしてよく見ると、澄み切った水を通して、「祁陽県白鶴観鐘」という文字が読まれた。客は、はたと手をうって、

「さては昨夜の道士は、この鐘であったのか」

と言って、鐘を引き上げて舟に載せて、白鶴観に持って行った。（『道州志』）

練門江の水の底に、一つの大きな鐘が沈んでいた。毎月十五日に潮がぐっと退くと、龍頭が水の上に現われるのであった。

大暦年中に、閩城の法蜩という男が、この鐘を水から引き上げようと思った。しかしうっかりしたことをして、祟られては困ると思ったので、まず開元寺というお寺に、たくさんのお坊さんを集めて、お経を読んでもらった。それから一人の小僧さんを呼んで、

「お前、御苦労だが、龍宮に訪ねて行って、海の神に鐘を渡して下さいと頼んでおくれ」

と言いつけた。

小僧さんは出かけた。そして海の神に会って、

「練門江の中の鐘を引き上げたいと思います。どうかお許し下さい」

と願うと、海の神は、

「そんなことをしてどうするのじゃ」

と尋ねた。

「あの鐘をお借りして、海が荒れるときに、鎮かにしようと思うのでございます」

と、小僧が答えた。海の神はうなずいて、

「よろしい、承知した。だがこのまま帰っては、嘘をつくと思われるかも知れぬ。わしに会っ

た証拠に、これをやることにしよう」
と言って、小さい珠を三つ与えた。と思うと、夢から覚めたような心地で、正気に返った。ふと気がつくと、自分の手に三つの珠を握っていた。（『天中記』）

吉州の龍漁観という楼に、一つの大きな鐘があった。天祐年中に、ある夜、忽然としてその鐘が見えなくなった。人々は驚き騒いで、方々を探し廻ったが、どうしても見つからなかった。
「どうしたのだろう」
「どこへ行ってしまったのかしら」
と怪しんでいると、朝になって、いつの間にか元のところに帰っていた。
見ると、鐘の上部の蒲牢（海獣の名にちなむ名称）に血の痕がついて、蒜草がからみついていた。人々はいよいよ驚いて、
「蒜草は江南の水に生えるものじゃ。すると、この鐘は江南に行っていたのかしら」
と話し合った。
鐘は毎晩のように見えなくなった。しかし朝になると、ちゃんと元のところに還っていた。人々にはどうしてもそのわけが解らなかった。龍漁観の前には、大きな川が流れていた。川のほとりにいる人たちは、幾夜か浪風の騒ぐ音を耳にした。ある朝、一人の漁夫が、川のほとりに立っていると、一つの赤い旗が水上から流れて来た。漁夫は急いで小舟に棹さしてその側に行って見た。と、旗と見たのは、金鱗をきらきらと光らせた怪物で、そのあたりの波がひどく湧き返っていた。漁夫はおどろきおそれて、大急ぎで舟を還した。
このことがあって、始めて人々は、鐘についている蒲牢が江南の龍と闘っているのだということがわかった。（『淵鑑類函』）

呉の地に当湖という湖があった。周囲四十里に余ると言われるが、もとからの湖ではなくて、漢の時代に、そのあたりの地面が、にわかに陥没して、その跡に水が溜まったのである。
だから湖の底には、今でも街や家などが沈んでいて、水が涸れて少なくなった時には、水の下に隠々として見えると言われる。（『呉地記』）

江寧県の西南に一つの湖がある。湖の底に小さい城が三つも沈んでいるというので、三城湖と呼ばれる。（『淵鑑類函』）

廬江の箏笛浦に、大きな船が沈んでいる。昔、曹公というものが、数人の歌妓を載せて、廬江に浮かび、酒を飲んだり箏を弾でたり笛を吹いたりしているうちに、どうしたはずみか、船が傾いて水底に沈んでしまった。そして今も箏や笛の音がするというので、箏笛浦と呼ばれるようになった。ある夜、一人の漁夫が、この浦に船を繋いで、その中に泊っていると、得もいえぬ香りが、あたりをこめて、箏や笛の音が聞こえたという。（『捜神後記』）

仙桃説話

桃は、古くから中国では仙果と信じられ、道教などの信仰と固く結びついている。『典術』には、

「桃は五木の精なり。故に邪気を圧伏し、百鬼を制す。故に今の人桃符を作り、門の上に著けて邪気を圧う。これ仙木也」

とあり、『荊楚歳時記』にも、

「桃は五行の精なり。邪気を圧伏し百怪を制す」

とあり、『神農経』には、

「玉服これを服すれば、長生にして死せず、早くこれを服するを得ずして、死に臨むの日に、これを服すれば、其の尸天地を畢えて朽ちず」

とある。その他いろいろな書物が、互いに競い合うようにして、桃の除魔力を吹き立てていることは、人のよく知るところである。

仙果としての桃を考えると、すぐに西王母という女仙が想い出される。西王母は東王公と一対の人物である。東華というところが、男の仙人の住む国で、その首領が東王公である。これに対して西華というところが、女の仙人の住む国で、その首領が西王母である。（『辞源』）

西王母は、いろんな仙薬の持ち主で、羿という人間は死ぬのを嫌がって、かの女から不死の薬を貰い受けたことがある。（『捜神記』）またかの女は一羽の霊妙な鳥を使っている。そしてその鳥は三本足であった。（『傅玄賦』）

しかしここで言いたいのは、桃とかの女との関係である。洛陽の華林国に王母桃というのがあった。十月に始めて熟し、これを食うと、疲れがたちどころにいえる。民間ではこれを西王母の桃と言っていた。（『酉陽雑俎』）

以下に仙桃もしくはただの桃に関する説話を若干挙げることにする。

中国から東南にあたるところに、桃都山という山がある。山に桃の樹が生えていて、その上に一羽の鶏がとまっている。日が初めて出て、この桃の樹を照らすと、鶏が高い声で鳴き始める。すると天が下の鶏という鶏が、みなこれに感じて、いっせいに鳴き立てるのであった。桃の樹の下には、二人の鬼が、葦でこしらえた索を手にして、むかいあって立っている。一人は神荼と呼ばれ、一人は鬱塁と呼ばれる。桃都山の桃の実を食べると、いつまでも生きつづけることができるというので、性質の悪い鬼どもが、これを盗みに来る。神荼と鬱塁とは、それを見つけると、すぐに縛り上げて、食ってしまうのであった。（『太平御覧』に引く『山海経』・『論衡』・『金楼子』など）

昔、二人の兄弟があった。一人は荼と呼ばれ、一人は鬱塁と呼ばれた。二人とも生まれつき鬼を捉えることがうまかった。

東海に度朔山（度索山）という山があって、そこに大きな桃の樹が生えている。素晴らしく大きな樹で、曲がりくねって、三千里に広がっている。これを蟠桃と呼ぶ。二人の兄弟は、この桃の下に控えていて、もろもろの鬼の行ないをしらべる。もし性質の悪い鬼があって、むやみに人間に禍いを与えると、二人の兄弟は、葦でこしらえた索で縛り上げて、虎に食わせるのであった。

（『風俗通義』・『十州記』）

燕の時代に恵霄というお坊さんが、広固から長白山にやってくると、どこからとなく鐘の音が聞こえて来た。その音をたよりに山路を辿って行くと、立派な寺院が聳えていた。

恵霄は腹が空いていたので、寺の中に入って、食物を求めた。と、一人の沙弥が現われて、

「山の中のことで、何もありません。これをお食べなさい」

と言って、桃の樹から一つの実をちぎってくれた。恵霄がそれを食べてしまうと、また一つ与えて、

「もうお帰りになったがいいでしょう。ここにいらして以来、大分時がたちましたから」

と言った。

「おかしなことを言う男だな。まだやっと桃の実を二つ食べたばかりではないか」

恵霄は心の中ではこう思ったが、言われるままに帰りかけた。しばらく歩いてから、後をふり向くと、今まで林の中に聳えていた寺院が、掻き消すように見えなくなっていた。不思議に思いながら、広固に帰って来ると、弟子たちが、彼の姿をじろじろ見廻しながら、

「和尚さま、こんなに永い間どこに行っていらしたのです」

と尋ねた。恵霄は変な顔をして、

「永い間って、ほんのわずかではないか」

と答えると、弟子たちは、

「いいえ、そうではありません。和尚さまは二年があいだ寺をお明けになったのです」

と言った。これを聞くと、恵霄は、始めて、

「さては、あの桃は仙果で、二つの桃の兆が二年だな」

と悟った。（『酉陽雑俎』）

史論という人が、齊州に住んでいた頃のことである。ある日、猟に出て、とある僧院に体を休めていると、どこからとなく桃の実の香りがして来た。その香りがいかにも世の常のものとは違っているので、

「たいした香りですな。定めし珍しい桃の実でしょうね」

と、お坊さんに言った。こう言われると、いまさら隠すわけにいかないので、お坊さんは、

「近頃、人から桃を二つ貰ったのです」

と言って、経机の下から取り出して、史論に与えた。二つとも飯椀のように大きかった。腹が空きっていたので、見る間に二つとも食べてしまったが、核の大きさが鶏の卵ほどあった。史論はお坊さんにむかって、

「こんな珍しい桃は、普通の人間のところには無いはずですが……」
と言うと、お坊さんは笑って、
「そうです。人から貰ったと申したのは、偽りです。この桃は、ここから十里余り離れたところの、険しい山路になっているのです。それがしがたまたま行脚して、そこを通りかかって、二つ三つちぎって来たのです」
と言った。これを聞くと、史論は勇み立って、
「では、あなたに案内をお願いして、そこに行ってみたいものですな」
と言い出した。
仕方がないので、お坊さんは史論といっしょに僧院を出た。五里ばかり北の方へ行くと、川が流れていた。それを渡って西北に行くと、また二つの小川があった。それを越えて山に登り、澗を渡って数里、水の流れ、岩のたたずまいが、とても人間界とは思われぬようなところに来た。そこに数百株の桃の樹が生えていたが、高さはいずれも二、三尺で、幹が地を掃くように這い廻っている。そしてなんとも言えぬいい香りが鼻を裂くばかりであった。
史論は大喜びで、すぐに衣を脱いで、その中にたくさんの桃の実を包み込もうとすると、お坊さんがそれを押し止めて、
「そんなに欲ばったことをしてはいけません、ここは霊境だと思われます。あまり桃の実をむさぼると、罰を受けますぞ。それがしが、いつぞや長老から承った話によりますと、昔、一人の男がここへ来合わせて、桃の実を五つ六つ懐にねじ込んで、さて帰ろうとすると、路に迷ってどうしても人里に出ることができなかったそうです。欲ばってはいけませんぞ」
と戒めた。史論はなるほどと思って、ただ二つだけ持ち帰ることにした。お坊さんは帰り途に、
「この桃の里のことは、あなただけの胸に蔵めておかねばなりません。けっして他の者にもらしてはいけませんぞ」
と言った。
史論は齊州の自分の家に帰り着いてから、使いを遣って、お坊さんを招いたが、お坊さんはもう死んでいた。仙桃の所在をもらした罰があたったのかも知れない。（『酉陽雑俎』）

怪誕説話

彭城郡は、昔の徐国である。この国を治めた偃王の生い立ちについて、奇異な伝説が存している。
昔、徐君に愛された一人の宮女が、身重になって、やがて子供を産み落としたが、それは一つの大きな卵であった。宮女は驚き畏れて、
「まあ、とんでもないものを産み落としたものだ」
と言って、水のほとりに棄ててしまった。
水のほとりに、一人の女が住んでいた。独身もので、鵠蒼という犬を飼って、わが子のように愛していた。その犬が狩りに出て、あちらこちらを駆け廻っているうちに、棄ててあった卵を見

つけた。犬は卵をくわえて、女のところに持って帰った。女は、
「まあ、どこから拾って来たのかい。大きな卵だね」
と、驚き怪しみながら、根気よくそれを暖めていると、やがて卵の殻が割れて、中から一人の男の子が生まれ出た。生まれるときに体を偃べて伏していたというので、偃という名をつけて、大切に育て上げた。徐君はその噂を聞きつけて、自分の許に引き取った。
偃は大きくなるにつれて、知恵が鋭く情深くなった。そしてとうとう徐国の主となって偃王と号した。(『博物志』(33))

帝高辛氏の妃の簡狄が、ある日、帝といっしょに郊外に出た。
その日はちょうど春分で、燕が始めてやって来る日であった。帝に従って春を迎える祭りをすました簡狄は、うららと照る陽の光に、ゆったりした気分になって、自分の妹と元丘(もしくは玄丘)のほとりを流れている川の水につかっていた。と、一羽の燕が空に現われた。
「あれ、もう燕が飛んで来ました。さすがに春分ですね」
と言っていると、燕は口にくわえていた一つの卵を、二人のいるところに墜とした。五色の色をしたきれいな卵であったので、二人は驚きかつ喜んで、
「まあきれいね。これはわたしのものよ」
と言って、一人がそれを拾おうとすると、他の一人は、それを押しのけるようにして、
「いいえ、わたしのよ」

と争っていたが、とうとう簡狄がそれを拾い上げて、奪われまいとでも思ったのか、いきなり口の中に押し込んだ。と、誤ってぐいと呑んでしまった。
するとやがてかの女は、身重になった。そして月がかさなって、胸が剖けて、一人の男の子が生まれた。それが契であって、あとで堯の司徒となった。(『竹書紀年』・『史記』・『拾遺記』)

帝の高辛氏の妃に、姜源という女性があった。ある日、帝といっしょに郊外に出て、神を祭っていると、途方もない大きな足の跡が大地についていた。かの女は、
「まあ、なんと大きな足跡でしょう。きっと巨人がつけたのでしょう」
と言いながら、何げなくそれをふんで見た。
するとやがて身重になって、月が満つると、一人の男の子を産み落とした。
「どうも、あんなことで孕んだのだから、不吉だ」
と考えて、その児を路に棄ててしまった。すると、通りかかった羊や牛が、どうしたのか、みんな子供を踏まないで、避けて行くのであった。
「いよいよ変だ」
というので、今度は山の中に棄てた。と、一人のきこりがそれを見つけて、わざわざ冷たい氷の上に置いた。子供は体が冷えるので、しきりに泣き立てた。と、どこからとなく一羽の大きな鳥が現われて来て、翼をひろげて、これを覆い温めてやった。姜源は驚き怪しんで、とうとうその児を自分で育て上げることにした。それがすなわち周の武王となった。(『竹書紀年』)

奇異な天象を見て孕んだ女性は、ことに多い。黄帝の母の附宝は、電光がひらめき渡って、北斗枢星を繞り、その光が郊野を照らすのを見て身重になり、二十五カ月で帝を生んだと言われ、顓頊の帝の母の枢は、瑤光の星が月を貫いて、虹のようであったのを見て、それに感じて孕み、遂に幽房の宮で顓頊を生んだとあり、禹の帝の母は、外を歩いているときに、流れる星が昴星を貫くのを見て身重になり、やがてその背が剖けて、そこから禹が生まれ出たと言われる。(34)（『竹書紀年』）

〔原注〕

(1) ニュージーランドの神話に、タネマフタという木の神が、相接している天と地とをおし分けたということを説いている。盤古神話はこれとすこぶる趣を同じくしていると言わねばならぬ。それから世界樹の観念も、中国に存していたらしい。スカンディナヴィアの神話に、イグドラジル（Iggdrasil）という大きな樹があって、上は天界に至り、下は死界に根をはっていると言われている。このような樹を世界樹と呼ぶのであるが、中国にもこれにすこぶる類同した説話が存している。『太平御覧』の言うところによると、中国に一本の大きな扶桑の樹があった。枝が無くて、すくすくとどこまでも大空に伸び上がっていた。そして上は天盤に至り、下は曲がりくねって三泉に通じているというのであるから、これを目して、中国のイグドラジルとなしても、決して不当ではあるまい。したがってまたこれを一種の世界樹と呼んでも、あえて比倫を失しているとは言えないと思う。

(2) この点、ギリシア神話で、太陽神ヘリオスが、数頭の駿馬に牽かせた車に駕して、一日に一回、東から西へ空を渡るというのによく似ている。

(3) スイスの天の河伝説は、上に挙げた中国の牽牛織女説話を偲ばしめる。曰く、昔、二人の男女が互いに愛し合っていた。死後、二人は空に移されて、おのおの異なる星に住むようになった。それらの星は遠く相離れていた。相思の二人はどうにかして逢瀬を楽しもうと考えて、ひどく骨を折って、星と星との間に光の橋を渡した。それが天の河であると。

解説者注 『述異記』は明代の張鼎思『琅邪代酔篇』に引く文によるもの。現行本の『述異記』には欠く。牽牛・織女伝承は『楚辞』・『文選』・『荊楚歳時記』・『続齊諧記』のほか、中世の諸書にもしばしばみられる。

(4) 『潜確類書』によると、孟婆という風の司もあった。江南における信仰であったらしい。天帝の女が江に遊ぶとき、出入りに必ず風が自ら随っていた。天帝の女の故を以て孟婆というと、『山海経』に

見える

(5) 先に『楚辞』と『淮南子』とを引いて、雷を掌る神の名は、豊隆と呼んだらしいと言っておいたが、『穆天子伝』を見ると、明らかにそうであったことがわかる。郭璞が、この書に見えた豊隆に注を加えて、豊隆はもと巫師で、よく雲を御したが、あとで遂に大壮の卦を得て雷師となったと言っているからである。すなわち豊隆は人間が高貴化して、雷霆を司る一個の超自然的存在となったものである。

(6) 虹と黄金とは密接な関係がある。欧州のある地方では、虹の両端が大地に接しているところを掘ると、莫大な黄金が埋まっていると信じられている。

(7) 女媧が五色の石を練って、天の闕けたところを補い、また大亀の足を切って天柱を立てたという物語は、『淮南子』のほか『列子』や『論衡』に見えている。興味深い神話であるが、恐らく更にまとまった一神話の断片であろう。天を支える柱の観念は、北欧神話、エジプト神話等にも現われている。

地が東南に欠けて、そこに海が生じたという観念は、中国の地勢を考えると、すぐに理解せられる。環境が神話の内容構成を決定した好個の一例証である。

(8) 黄帝は、史的人物のように、中国の古い書物に記されているが、どうも少し疑わしい。高木敏雄氏は、その著『比較神話学』の中で、黄帝と蚩尤とを目して、正反対の地位に立つ人文的英雄神たるの性質を有するとなすと共に、また両者の争いを以て、太陽と暴風雲雨との争闘となし、両者に関する説話を一種の太陽神話と解し得ざるにもあらずと言っている。しばらく記して、後の研究を待つことにしよう。

解説者注　蚩尤伝承は『山海経』に詳しく、また『書経』・『荘子』・『呂氏春秋』・『管子』・『文選』・『史記』正義に引く『龍魚河図』など多くの文献に散見し、松村氏の訳文はこれらによったものと考えられる。訳文中にある流波山に棲む牛形の怪物の名は『山海経』では夔となっており、

蚩尤とはいってない。なお、蚩尤は元来、山東半島で祀られた軍神で、わが国の各地で祀られている兵主神社はこの系列のものとされる。(内藤湖南『近畿地方に於ける神社』参照)

(9) この他に、先に述べたように、共工が顓頊と帝の位を争ったとき、天を支えている柱が折れ、地が東南に傾いて、大水が溢れたとき、女媧が黒龍を殺したり、蘆灰を積んだりしてこれを治めたということが、『淮南子』・『列子』等に見えており、また杜宇王の時に蜀の地に洪水が起こったのを、宰相の開明が玉塁山を決して水害を除き、その功によって、帝の位に登ったということが、『華陽国志』に見えている。しかし中国の洪水説話は、バビロニア、ギリシア、ヘブライ等のそれと重大な差異を持っている。後者は人類の悪事を憎んで、これを懲すということが主となっており、前者はいかにして洪水を治めたかということが主となっている。中国の説話は、洪水説話というよりはむしろ治水説話と称すべきものである。両者を混同して、その間に血縁的関係までも求めようとする一派の学者の見解には、自分は賛同し兼ねる。

解説者注　洪水説話は『史記』・『山海経』その他の諸書にもみえる。松本信広「中国洪水伝説の諸相」(『東亜民族文化論攷』誠文堂新光社所収)などを参照せよ。なお、訳文中に「いっしょに働いていた塗山氏の男……」とあるが、これは松村氏の誤解であろう。禹の妻が塗山氏の娘で、彼女が太鼓を合図に食事を運んでいたが、熊に変じた夫をみて恥じて石に化したのである。禹の子の啓はその石(啓母石)が破れて誕生している。

(10) 日本の周囲にある諸民族は、ほとんどすべて白鳥処女説話を持っている。日本の羽衣伝説が、そのいずれに最も関係が深いかは、興味ある考察問題であろう。

解説者注　中国の口頭伝承としての羽衣説話に関しては君島久子「中国の羽衣説話」(『文芸研究』一～三)を参照。

(11) 王質の斧の柄が腐れたのと趣を同じくするものに文広通の弩の朽ちたという伝承がある(『神仙感

応伝』)。これらはアメリカの詩人ワシントン・アーヴィングの霊筆によって名高くなったリップ・バン・ウィンクルの説話において、リップが眠っている間に、永い年月がたって、目が覚めて見ると、その鉄砲が朽ちてしまっていた、というのと面目を一にしているといわねばならない。

(12) 他郷に行って、時が超自然的に過ぎ去ったことに驚く者のことを説く説話は、ラング氏のいわゆる『世界大拡布説話』の一つで、多くの民族の間に見出される。中国には殊に多い。そして中には素朴な姿を保っているものもあるが、多くは道術、神仙思想に賦彩せられている。ここには挙げなかったが、『酉陽雑俎』に見えた李班の物語、『拾遺記』に載っている洞庭山の物語の如きは、特に神仙思想を濃厚に示している。

(13) この伝説は、早くから日本に知られていて、わが国の物語類との比較が企てられている。すなわち契沖は『河社』において、『後漢書』に載せた竹王伝説を引き、田中大秀は『竹取翁物語解』において、『華陽国志』に現われた竹王伝説を引いて、いずれもこれを目して『竹取物語』の原拠もしくは類語となしている。しかし、この比較は決して妥当ではない。むしろ『桃太郎』説話により大きな類同を持っている。これが果たして『桃太郎』の原形であったか否かは、速断を許さないが、両者の間になんらかの因縁は存しているらしい。ただし、これを発生的に見れば、竹王伝説は、桃太郎説話とは、全く別個の意図の下に生まれたものらしい。竹王伝説は、言わば一種の説明説話である。物語の主人公が何故に竹を以て姓とするかの縁由を説明することを主目的とする伝説である。夜郎県遯水地方に、実際の宗教文化的事実として、竹を以て姓とし、かつその姓を有するものを神として祭っていた民衆が存在したのであろう。言葉をかえて言えば、竹を部族霊として崇拝し、その司祭者を竹姓を以て呼んでいた部族が、かつて居住していたのであろう。そして、そうした事象の由来を説明しようとする欲求が働いたところに、竹王伝説が生まれたのであろう。この点において桃太郎説話と意味を異にしている。

(14) 解説者注　わが国の竹取説話の源流に関しては、伊藤清司『かぐや姫の誕生』(講談社)を参照。この物語は、欧州の説話界に有名なシンデレラ物語の類話である。シンデレラ物語は、世界に広く流布していて、かのコックス女史の『シンデレラ物語集』には、何百という類話が載せてあるが、中国のこの物語が最も古い。

解説者注　わが国では米福粟福・お銀小銀の名でしられて、朝鮮やベトナムなど中国の周辺にも多く伝承されている。南方熊楠「西暦九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語」(『南方熊楠全集』第2巻　平凡社所収)参照。

(15) いかなるシンデレラ物語よりも、中国のそれがいっそう古いということは、先に述べた通りである。ここに挙げた『人間を吐き出す口』の物語も、ヨーロッパにかなり広く伝承せられているが、おそらく梁の呉均が著した『続斉諧記』に出ているものが最も古いものであろう。こうして欧州に流布するメルヘンが中国の古文献に——一千年から七百年前の古文献の中に、ちゃんと記録せられているということは、文化史的に見て、はなはだ興味と示唆とに富む現象であると言わなければならぬ。ただしこれを東洋に求むるなら、『続斉諧記』の所載以上に古いものがある。すなわち『譬喩経』を見ると、一人の梵志が壺を吐き出し、その中の女と相戯れているうちに、眠ってしまう。すると女がまた壺を吐き出して、その中の男と共に寝る。やがて梵志が目を覚ましかけると、女が男を呑み、梵志が更に女を呑んで、杖によって去るとある。そこで段成式も、その著『酉陽雑俎』続集巻四に、『続斉諧記』の物語を引いたあとで、『譬喩経』の記述を挙げて、

余以ウニ呉均嘗テ此ノ事ヲ覧テ其ノ説ヲ訝シミ、以テ至怪ト為スナラン

と言っている。要するにこの怪奇な説話は、インドに発生して、一方ではヨーロッパに広がり、他方では中国に伝わったのである。説話の拡布の面白味は、実にこうしたところに存していると言わねばならない。

(16) 下界のものを飲食するものは、また明界に帰ることができないという観念信仰を契機とする説話は、諸民族の間に多く見出される。日本のイザナミ命の物語、ギリシアのペルセフォネの物語、スコットランドのトーマスの物語、フランスのオジエーの物語、フィンランドのワイナモイネンの物語の如きこれである。中国においては、上に挙げた四川の丁儂の物語が、その代表的なものである。ただしこの説話においては、冥府の肉を食うと駄目であるが、酒は構わぬとあるのは、どういうわけか。この点は確かに注意すべきところであろうと思う。

(17) これらの説話も、ある一派の学者によれば、洪水説話と解せられているが、実は一種の沈下説話で、ある土地が、なんらかの縁因から水の底に沈むことを説くことを、その本旨としている。洪水説話とはおのずから異なる。

(18) 滝沢馬琴は『燕石襍志』の中に、この物語を目して、わが国の「舌切雀」の根本なりと言っている。

(19) この物語は、いわゆる「人狼伝説」の最も代表的なものである。人狼（Werewolf もしくは Werwolf）というのは、自由におのが形を狼に変じ得る力を持つ人間のことであるが、広義においては、狼に限らず、いやしくもある獣類に変形し得る人を意味する。この変形の信仰は、ヨーロッパ諸国を始めとして、多くの国土に見出される。わが国――ことに土佐の国などにもこの信仰が存したことは、民間説話の証示するところである。

(20) 日本に猿神退治の伝説がある。上に挙げた烏喙将軍の伝説とすこぶる趣を同じくしている。ただ、猿神退治では、乙女を取る怪しい猿を征服する場合に、犬という役者が一枚加わり、しかも立役者の働きをしている。

(21) だいたら法師という巨人の足跡や、七難という大女の陰毛などに関する伝説が、日本のところどころに存しているが、中国にも、そうした種類の伝説が多く見出される。素朴な心を持った人たちが、産み出した二種の巨人族実在説の論証として、自分たちの興味をひく。

(22) この物語は、巨人伝説であって、同時にいわゆる「手長」の伝説である。この種の説話も、中国には少なくない。一例を挙げるなら、『山海経』には、長臂国というのが見えている。この国の人々は、突っ立ったままで、手が地面に届くので、海の中に入って魚を捕えるにも、体を曲げなくてもよいのであった。

(23) 巨人や小人に関する伝説が、多くの民族の間に存していることは、人のよく知るところである。これは単なる空想の産物であるとばかり言い捨てることができない節がある。これらの物語に記された通りの巨人や小人は、想像や興味による誇張が加わっているに違いないが、二つの異なる人種が相接したとき、その一方が他方より、やや、大きいか小さいかであれば、それが異人種に対する恐怖から誇張せられ易いものであるという事実も、併せ考えねばならぬ。実世界にときどき生まれ出る大男や侏儒が、こうした伝説の発生にあずかって力あることはもちろんである。

(24) 以上にあげた諸説話（「神樹の最期」から「大亀と桑の精」まで）は、いわゆる樹霊説話の名の下に一括せらるべきものである。樹木に精霊が内存しているという信仰観念は、これもほとんどすべての民族が抱いているところのものであるが、中国の説話に現われたそれは、いちじるしくエラボレートされ、またいちじるしく幻怪味を帯びて、怪談がかっている。日本などでもそうである。そこに自然民族の樹霊観と文化民族のそれとの差異がある。そこに現われた信仰観念が、素朴な民族心理的要素をより薄くして、技巧的な要素をより濃くしている。

解説者注　樹木から牛の出る類話としては、甘粛省武都の怒特祠の傍の梓の木を伐り倒すと、黒牛がとび出す説（『捜神記』二十巻本）のほか、『列異伝』や『玄中記』・『録異伝』などにもみえる。上掲の「神樹の最期」は『捜神記』八巻本所収の説話。

(25) これと同工の話が、『長秋夜話』に飛鳥井大納言と油売りとの物語として出ていた。大納言が鞠管の底の抜けたのを腰に結びつけて、その管を通して鞠を蹴るのを見て、油売りがけなして、その果て

に銭の孔から油を入れて見せるという筋。

(26) 人間の頭から椰子ができたという説話は、アフリカにもあり、南洋のパプアにも見出される。椰子の実の格好が人間の頭に似ているところから、期せずして多くの民族の間にこうした相類似する説話が生まれたのである。この点でアンドリュー・ラング氏の人心作用同似の学説は、マックス・ミュラー氏の言語疾病の学説に優っていると言わなくてはならぬ。

(27) わが国でも、オシラ神に奉仕するイタコが「遊び」の日に正式に語るところによると、「昔、長者にただ一人の美しい姫があった。長者の名馬栴檀栗毛、その姫を恋い慕い、長者怒って其馬を殺すと、姫も亦悲しんで命終った。二つの霊は昇天して次の朝は庭上の桑の木に降り、化してタウトゴの蟲になった。これ日の本の養蚕の始めなり」とある。(柳田国男氏「オシラ神の話」)

解説者注 『捜神記』二十巻本、呉・張儼の『太古蚕馬記』・唐・孫頲の『神女伝』などにも類話がのっている。わが国の関連説話については今野圓輔『馬娘婚姻譚』(岩崎美術社)などを参照せよ。

(28) 誰でもよく知っている通り、滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』は、その趣向を、中国の書物に採るところが多い。『水滸伝』などはその一つである。里見義実の女、伏姫と八房という犬とにまつわるローマンスの如きも、上に挙げた盤瓠説話から思いついたものであることは、多くの人の認めているところである。いつもの馬琴の癖で、すこぶる道徳臭くなっているのは、致し方がないが。

解説者注 『捜神記』八巻本によったもの、同書二十巻本にも類話がある。『後漢書』の南蛮伝・『魏略』などにもみえる。

(29) 人間が変じて泉となることを説く物語は、一見、奇怪千万のようであるが、実際は多くの民族の間に見出される。いわゆる「変形」(Metamorphosis)の信仰の現われである。

(30) この説話、怪物が鉄を恐れるという信仰観念を示すものとして、注意すべきものである。この信仰観念は、広く諸民族の間に見出されること、人のよく知るところである。

解説者注 以上の説明説話(二)は主要な年中行事や習俗の起源に関する伝説である。正月の爆竹や白粥、五月の節句の粽、九月の節句の登高の習俗などは今日でも行なわれており、そのあるものはわが国にも伝わっている。

(31) この伝説は、わが国の「俵藤太」の物語と、その内容においていちじるしく類似している。したがって「俵藤太」の物語の考察には、よく引用比較せられる。

(32) 鐘が水に沈んでいることを説く伝説が、本当の沈鐘伝説であるが、鐘以外のものが沈んでいることを語る伝説をも、この型の説話に包括させるのが常である。その場合には、本当の「沈鐘伝説」と区別するために、後者を「変形沈鐘伝説」と呼ぶことがある。

多くの他の国における同じように、中国にも、沈鐘伝説と共に、多くの変形沈鐘伝説が見出される。後者の三例はそれである。

(33) 『述異記』には、卵は野に棄てられ、後倉という犬がそれを拾って来たとある。そして生まれた児は、筋があって骨がなかったと記されている。

(34) 怪誕説話は、その種類がはなはだ多いが、頁数に制限があるから、これだけにしておく。新羅の始祖朴氏、高句麗の東明王(朱蒙)、新羅王第四世脱解およびその嗣子等も、怪誕説話の代表的な主人公であるが、中国のことでないから、わざと除いておく。

解説者注 いわゆる卵生型族祖神話・感生型神話のたぐいである。東アジアの同系神話伝承については三品彰英の「神話と文化境域」(三品彰英論文集第三巻『神話文化史』所収)を参照のこと。

〔解説者注〕

一一頁　盤古神話は『述異記』・『五運暦年記』のほかに『三五暦記』や『劉恕外記』にもみえる。これらの中には盤古の別名が渾敦であると伝えるものがあるのは注目に価する。しかし、巨人の死体から天地万物が発生したという伝承はインドのプルシヤや北欧のイミルなどの神話にも、また西南中国少数民族の伝承中にもみられる。

一六頁　昔、天空に多数の太陽が出て人々を苦しめたので、英雄が射落として人々を救ったという伝承は、華南の苗族その他の諸族や東南アジア、インド、あるいは北アメリカなどにもある。羿射日伝承の発生を山東半島における太陽崇拝に求める中国起源説や、インドなどに求める南方起源説などがある。

二四頁　類話は『述異記』にも載っている。このほか貝類から美女の出現する異類女房説話は『原化記』・『此中人語』などにもみえる。救った亀鼈や拾った田螺や貝から変じた美女と夫婦になる民間説話は中国にも多く、類話はわが国や朝鮮、ベトナムなど東アジア各地にもみられる。

二九頁　八巻本『捜神記』の翻訳である。このほか二十巻本・敦煌本の『捜神記』にも類話が載っており、わが国の『今昔物語』などにもみえ、民間説話としても伝播している。伊藤清司「中国の説話文学」（臼田・西尾編『日本の説話1、原点と周辺』〈東京美術〉所収）参照。

五四頁　両頭の虹（蜺）が天空から降りてきて、井泉の水を飲むという俗信は中国にも古くからあり、殷墟文字は虹（蜺）を左図のように書いている。『夢渓筆談』・『文枢鏡要』その他に載る中世説話にもしばしば類話がみえる。

五五頁　神が人間を製造した当初から富貴・貧賤の階級的差異や人種的区別等があったという神話は、他の世界にもみられる。インドの人類創造神話では巨人プルシャの死体から化生することになってはいるが、その口から婆羅門、そして腕から王族、腿から農民、足から奴隷の各階層が発生したという。北米インデアンの神話では、神が土を捏ねて人間を造る時、太陽に当てすぎたのが黒い肌の部族で、日陰に置いたのが白い皮膚の部族であるといい、また、神がはじめ不馴れなため粗末な人間ができ、のちに熟練して上等の人間が造られた、とも語っている。

八二頁　桃源境は一種の隠れ里伝承で、神仙道術の思想の影響を被っていちだんと神秘化された。なお後漢末以来の戦乱を避け、人々が山間僻地などに営んだ塢の存在などのイメージが隠れ里伝説の発達に影響している。

一〇〇頁　類話は『捜神記』二十巻本にもあり、また李冗の『独異志』にもみえる。これらでは県門に血がついたら……となっており、門番が犬または鶏の血を塗ったため湖水の下になったといい、後者ではそれが歴陽湖（安徽省）だという伝説となっている。

一一二頁　人虎伝承は『捜神記』（二十巻本）・『齊諧記』などの諸書にみえる。かつて揚子江と漢水の中間地帯に貙人とよぶ部族が住んでいた。かれらは好んで紫葛衣を着、またよく貙虎（とら）に変身すると伝えられた。かれらの風習に関する伝承が変化したものであろう。

一四〇頁　魯般とは雲にまで達する高い梯子の発明などで著名な春秋時代の魯の国の名匠公輸班のことで、『孟子』・『荀子』・『墨子』などにもみえている。古来、職人の神として崇められる伝説的存在で、今日でも中国全土に魯班伝承が流行している。

一六四頁　ほぼ同内容の伝説が『捜神記』二十巻本にも載っているほか、同書には亀その他の動物の示唆によって築城に成功した説話がみえ、類話はわが国などにもある。大林太良「動物の築いた城」（『中国大陸古文化研究』第七集所収）参照。

一六八頁　大蜈蚣（むかで）の姿をとる赤城山の明神と湖水を争って、いつも敗れる日光の権現の大蛇の救いに応じ、猿丸太夫が大蜈蚣の眼を射る説話（林羅山『二荒山神伝』）など、神の求めに応じてこれを助ける類似伝承はわが国にも多い。（柳田国男「神を助けた話」（『定本柳田国男集』第十二巻所収）参照）この『後捜神記』の系統の伝承であろう。

中国神話伝説集　解題

神話を産み出す心理は、人類的といってあえて差し支えない。しかし神話を産み出す時期は、普遍的ではない。それは一定の条件に制約せられている。いかなる民族といえども神話を産み出しはするが、いかなる文化期にも生まれるというわけではない。

すべての民族は、その心的発達のある階層において、フィヤーカント氏のいわゆる神話的思考に到達し、そしてやがて、またこれから超脱する。神話が生まれ出るのは、この思考が旺盛に活躍する時期であって、這般（これら）の時期を通過しつくすと、神話は生まれなくなる。

この意味において、自然民族は、神話を産みつつある民族であり、文化民族は、かつて神話を産み、しこうして今は産み出さなくなった民族である。だから古い文化を有する民族の間には、多くの神話が残存しているのを常とする。エジプト人においてそうであり、バビロニア人においてそうであり、インドアーリアン人においてそうであり、ギリシア人、ゲルマン人、日本人等においてそうである。

それならば、はなはだ古い文化を有する中国においてはどうであるか。古い文化を有する民族にして、神話を有することのはなはだ少ないのは、中国人とローマ人とに如（し）くはない。二者は、神話界における奇異なる特殊現象の代表的なものでなくてはならぬ。自分たちは、この現象を如何に解釈すべきであろうか。

多くの学徒は、この特殊な文化現象の原因として、中国人やローマ人の民族的性情の一特徴を挙げるのが常である。二者は共にその人種的特質として根本的に強い実際的傾向を有し、したがってその心神を想像の霊域に馳するの余裕なく、厚生利用の実用的生活に捉われ過ぎた。これが彼等の間に神話の生まれることの少なかった主要な原因であると考えられている。

しかし自分はこうした見解にあまり重きを置きたくない。実際的性情は、必ずしも神話の発生を阻止するものではない。神話的思考は這般（これら）の性情と両立し得るものである。実際的性情は、神話の質を決定する上には、大きな関係を有しているが、神話の発生および量を決定する素因とはならぬ。この性情が神話の存立に著しい作用力を持つに至るのは、民族の心的発達が、やや進んだ階層に達した時期においてであって、神話的思考の活躍する時期においてではない。それならばローマ人や中国人（主として漢族）の間に、はなはだ神話が稀少であるという現象は、これをどう解釈すべきであろうか。

ローマ人は、その宗教発達の階層から見て、まだ神人同格教（anthropomorphism）に達しない文化期において、これを完全に抱持したギリシア人の文化に接するようになった。神話を発生させるに最も都合のいい母胎の一つは、神人同格の観念信仰であって、之に到達しない民族――単なる無形の神秘的勢能や非人格的な精霊の観念信仰だけに留まっている民族は、どうしても神話的生産力が弱い。何故なら神話は、いわば一種の戯曲であり、したがってそこに出現する役者は、具体的なもの、人格的なものでなくてはならぬからである。かくてローマ人は、神話を産み出し得る条件を完備しないうちに、この条件を完全に具有したギリシア人に接したわけである。だか

らローマ人は、ギリシア人がすでに産み出している幾多の神話を自分のものとして襲用しなくてはならなかった。これがローマ人の間に固有の神話が稀少であるという現象の主要な原因であると思う。『北欧神話学』の著者R・B・アンダーソン氏（R. B. Anderson）は、ローマ人を呼んで、「大きな神話盗人」となしている。然り、ローマ人は、ギリシア人から極めて大がかりに神話を盗み取った。自分たちで神話を産み出す必要がない程度に盗み取った。そしてそうしなくてはならなかったのは、ローマ人が本来性情的に神話を産み出し得ないからであったと言うよりは、むしろ之を盛んに産み出し得る心的状態に到達していなかったからであると言うべきである。

中国においては、これと頗る事情を異にしている。中国における民族（主として漢族）は、彼等の間に残存する若干の神話から見ても、はた彼等が抱いていた宗教観念から見ても、更にまた彼等の生活を支配していた民俗及び民俗に現われた思考法から見ても、神話を産み出す心的状態、並びにこの心的状態の活躍に都合のいい条件を具有していた。だから理論的に言えば、彼等の間にはかなり多くの神話が産れ出た筈（はず）である。しかるに実際的にはそれがはなはだ稀少であるのは、どうした訳であるか。自分はそこに中国民族の実際的性情の大きな作用力を認めたいのである。低い文化階層にあっては、神話的思考や神話詩的（ミソポエチカル）想像力は、実際的性情の掣肘がいかんともしがたい程度に潑溂たる活力を持ったであろう。したがって神話はかなり自由にかつ多量に発生したであろう。しかし文化が次第に進展し来って、民族の心的発達が知力的に深化するか、若（もし）くは民族全体がそうでなくとも、若干の個々人の知力が高まるにつれて、実際的性情が大きな勢力を発揮するようになったであろう。そしてそれは一方においては少なくとも或る階級に於ける神話発

生力の窒息を意味すると共に、他方においては、在来の神話に対する抹殺力の台頭を意味するものでなくてはならぬ。切言すれば、中国における神話の稀少という現象と、その民族の実際的性情との関係は、この性情が初めから神話の発生を阻止したというところに存するのではなくて、むしろ後代においてこの性情が神話の存続に都合の悪い態度を採ったというところに存するであろう。

いうところの「都合の悪い態度」の主要なものは、儒教の作用力であった。幾多の儒家は、その実践的厚生的見地から、神話の説くところを目して、荒誕無稽にして経世に実用なきものとなし、おのれ等の見解から見て、あり得べきところのもの、もしくは然らざるべからざるところのもののみを保存して、その他を抹殺した痕がある。またこれを改作して、倫理的もしくは史実的に変容せしめた痕跡も歴然としている。これが中国に純真素朴な神話の稀少である主要原因であると思う。

中国には、神話が少ないのに反して、伝説は極めて多い。しこうして神話と伝説とにおいては、多くの共通な心理が働いているのを常とするが故に、この点から考えても、実際的性情が神話の発生を阻止する主要な原因とは考えがたい。なぜなら、もし這般の性情が神話の発生を阻止したとするならば、それはまた伝説の発生をも阻止しなくてはならぬからである。それならば、中国において神話がはなはだ少なくて伝説が著しく豊富であるのは何故であろうか。

第一の理由は、伝説を産む心理は、神話を産む心理に比して、よりモダーンであるということである。よりモダーンという意味は、伝説を産む心理が、神話を産む心理に比して、発生的に新しいということではない。これらの心理は、発生的にはいずれを古しともしがたい。ただ民族生活の関係の上から、前者の方が後者よりも一層近代的文化期まで生命を持続し易いという意味において、よりモダーンである。そしてその点から言って、多くの民族は、量的に言えば、神話よりも伝説を多く保有するのを常とする。中国において伝説が神話との比較を許さぬ程度に多量に存する理由の一つは確かにここに存すると思う。

第二の理由は、実際的性情と神話および伝説との関係である。先に言ったように、中国人の実際的性情は、儒教を通して神話を圧迫した。然るにこの圧迫は、伝説に対しては、神話におけるほどに峻厳でもなければ、また有力でもなかった。なぜなら多くの文化国においてそうであるように、中国においても、神話が早くも官府的なもの、上流もしくは知識階級のものとなったに反して、伝説は、永く民間的なもの、下層階級的なものであり続けた。そして儒教の勢力は、知識階級を支配したとしても、一般の民間には強い作用を及ぼし得なかったからである。

神話伝説は、その中に出現する人物を基本にすれば、三つに大別することができる。

(1) 超自然的存在のみを主体とするもの。
(2) 超自然的存在を主役とし、人間を端役とするもの。
(3) 人間を主役とし、超自然的存在を端役とするもの。

がすなわちそれである。

多くの民族は、その神話伝説において、これらの三種を具有するのが常である。しかし量的に言えば、三者のうち、そのいずれを最も多く有するかに関しては、民族によって異なっている。当面の問題である中国人について言えば、第一種に属するものが最も少なく、第二種に属するものがこれに次ぎ、第三種に属するものが最も豊富である。神話においては殊にそうである。したがって純粋な神話という立場から言えば、中国の神話は第二義的なものが多いということになる。myth proper の範疇に属するものは寥々として、quasi-myth と称すべきものが大部分を占めている。自分はこの現象を目して、

(1) 実際的性情が神話の質に作用したからである。

(2) 早い文化期の純真な神話的思考の産物の外に、後代の擬似的な神話的思考の産物が雑糅しているからである。

と考えたい。

伝説について言えば、中国のそれは怪談的要素の豊富さと濃厚さをもって、他国民のそれの上に、一頭地をぬきんでているように思われる。そしてその怪奇妖幻な要素は、著しい程度にエラボレートせられ、技巧化せられ、芸術化せられているが故に、これを含むところの伝説は、Volksdichtung であるよりも、寧ろ Individuelle Kunst であるような気がしてならぬ。言葉を換えて言えば、民間に自然に発生した伝承的な説話というよりも、ある個人によって文芸化せられた怪奇小説というに近い気がする。この意味の伝説の豊富さでは、中国は世界に冠たるものであろうと思う。

最後に神話と伝説とを引きくるめて言えば、中国のそれらは、道教、神仙思想に飽満しているところに一つの特色がある。概観的に言って、インドの神話が宗教的であり、ギリシアの神話が社会的であり、北欧の神話が哲学的であり、日本の神話が歴史的政治的であるに対して、中国の神話は、仙術的であると言えるであろう。

中国神話伝説集を編著するに当たって、自分が資料とした典籍の重要なものをあげておくのは、頗る必要なことであろうと思う。何故なら、中国の神話伝説に関する纏った著書ははなはだ少なく、外人の手になるものは若干存しているが、典籍の渉猟が頗る不足であるからである。

安城記　異苑　夷堅志　異聞録　緯略　淮南子
淵鑑類函　河図　鑑戒録　漢書　韓非子　漢武故事　漢武内伝
魏志　魏略　金坡遺事　金楼子　外国図　括地図　鶴林玉露
華陽国志　桂苑叢談　荊州星占　荊楚歳時記　芸文類聚　元怪録　元中記
五運歴年記　呉越春秋　後漢書　五経通義　国語　江湖紀聞　古今図書集成
古今注　呉地記　皇明政略　語林　五雑俎　山海経　三五歴記
山川紀異　拾遺記　爾雅　史記　事言要玄　十洲記　尸子
述異記　祥験集　尚書　笑府　笑林　神異経　晋書
新序　神仙伝　神農経　周礼　新斉諧　斉諧記　瑞応図
水経注　図経　齊民要術　潜確類書　戦国策　宣室志　荘子

楚辞　捜神記　捜神後記　続齊諧記　続捜神記　続博物志　続幽怪録
太平御覧　太平広記　竹書紀年　中華古今注　朝野僉載　枕中記　天中記
独異志　桃花源記　道州志　唐代叢書　唐年小録　南越志　南方草木状
博物志　筆談　白虎通　風俗通義　符瑞志　文選　幽怪録
幽冥録　酉陽雑俎　礼記　龍城録　霊憲　麗情集　列子
列仙伝　呂氏春秋　論衡

これらが自分の種本とした典籍である。この表によって、読者が、中国の神話伝説を捜るには、どんな手引によるべきかを知られたら、自分の本意とするところである。それから一つ一つの説話の終りに、その出典を附記しておいたのも、読者の研究に資するための自分の老婆心である。

外人の著した書物には、

(1) Werner (E. T. C.), Myths and Legends of China.

(2) Ferguson, Chinese Mythology.

(3) Dennys (N. B.), The Folk-lore of China.

(4) Mackenzie (D. A.), Myths of China and Japan.

等がある。それぞれ有益な書物ではあるが、考証や理論が多くて、物語そのものを知るためには、あまり役に立たぬ。かつ先にも言った通りに、渉猟せられた原典の範囲が狭小であるという遺憾がある。自分はこれらの書を通読はしたが、これを引くことはしなかった。

先に一言したように、中国には伝説が極めて豊富であるが、素朴な自然的形態を離れたものが多いのと、本書の頁数に制限があるので、その中から、なるだけ民間の信仰と関係の深いものや、説話としての純真な契機を含むものを採択することにした。

松村武雄

解　説

松村武雄氏はわが国における神話学、とりわけ、日本神話学史上、不滅の足跡をのこされた代表的な学者で、大正期から昭和期の前半にかけてめざましい活躍をし、日本神話学のたしかな基礎を築かれた。その不朽の功績に対し、後述のように、恩賜賞があたえられ、また、朝日賞も授与されている。

松村氏は一八八三年（明治一六年）八月二三日、熊本県に生まれ、旧制熊本中学、同じく第五高等学校（現熊本大学）を経て、東京帝国大学文科大学（現東京大学文学部）英文科に進み、一九一〇年（明治四三年）に卒業した。英文科在学当時から神話の研究を志し、卒業論文も神話に関するものであり、同じテーマをひっさげて、さらに大学院に進み、神話研究に専念した。

当時、わが国では神話研究は今日ほど活発ではなく、神話学ないし関連の学問を研究する専攻学科もないままに、英文科に属していたこと、そして「神話の研究」という卒業論文の題目がはじめ受理されず、「英文学に現れたる神話の研究」と改題して提出したというエピソードに象徴的にうかがわれるように、松村氏の研究はそのころは尋常なものではなく、最高の学府に学びながら、研究はまったくの独学者のそれに等しかった。松村氏は当時を回顧して、みずから「学問的孤児」といっているが、それは必ずしも誇張ではなかった。かてて加えて肉体的な虚弱と経済的貧困に悩まされた。当時の苦闘の日々のありさまは、晩年の著『神話学者の手記』（一九四九

年・昭和二四年）にくわしい。

一九一九年（大正八年）、松村氏はようやく東京帝国大学文学部の講師を依嘱され、ギリシア神話の講義を担当するようになった。その間、卒業論文を発展させた論文をまとめ、一九二一年（大正一〇年）一月には、その論文「古代希臘の文化に現れたる神々の宗教的葛藤の研究」によって、文学博士の学位が与えられた。同年、旧制浦和高等学校（現埼玉大学）に定職を得たが、ただし、それは英語教授としてであった。しかし、同年四月から国学院大学に招かれて神話学を講じたほか、翌年四月から二か年あまりにわたって、海外研究員としてヨーロッパ各国に留学することが認められ、もっぱら神話の研究に没頭した。その後、しだいに著述活動が活発となり、とくに一九四〇年（昭和一五年～）代は第二次大戦の敗色の暗雲につつまれて中断を余儀なくされた一時期はあったものの、もっとも多産の時期であった。

松村氏の主要な著作としては、それまでに各種雑誌などに発表した論文をあつめた、

『神話学論考』　一九二九年（昭和四年）同文館
『民俗学論考』　一九三〇年（昭和五年）大岡山書店

をかわきりに、

『神話学原論』上・下　一九四〇～四一年（昭和一五～一六年）培風館
『古代希臘に於ける宗教葛藤』　一九四二年（昭和一七年）培風館
『宗教及び神話と環境』　一九四四年（昭和一九年）培風館
『日本神話の実相』　一九四七年（昭和二二年）培風館

『神話と歴史』　一九四七年（昭和二二年）東海書房
『言語と民俗』　一九四八年（昭和二三年）東海書房
『儀礼及び神話の研究』　一九四八年（昭和二三年）培風館

そして、

『日本神話の研究』全四巻　一九五五～五八年（昭和三〇～三三年）培風館

である。これらのうち、『神話学原論』に対し、一九四七年（昭和二二年）には、学者としてもっとも名誉とされてきた恩賜賞が、また『日本神話の研究』に対しては、その刊行完了の年、朝日賞が贈られ、その功績が広く認められた。この『日本神話の研究』は松村氏の著作中、もっとも浩瀚なものであるとともに、その神話研究の集大成であって、高血圧症・心臓衰弱症その上に白内障にも悩まされ、その完成後はほとんど病床に臥し、一〇か年間ほど著述活動もなく、また、しかるべき弟子・後継者もないままに、一九六九年（昭和四四年）九月二五日に永眠された。

松村氏の神話研究の特色については、すでに発表された大林太良氏の「松村神話学の展開――ことにその日本神話研究について――」（『文学』39－11　一九七一年）および植島啓司氏の「松村武雄論」（『季刊柳田国男研究』8　一九七五年）などにくわしい指摘があるが、上に掲げたその主要な書譜が物語っているように、松村氏の生涯研究のエネルギーは主としてギリシア神話と日本神話、なかんずく、結果的には後者にそそがれ、そしてその研究方法の特徴は比較神話学的研究にあった。つまり、『古事記』・『日本書紀』などの古典にのこされた日本神話の研究は、たとえ

ば、津田左右吉氏の『神代史の新しい研究』一九一三年（大正二年）ないし『神代史の研究』一九二四年（大正一三年）が、歴史学的でインテンシブであるのに対し、松村氏のそれは民俗学的ないし民族学的で、エクステンシブであった。それは大著『日本神話の研究』第一巻に研究方針として明言されているとおりである。

「……多くの研究対象がそうであるように、神話なるものも亦、或る特殊の一つ、若くは極めて小数の研究方法のみではその秘を啓き得ないかずかずの面層を有している。だから自分は、民俗学的・人類学的及び民族学的なそれを主たる研究法とすると共に、言語学・古文献学・宗教学・社会学・文化史学その他を補助科学としたい。」

こうした視点と態度は、松村氏が神話学へ志向した初期からすでにあったものであって、「学問的孤児」の摸索の時代であった二〇代の回想、

「……神話の研究が人類学的知識や民俗学的知識を必須とすることは、当時の自分にも、おおよそ判っていた。」

という言葉の中にもうかがわれ、それは松村氏の学問遍歴を一貫した特色であった。こうした松村氏の特徴は同氏が英文科に進んで、欧米の文献に親しみうる環境にあったこと、そして当時、わが国では欧米の影響をうけて民俗学的研究の勃興期にあったことなどと密接に関わりをもっている。一九一三年（大正二年）に柳田国男・高木敏雄の編集する雑誌『郷土研究』が創刊、ついで一九二五年（大正一四年）には『民族』、そのあとをうけて一九二九年（昭和四年）には『民俗学』が刊行され、松村氏自身もそれらに寄稿もし、また、これらの人類諸科学の機関誌などを通

じて、柳田・折口信夫・南方熊楠、あるいは松本信広などの諸先輩・同輩から多くの影響をうけた。しかも海外にはこの方面の学界がめざましい発展期にあった。その意味では、松村氏は東京帝国大学の中においては「学問的孤児」であったかもしれないが、必ずしも「独学者」であったのではなかったのである。

さて、本書のもとをなす『支那神話伝説集』は、松村氏の比較的初期の作品ではあるが、そうした比較神話学的研究の視点から、中国神話伝承の特質を明らかにし、比較研究上の資としようとして編み出されたものであろう。しかし、直接的には、一九二七～二八年（昭和二～三年）に、東京・牛込にあった近代社より比較的通俗叢書として刊行された世界の神話伝説大系・全一八巻の一冊として作られたものである。この『支那神話伝説集』は、中村亮平編の「朝鮮神話伝説集」および「台湾神話伝説集」と合わせて一本という体裁をとって発刊され、のち、一九三四年（昭和九年）、同じ体裁で東京・神田の大京堂より、本文・解題ともまったく同じ覆刻版が出され、さらに、これらと同じ体裁の書が、大洋社より発売されている。（ただし、近代社版・大京堂版および大洋社版の間に、図版の挿入の有無などについて若干の相違がある。）同一の書物があまり時日をおかないで、出版社を異にして刊行された事由については委細不明であるが、時局がら、中国への関心の昂まりつつあった時期でもあり、とにかく、ともに版を重ねたもののようで、大京堂版は翌年、重版を出し、大洋社版の方も毎年のように版を重ね、五年後には第六版を出しているところをみると、相当の評判もあり、需要もあったのであろう。そのためか、一九三八年

（昭和一三年）には、松村氏は『神話伝説支那五千年』を、東京・牛込の天松堂より、天正堂版として、上・下二冊本の形で印行している。ただし、従来の諸版が菊版であったのに対し、この天正堂版は四六版の体裁に改め、編目にも若干の出入があり、追加の伝承も相当にあり、収録数は前者の倍に達している。おそらく『支那神話伝説集』を編録後にあつめたものを増補する形で編み出したものであろう。

さて、すでにのべたように、『支那神話伝説集』は中国神話伝承の本質を明らかにし、比較神話学研究の資料、なかんずく、日本神話研究のための比較の材料としようとする意図も秘めたらしい通俗書であって、中国神話の本格的な研究そのものではない。このことは『神話伝説支那五千年』の序文の中にも、左のように述べられている。

「……支那の文化が、強く且つ切実に日本の文化に影響したことは、言うまでもない。そして文化形相の一つとしての隣邦の神話・伝説から小説・稗史・謡曲・狂言等の文学や、講談・落語に至るまでに濃厚に作用していることも、また否定すべからざる事実である。かくして支那の神話伝説の研究は、啻に支那を知るためでなく、更に日本を知るためにも必須である。」

本書は松村氏の筆になる解題にもあるとおり、中国の典籍を渉猟し、その中から目ぼしい神話や伝説類を撰び、それを翻訳・紹介したものである。松村氏は晩年、日本神話の比較研究を進めてその系統論にも及んでおり、わが国の隣接地でもあり、先進国でもある中国への同氏の関心は、昂まることこそあれ衰えることはなかったと想像されるが、その後もついに中国神話に関する専門の論著を発表してはいない。この書が松村氏の書譜の上で、比較的早期を占めてはいるものの、この方面の研究領域にはついに深入りせず、これを他の学者にゆだねようとする考えがあったようで、解題の行間にもそれがうかがわれる。

しかし、当時も、そしてその後も、松本信広氏や出石誠彦氏など一部の学者を除き、中国の神話伝承の研究は必ずしも活発とはいえず、大戦中の中国の聞一多や玄珠氏、戦中から戦後にかけて、わが国の森三樹三郎氏や中国の袁珂氏、その後、貝塚茂樹氏、最近では白川静氏の中国神話に関する論著がしだいに出版されてきたが、その立ち遅れは依然としてあり、しかもその間にあって、そうした考証の書にくらべて、中国の神話伝承そのものを紹介した書物、中国神話研究の基盤をなす啓蒙書はさらに少ない。松村氏が世界の神話伝説大系の中の一冊として、これを編んだのも、一つにはこの空白を埋めようとしたものであろう。

類書の少ない現在、松村氏の『支那神話伝説集』を装いを新たにして刊行することは、中国神話研究、あるいは日本神話研究のためその意義は少なくないが、長い不幸な中国との断絶がようやく終わり、より長かった日中交流の時代をとりもどしつつある今日、それは単なる比較神話研究のためだけではないのである。

本書は近代社版をもとにし、その中から型式上、重複すると思われる伝承を割愛することを主眼として取捨選択をし、収録数を原書の約2／3に縮小するとともに、その配列も内容に順って一部を入れ替え、整理をして読者の便をはかった。

本書の表題の『支那神話伝説集』を『中国神話伝説集』と改題したほか、本文および注の支那の文字をすべて中国に改めた。ただし文中、中国の中原（ちゅうげん）地方ないし中央部というほどの意味ではじめから中国と表現されているものがあったが、それは理解の上で、とくに不都合はないので、手を加えずそのままにした。

かな文字はすべて現代かなに改め、旧漢字も当用漢字に改めたほか、たとえば、「太だ」を「はなはだ」に、「決して」を「けっして」に「希臘」を「ギリシア」のように書き替えたほか、一部の不適当と思われる用語を正した。たとえば、ある種の人びとが「棲息していた」とあるのを「居住していた」としたごときである。

あらかじめ説明したように、本書は中国の古典籍の中から採った神話伝承を翻訳し、その出典を文末に明記し、さらに松村氏自身が注を施したものであるが、中には、断片的な伝承をつなぎ合わせてその復元を試み、あるいは異伝をあつめて、本文中に松村氏自身の筆で神話伝承をまとめ上げたり、意見を述べたりしたものが少なくない。そういうケースは、松村氏の筆になる部分を一字下げて載せ、原文と区別するか、さもなければ、同氏の加筆の文は削って、本文末にまわして注とした。この処置は本書の体裁をなるべく整えるためと、資料集としての性格を少しでも昂め、読者の便をはかる意図から出たものである。

松村氏の訳は原文に忠実な翻訳ではない場合が少なくない。それは読者の理解を容易にし、興味を失わせないようにとの配慮から出たものであろうし、その意訳は原文の意味を著しくそこねていない。ただし、ごく一部ではあるが、意訳以上に、松村氏が想像を加え、脚色の筆を施すあ

まり、やや事実に反すると思われる記述もなくはない。それについては編者の補注の中でとくに指摘をしておいた。また、明らかな誤植と誤訳はこれを訂正しておいた。

出典についてはいちいち原典に当たって確かめるよう努め、その誤りを訂正し、欠落しているものを中心に補充をした。また、渉猟した典籍として解題中に列記した書名中の誤りも正し、また、解題・本文の出典を通じ、書名の不統一を正した。たとえば『風俗通』と『風俗通義』とを後者に統一した。また、ルビは松村氏の施したものを尊重しつつ、かなり大幅に削除したが、一部に新たに施したルビもある。いずれにしろ、原書を損うことのないように努め、しかも、読者の便宜を考えての処置である。

なお、松村氏の注に添えて解説者が補注をする場合は、その原注のあとに付記し、新たに施した補注は最後に一括してならべた。

原書には数葉の挿絵が入っているが、すべて新しく描かれたもので、資料的価値はない。したがって、本書ではこれらを除き、新たに八枚の図版を採用し、本文の理解の一助とした。その多くは漢代前後に属する考古資料からとったもので、それらに若干の解説をつけておいた。

本書の刊行には、大林太良氏のご援助と社会思想社編集部の鈴木素子氏のご助力に負う点が多い。付記してお礼を申しのべる。

一九七六年一月二五日

伊藤清司

解説者略歴

伊藤清司（いとうせいじ）

1924年　岩手県に生る
1959年　慶応義塾大学大学院卒業
《現　在》慶応義塾大学教授
《著　書》『かぐや姫の誕生』「日本神話と中国神話」
シンポジウム『出雲神話』,『日本神話の原形』その他
《現住所》東京都目黒区緑が丘２の21の５

〈お願い〉
☆現代教養文庫の定価は、すべてカバーに明記してあります。
☆万一，落丁乱丁の場合は，直接小社にお送りくだされば早速お取替します。

©Seiji Ito 1976

Printed in Japan

現代教養文庫　875　中国神話伝説集

1976年　2　月　15　日　初版第１刷発行
1985年　5　月　15　日　初版第20刷発行

編　者　松村武雄
解説者　伊藤清司
発行者　小森田一記

発行所　株式会社　社会思想社
（113）東京都文京区本郷１の25の21
本　社（03）813—8101
営　業（03）813—8105
振替東京6—71812

ISBN4-390-10875-1

凸版印刷・田中製本

民話・伝承シリーズ

日本伝説集
武田静澄

遠い昔から、民衆によって伝承されてきた数多い伝説の中から、特に興味深いもの七十余篇をえらんだ。

日本笑話集
武田明

真似そこないの話、おろか者の話、大話、業くらべ、智巧譚など、民間に語り伝えられる笑話一六〇余収録。

日本怪談集
今野圓輔

実際に幽霊を見たという体験談を中心に、古典文学、民話、随筆、民俗資料の中から典型的な話を集めた。

沖縄民話集
仲井真元楷編

沖縄の島々に伝承されている数々の昔話、伝説などの中から、いかにも沖縄らしいもの98篇収録。

日本のことわざ 全2
金子武雄

広く民衆に支持され伝えられてきた文化遺産であることわざ、約五〇〇の意味や由来をわかりやすく説いた。

中国神話伝説集
松村武雄編
伊藤清司解説

怪奇妖幻、そして仙術的な中国の神話伝説をを系統的にまとめた好読物。日本人にとって身近かな話も多い。

中国笑話集
村山吉広訳編

中国明代に編まれた『笑府』を中心に歴代の笑話集から選んだ、中国民衆の生活感情や風刺精神を読みとれる。

中国奇談集
鈴木了三訳編

中国の晋代から明のころまでに編まれたたくさんの物語の中から、特に怪異談を中心にしてまとめた。

中国の民話
沢山晴三郎訳編

悪徳地主や悪役人に屈せず、しぶとく生きる民衆の姿を伝える民話をはじめ、新中国誕生後採録の31篇収録。

中国の故事ことわざ
芦田孝昭

中国に生まれた故事成句、ことわざの中から、日本人に親しまれているものの意味来歴を説く。

民話・伝承シリーズ

民間説話 理論と展開 全2
S・トンプソン
荒木博之他訳

世界各地の民間説話につき、その発生、歴史、形式等、様々な角度から分析した民間説話研究の古典的名著。

世界最古の物語
H・ガスター
矢島文夫訳

四千年前にバビロニア、ハッティ等近東諸国の民衆により粘土板上に書かれた、世界で最も古い物語を復元。

古代エジプトの物語
矢島文夫編

古代エジプト人がパピルスに書き記した物語九篇と、ギリシャ語で遺された物語一篇を収め、解説を付けた。

ギリシャ神話
山室静

今日の西欧文化の源であるギリシャ神話を、著者独特の新しい感覚で面白く物語る。付北欧神話。

聖書物語
山室静

神話や、感動的な人間の記録、美しい詩歌、慈愛に満ちた教え等からなる聖書を、物語風に記した手引書。

ユダヤ笑話集
三浦靱郎訳編

数奇な運命を背負ったユダヤ民族の異常なまでの深さと鋭さをもつ笑話の数々を網羅する。

ユダヤの笑話と格言
Sラントマン編
三浦靱郎訳

小数民族として苦しい生活を強いられた、東欧のユダヤ人の笑話と格言だけをあつめた。

モンゴル国ものがたり
森田雄蔵

モンゴルの神話や伝説、民話などを豊富に紹介し、ジンギス・カン、ラマ教のエピソードを読切にまとめた。

世界の民話
矢崎源九郎訳編

世界各民族の特色のにじみ出る代表的民話を、一国あるいは一民族から一篇ずつ、計八〇篇を収録した。

世界のことわざ
矢崎源九郎編

全世界の民族の長年に亘る生活経験の結晶であることわざを、約一〇〇民族から約二五〇〇えらんで収めた。

人文科学

（背マーク＝黄A）

◇総記・入門・解説

新訳 哲学入門 B・ラッセル
禅とはなにか 関口真大
心理学入門 依田新
パーティー学 川喜田二郎
人類の百万年 モンテギュー
新版 歴史の見かた 和歌森太郎
民族学入門 諸民族と諸文化 イエンゼン他
日本文化人類学的入門 ハルミ・ベフ
現代語訳 学問のすゝめ 伊藤正雄訳

◇人生・箴言

幸福論 アラン
人生論 トルストイ
友情論 ボナール
恋愛論 スタンダール
愛すること生きること ロマン・ロラン
人生の探求 プーシキン他
愛と苦悩の人生 太宰治
名将名言行録 岡谷繁実
日本のことわざ 金子武雄
続 日本のことわざ 金子武雄
中国の故事ことわざ 芦田孝昭
世界のことわざ 矢崎源九郎編
格言の花束 堀秀彦編
高校時代を生きる 堀秀彦
恋愛 そのロマンと真実 堀秀彦
結婚 その幸福と背景 堀秀彦
愛と性のレポート 白石浩一
楽しい心理学 白石浩一
高校生心理学 白石浩一
愛の心理学 白石浩一
恋愛の方法 巻正平
生きる意味 椎名麟三
結婚と道徳 B・ラッセル
新訂 若き人間 H・デュモリン
若い女性の生きかた 田中寿美子
学生に与う 河合栄治郎
人生の日々 武者小路実篤
生きるための思索 串田孫一
ユーモア人生抄 三浦一郎
続 ユーモア人生抄 三浦一郎
ゲーテとの対話 エッカーマン
対話 人間いかに生くべきか 鈴木大拙他
恋愛カウンセリング 巻正平
若き死者たちの叫び J・ピレッリ
ほんの話 青春に贈る挑発的読書論 白上謙一
若き日の悩み 塩尻公明

人文科学

（背マーク＝黄A）

◇哲学・思想・宗教

イデオロギーの世界 N・ハリス
聖書物語 山室静
増訂 社会思想史十講 社会思想研究会編
中国の思想 村上吉廣
反骨の系譜 青地晨
歎異抄入門 歎異抄研究会編
日本名僧列伝 柏原祐泉他編
聖書の話 賀川豊彦
エピソード占星術 J・デラノ
やさしい易と占い 竹内照夫
聖書小事典 小鳴潤
新版 一粒の麦 賀川豊彦
死線を越えて 賀川豊彦
太陽を射るもの（続・死線を越えて） 賀川豊彦
壁の声きく時（続々・死線を越えて） 賀川豊彦

◇心理・教育・社会学

読書案内 心理学 依田新他編
心の眼に映る世界 島崎敏樹
新版 心理テスト 本明寛
自己の心理学 水島恵一
自己探求の心理学 水島恵一

◇民族・民俗・探検・地誌

定訳 菊と刀 ベネディクト
未開民族を探る 吉田禎吾
偉大なる航海者たち P・H・バック
秘境ブータン 中尾佐助
アフリカの部族生活 ターンブル
アラスカ・エスキモー 祖父江孝男
アマゾニア メガーズ
ヒマラヤの村 柳本杏美
ブワナ・トシの歌 片寄俊秀
アク・アク 全2冊 ヘイエルダール
ファツ・ヒバ 全2冊 ヘイエルダール
キャプテン コンティキ 全2冊 ヤコービー
北上の文化 加藤秀俊他
松竹梅 本田安次他
異国漂流物語 荒川秀俊
ブラック・エルクは語る ナイハルト
東方見聞録 マルコ・ポーロ
世界探検史 全2冊 サイクス
民間説話 理論と展開 全2冊 トンプソン
裸族シャバンテ 宮崎信江
日本伝説の旅 全2冊 武田静澄
アルプスからヒマラヤへ 近藤等
13の探検物語 S・ロジャース
太平洋航海記 C・クック
北極海に消えた気球 近野不二男
アフガニスタン紀行 岩村忍
笑いの誕生 塚崎進
霊長類の社会 H・クマー
人類の生活 馬淵東一編
シルクロードを全速力 D・マーフィー
神秘な国ネパール D・マーフィー

人文科学

（背マーク＝黄A）

日本を知る小事典(1)〈食婚・葬祭〉 大森志郎他編
日本を知る小事典(2)〈ことばと表現〉 大森志郎他編
日本を知る小事典(3)〈衣食住〉 大森志郎他編
日本を知る小事典(4)〈信仰・年中行事〉 大森志郎他編
日本を知る小事典(5)〈土農工商・芸能〉 大森志郎他編
日本を知る小事典(6)〈自然とこころ〉 大森志郎他編
野の民俗 草と子どもたち 中田幸平
遊牧の民ベドウィン P・コウル
暗殺教団の谷 F・スターク
バイクでシルクロード セヴェリン
日本論 戴季陶

◇歴史・考古学

〈世界の歴史全12〉

文明のあけぼの (1) 江上波夫他
古代ヨーロッパ (2) 秀村欣二他
東洋の古典文明 (3) 松本雅明他
六朝と隋唐帝国 (4) 布目潮渢他
中世ヨーロッパ (5) 堀越孝一他
宋朝とモンゴル (6) 栗原益男他
文芸復興の時代 (7) 赤井彰他
アジア専制帝国 (8) 山本達郎他
絶対主義の盛衰 (9) 大野真弓他
市民革命の時代 (10) 清水博他
帝国主義への道 (11) 石橋秀雄他
二十世紀の世界 (12) 穴戸寛他
年表要説 世界の歴史 金沢誠他編
年表要説 日本の歴史 安田元久編
教養人の世界史 全3冊 板倉勝正他
教養人の東洋史 全2冊 小倉芳彦他
教養人の日本史 全5冊 門脇禎二他
物語 史記 山崎純一訳
試練に立つ文明 トインビー
世界と西欧 トインビー
写真 登呂遺跡 森豊
文明の起源と考古学 G・ダニエル
マヤとアステカ 吉野三郎
東海道の宿 O・スタットラー
トインビーの中国観 山本新他編
ピラミッドの秘密 ツシャール
東京むかしむかし 斎藤・吉岡
新版 古墳文化小考 森浩一
古代エジプトの謎 酒井傳六
西域 人物と歴史 井上靖他
スフィンクスの秘密 ハッサン
下田物語 全3冊 O・スタットラー
明石原人の発見 高橋徹

自然科学

（青マーク＝青C）

◇総記・入門・解説

〈現代の博物誌全7〉

モンシロチョウの結婚指輪(日) 小原嘉明
見る月見られる月(月) 有馬次郎
プルートーンの火(火) 高木仁三郎
水はめぐる(水) 大場英樹
縄文杉は何を見たか(木) 丸野内棣
金属格子の中の文明(金) 山口幸夫
土は呼吸する(土) 薄井清
発見者ファラデー チンダル
ポケット・サイエンス 全5冊 レオクム
西洋科学史 全5冊 シュテーリヒ
エピソード科学史 全4冊 サトクリッフ
サイエンス？ボックス 折井英治
宇宙学入門 日下実男
星座の楽しみ 草下英明
星座手帖 草下英明
星の百科 草下英明
星座入門 F・ジーゲリ
糞尿博士世界漫遊記 中村浩
江戸の科学者たち 吉田光邦
閉じたせかい開いたせかい 有馬次郎
続宇宙学入門 日下実男
水なんでも質問箱 鈴木宏明
ビーグル号の艦長 メラーシュ
科学のたのしい発想法 シュナイダー
科学なんでもQ&A〈天文学〉 草下英明
科学なんでもQ&A〈地球〉 草下英明

◇天文・物理・化学・医学・地学他

おもしろい物理学 ペレリマン
続おもしろい物理学 ペレリマン
続々おもしろい物理学 ペレリマン
四次元の国のアリス C・V・ダレル
海洋文明学入門 日下実男
医戒 フーヘランド
蘭学事始 杉田玄白
楽しい数学 シャックル
聞こえない音の秘密 イ・バウリン
自然の中に奇跡はあるか メゼンツェフ
数学の文化史 全2冊 M・クライン
気球と飛行船物語 インファンチェフ
遊びの数学 ペレリマン
太陽とともに 自然と共存する技術 G・ボイル
深海探検記 W・ビービ
おもしろい数学パズル(1) M・ガードナー
おもしろい数学パズル(2) M・ガードナー
遺伝子のはなし ホーグランド
DNAの解読 ホーグランド
アジモフ博士の極小の世界・極小の世界 酒井昭伸訳
アジモフ博士の地球・惑星・宇宙 小隅黎訳
アジモフ博士の輝け太陽 酒井昭伸訳
生命と宇宙のはなし L・ムーヒン
現代天文百科 ミットン
恐竜の時代 小島郁生
おもしろい動物学 ジーン・ジョージ
チョウの季節 オーディッシュ

文学・芸術・読物（背マーク＝白D）

◇総記・入門・解説

文学をどう読むか　佐古純一郎
源氏物語入門　池田亀鑑
詩の作法　山本太郎
漢文入門　魚返善雄
近代絵画の見かた　G・シュミット
仏教美術入門　佐和隆研
音楽入門　藤本良造
改訂　日本芸能史入門　後藤淑
能の世界　古川久
新訂　かぶき入門　郡司正勝
新訂　近代日本文学の系譜　村松定孝
要説　日本文学史　伊藤正雄他
日本美術入門　河北倫明
狂言の世界　古川久

◇古典・詩歌・評伝・評論

古事記物語　太田善麿
源氏物語　秋山虔
今昔物語　西尾光一
平家物語　長野常一
西鶴名作物語　松崎仁
万葉名歌　土屋文明
万葉の旅　全3冊　犬養孝
万葉風土　明日香風　犬養孝
万葉風土　明日香風(続)　犬養孝
芭蕉と旅　全2冊　阿部喜三男他
愛の詩歌集　山本太郎編
啄木のうた　石川正雄編
牧水のうた　横田正知編
中也のうた　中村稔編
紙絵と詩　智恵子抄　伊藤信吉編
新しい詩への道　鳴岡晨
やさしい詩学　安西均
若い人への詩　新藤千恵編
抒情的人生相談集　鳴岡晨編
村野四郎　小海永二編
小野十三郎　安水稔和編
苛烈な夢　林富士馬他
詩人白秋その愛と死　鳴岡晨
偉大なる芸術家坂口安吾　森安理文
愛の狩人室生犀星　安宅夏夫
ことばの錬金術師泉鏡花　村松定孝
永遠の求道者高見順　土橋治重
可能性の騎手織田作之助　稲垣真美
転位する魂梶井基次郎　鈴木沙那美
〈青春の記録全3〉
わが一九四五年(1)　小川和佑編
無名者にとっての修羅(2)　小川和佑編
埋没した青春(3)　小川和佑編
中国詩選(I)　目加田誠
中国詩選(II)　大野実之助
中国詩選(III)　松浦友久
中国詩選(IV)　芦田孝昭
李白　詩と心象　松浦友久

文学・芸術・読物（背マーク＝白D）

◇古典・詩歌・評伝・評論

日本語再発見　杉本つとむ
物語西遊記　魚返善雄訳
物語水滸伝　魚返善雄訳
物語三国志　芦田孝昭訳
ギリシャ神話　山室静
世界最古の物語　H・カスター
古代エジプトの物語　矢島文夫編
ギリシア悲劇　呉茂一
ダンテ神曲物語　野上素一
デカメロン物語　野上素一訳
近松名作物語　高野正巳
ハイネの詩　万足卓訳
完訳西遊記　全3冊　村上知行訳
友へ贈る山の詩集　串田孫一他編
ギリシア神話小事典　B・エウスリン
唐詩の旅〈黄河篇〉　松浦友久
物語ローマ誕生神話　トーリーヌ
雨月物語・春雨物語　神保・棚橋訳
ミステリ百科事典　間羊太郎
ミステリー食事学　日影丈吉
完訳三国志(一)　龍戦虎争の巻　村上知行訳
完訳三国志(二)　孔明出陣の巻　村上知行訳
完訳三国志(三)　天下三分の巻　村上知行訳
完訳三国志(四)　南蛮討伐の巻　村上知行訳
完訳三国志(五)　赤壁五丈原の巻　村上知行訳
フィン・マックールの冒険　B・エウスリン
江戸の戯作絵本(一)　初期黄表紙集　小池正胤
江戸の戯作絵本(二)　全盛期黄表紙集　宇田敏彦編
江戸の戯作絵本(三)　寛政期黄表紙集　中山右尚
江戸の戯作絵本(四)　末期黄表紙集　棚橋正博
水滸伝(一)　天降る魔神の群れ　村上知行訳
水滸伝(二)　見参と林冲　村上知行訳
水滸伝(三)　鴻陽江の決戦　村上知行訳
水滸伝(四)　呉学究と入雲竜　村上知行訳
水滸伝(五)　梁山泊への結集　村上知行訳
江戸の戯作絵本〈続I〉　小池正胤他編
江戸の戯作絵本〈続II〉　小池正胤他編

社会科学（背マーク＝鼠B）

◇経済・社会

マルキシズムとは何か　河合栄治郎
マルクス主義入門　水田洋
社会科学の先駆者たち　T・レイゾン
社会主義思想史　水田洋
新しいアジアの構図　戴国煇
狭山裁判と科学　武谷三男編
冤罪の恐怖　青地晨
魔の時間　六つの冤罪事件　青地晨
朝を見ることなく　呉己順さん追悼文集刊行委員会
資本論小辞典　岡崎次郎
核凍結　市民のための反核マニュアル　憂慮する科学者同盟他
ヒトラーとナチス　H・グラーザー

落語百選

教養文庫
全４巻

麻生芳伸・編　金原亭馬生・さし絵　全巻揃え発売中！

落語の感覚に欠くことのできない季節の流れに散りばめて、なじみの深い噺を寄席の雰囲気の中に甦らせる。それぞれの落語のあとには簡潔な解説をつけた「読む落語」の決定版！

春

◎猫久◎たらちね◎湯屋番◎浮世床◎長屋の花見◎三人旅◎三方一両損◎饅頭こわい◎粗忽の使者◎明烏◎王子の狐◎猫の皿◎蟇の油◎〆込み◎花見酒◎崇徳院◎大工調べ◎四段目◎付き馬◎松山鏡◎豊竹屋◎一つ穴◎こんにゃく問答◎百年目◎あたま山

A６判／三三六頁

夏

◎出来心◎道灌◎狸賽◎笠碁◎金明竹◎鹿政談◎しわい屋◎百川◎青菜◎一眼国◎素人鰻◎二十四孝◎売り声◎船徳◎お化け長屋◎たが屋◎夏の医者◎佃祭◎あくび指南◎水屋の富◎紙入れ◎千両みかん◎麻のれん◎三年目◎唐茄子屋

A６判／三三六頁

秋

◎道具屋◎天災◎つるつる◎目黒のさんま◎厩火事◎寿限無◎時そば◎五人回し◎やかん◎ねずみ◎山崎屋◎真田小僧◎返し馬◎茶の湯◎三人無筆◎宿屋の仇討◎一人酒盛◎ぞろぞろ◎猫怪談◎野ざらし◎碁どろ◎千物箱◎死神◎粗忽の釘◎子別れ

A６判／四〇〇頁

冬

◎うどんや◎牛ほめ◎弥次郎◎寝床◎火焔太鼓◎首提灯◎勘定板◎鼠穴◎二番煎じ◎火事息子◎按摩の炬燵◎大仏餅◎文七元結◎芝浜◎掛取万歳◎御慶◎かつぎや◎千早振る◎薮入り◎阿武松◎初天神◎妾馬◎雪てん◎夢の瀬川◎粗忽長屋

＊落語題名一覧付

A６判／四〇〇頁